秋田県文化財調査報告書　第364集
払田柵跡調査事務所年報2002

払田柵跡

第121次調査概要

2003年３月

秋 田 県 教 育 委 員 会
秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

払田柵跡調査事務所年報二〇〇二
払田柵跡
第１２１次調査概要
秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

題字　新野直吉　書

払田柵跡

第121次調査概要

2003年３月

秋 田 県 教 育 委 員 会
秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

長森丘陵全景

平成14年９月10日撮影

上：北西方上空より鳥瞰する
長森丘陵西端部には復元された
外郭西門とこれに取り付く
材木塀が見られる
下：北方上空より望む
第121次調査区は写真中央、
丘陵西側の北向き緩斜面部にあたる

（２枚：秋田県埋蔵文化財センター提供）

鍛冶工房跡（北→）
鍛冶炉・掘立柱建物跡・足入れ穴（土坑）・金床石がセットで検出

第２段整地面調査風景（東→）
竪穴住居跡と掘立柱建物跡が狭い範囲内で重複する

序

国指定史跡払田柵跡は、管理団体である仙北町による環境整備も順調に進捗し、遺跡を訪れる方々も年とともに増加していることは喜びに堪えないところであります。

平成14年度の調査は、第６次５年計画の４年度にあたり、長森丘陵部北西側を第121次調査として実施しました。

調査の結果、古代において整地した平坦面上に、鉄と銅に関連する生産施設が発見されました。鉄生産では鍛冶炉と掘立柱建物跡・足入れ穴・金床石がセットとして検出されました。また隣接する箇所には、銅鋳造を想起させる坩堝・銅滓が見つかり、溶解炉体を構成した可能性のある塼（レンガ）も竪穴状遺構内から出土しました。更に東側区域では竪穴状遺構や掘立柱建物群が確認され、鍛冶・鋳造に携わった工人らの工房や工人を管理する役人の詰所的な施設であった可能性が考えられます。

また沖積地面では外郭北西部側の材木塀跡やこれに並行する溝跡なども検出されました。

本書は以上のような今年度の調査成果、並びに事務所の普及・関連活動の成果を収録したもので、古代城柵官衙遺跡の研究上、資するところが大きいと考えますので、御活用いただければ幸いと存じます。

最後に、調査並びに本書作成にあたって御指導・御助言を賜りました、文化庁、宮城県多賀城跡調査研究所、東北歴史博物館、秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所に心から感謝申し上げるとともに、史跡管理団体である仙北町・仙北町教育委員会、千畑町・千畑町教育委員会の御協力に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成15年３月

秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

所　長　芳　賀　　誠

例　言

1　本書は秋田県教育庁払田柵跡調査事務所が平成14年度に実施した、払田柵跡第121次調査及び調査成果の普及と関連活動の成果を収録したものである。

2　発掘調査並びに本年報作成にあたり、当事務所の顧問である秋田大学名誉教授・秋田県立博物館名誉館長新野直吉氏、国立歴史民俗博物館名誉教授・東北歴史博物館館長岡田茂弘氏から御指導いただいた。また次の方々より御教示を得た。記して謝意を表する。　（順不同・敬称略）
熊田亮介（秋田大学教育文化学部）　井上喜久男（愛知県立陶磁資料館）　穴澤義功（たたら研究会）　山口博之・高桑弘美（山形県埋蔵文化財センター）　八重樫忠郎（平泉町世界遺産推進室）　三上喜孝（山形大学人文学部）　北野博司・村木志伸（東北芸術工科大学歴史遺産学科）　小山内透（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）　小西秀典・山崎文幸（仙北町教育委員会）　山形博康（千畑町教育委員会）　王　勇（甘粛省博物館歴史部）　趙雪野（甘粛省文物考古研究所）　秋田県埋蔵文化財センター

3　遺構等の実測図は国土調査法第Ⅹ座標系を基準に作成した。実測図・地形図中の方位は座標系を示し、磁北はこれよりＮ７°30′00″Ｗであり、真北はＮ０°10′58″Ｅである。詳細は払田柵跡調査事務所年報1977『払田柵跡－第11・12次発掘調査概要－』（1978年）を参照いただきたい。

4　本書の作成・編集は当事務所学芸主事兼調査班長　高橋　学が行った。

凡　例

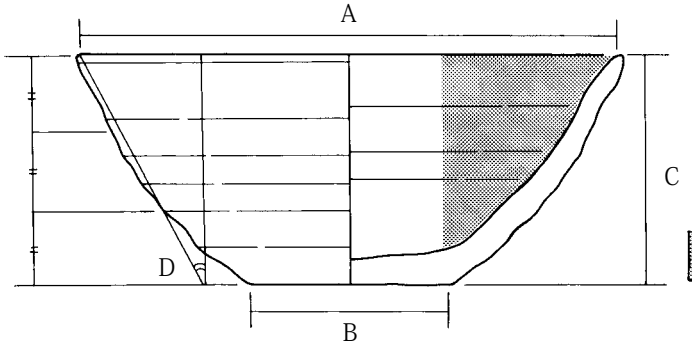
1　土色の記載については、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖　1997年版』を参考にした。

2　掘立柱建物を構成する柱掘形には、北東隅柱を起点として時計回りにＰ１、Ｐ２、Ｐ３・・・と順に番号を付した。なお“Ｐ”とは柱掘形の略記号であるＳＫＰから採ったものであり、本文中で表記する“建物跡”は、“掘立柱建物跡”を指す。

3　遺構には下記の略記号を使用した。

ＳＢ	掘立柱建物跡	ＳＩ	竪穴住居跡	ＳＫ	土坑	ＳＫＩ	竪穴状遺構
ＳＫＰ	柱掘形・柱穴	ＳＡ	柱列・板塀跡	ＳＤ	空堀・溝跡	ＳＭ	道路状遺構・轍跡
ＳＮ	焼土遺構	ＳＷ	炭窯跡	ＳＳ	製鉄関連遺構（鍛冶炉）		

4　坏形土器の計測基準は下図のとおりである。



Ａ：口径　　Ｂ：底径
Ｃ：器高　　Ｄ：外傾度
底径指数：$\frac{B}{A}$　　高径指数：$\frac{C}{A}\times 100$
黒色処理

払田柵跡調査事務所年報2002

目　　次

巻頭図版

序

例言・凡例

第１章　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第２章　調査計画と実績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

第３章　第121次調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

　第１節　調査経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

　第２節　検出遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

　第３節　小　結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62

第４章　調査成果の普及と関連活動・・・・・・・・・・・・・・・・84

報告書抄録

付図　長森丘陵西部の地形と第121次調査区配置

○挿図目次○

第１図　払田柵跡と周辺の古代・中世の遺跡

第２図　払田柵跡調査実施位置図

第３図　第１・２段整地面検出遺構配置図

第４図　ＳＩ1431竪穴住居跡、ＳＫ1479・1480土坑

第５図　ＳＩ1431竪穴住居跡、
ＳＫ1479・1480土坑出土遺物（１）

第６図　ＳＩ1431竪穴住居跡出土遺物（２）

第７図　第１段整地面（Ｑ・Ｉ１・Ｕトレンチ）検出遺構配置図

第８図　第２段整地面：西部の遺構配置図

第９図　ＳＫ1437・1438Ｂ土坑、ＳＸ1434鍛冶炉

第10図　ＳＫ1438Ｂ土坑出土遺物

第11図　第２段整地面：中央部の遺構配置図

第12図　ＳＫＩ1430Ａ～Ｄ竪穴状遺構（１）、
ＳＫＰ1443柱穴
ＳＫ1477・1478土坑、ＳＤ1428・1432溝跡

第13図　ＳＫＩ1430Ａ～Ｄ竪穴状遺構（２）

第14図　ＳＫＩ1430竪穴状遺構出土遺物（１）

第15図　ＳＫＩ1430竪穴状遺構出土遺物（２）

第16図　ＳＫＩ1430竪穴状遺構出土遺物（３）

第17図　ＳＫＩ1416竪穴状遺構

第18図　ＳＫＰ1443柱穴遺物出土状況

第19図　ＳＫＰ1443柱穴出土遺物（１）

第20図　ＳＫＰ1443柱穴土坑出土遺物（２）

第21図　第２段整地面：東部の遺構配置図

第22図　東部の遺構群：掘立柱建物跡（１）

第23図　東部の遺構群：掘立柱建物跡（２）、
ＳＫ1420土坑

第24図　ＳＩ1401・1423竪穴住居跡、ＳＮ1391・1392焼土遺構、ＳＫ1444土坑

第25図　ＳＩ1401竪穴住居跡出土遺物

第26図　ＳＩ1423竪穴住居跡、
ＳＮ1392焼土遺構出土遺物

第27図　ＳＫ1444土坑・ＳＢ1406建物跡出土遺物

第28図　Ｍ２トレンチ遺構配置図・土層図

第29図　Ｋトレンチ全体図、遺構配置図（１）

第30図　Ｋトレンチ遺構配置図（２）

第31図　ＳＫＩ1389・ＳＫＩ1400竪穴状遺構出土遺物

第32図　ＳＫ1399土坑出土遺物

第33図　ＳＡ1100材木塀跡・ＳＤ1446溝跡

第34図　ＳＤ1446・1395溝跡出土遺物

第35図　中世の検出遺構配置図

第36図　中世の遺構内出土遺物

第37図　近代の検出遺構配置図

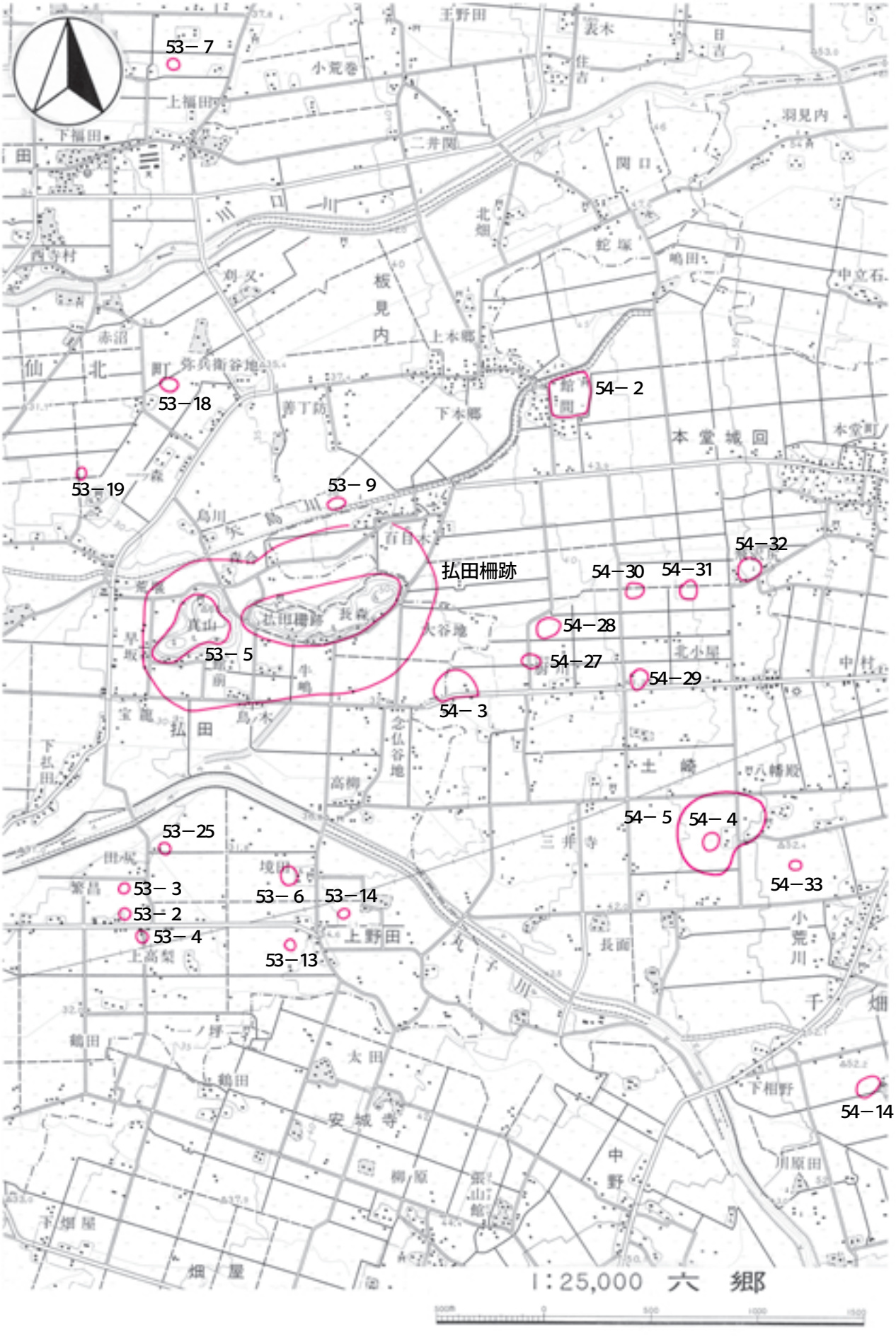
第38図　遺構外出土遺物（１）

第39図　遺構外出土遺物（２）

第40図　遺構外出土遺物（３）

第41図　遺構外出土遺物（４）

第42図　第１・２段整地面と検出遺構配置



第１図　払田柵跡と周辺の古代・中世の遺跡

第１章　はじめに

払田柵跡は秋田県仙北郡仙北町払田・千畑町本堂城回にある。遺跡は雄物川の中流域に近く、大曲市の東方約６㎞、横手盆地北側の仙北平野中央部に位置し、第三紀硬質泥岩からなる真山・長森の丘陵を中心として、北側を川口川・矢島川（烏川）、南側を丸子川（鞠子川）によって挟まれた沖積低地に立地する。

遺跡解明は、明治35・36年（1902・1903）の千屋村坂本理一郎による溝渠開削の際や、明治39年（1906）頃から開始された高梨村（現仙北町）耕地整理事業の際に発見された埋もれ木が、地元の後藤宙外・藤井東一らの努力によって歴史的遺産と理解されたのが端緒となった。

昭和５年（1930）３月に至り、後藤宙外が中心となって高梨村が調査を実施し、さらに同年10月、文部省嘱託上田三平によって学術調査が行われて遺跡の輪郭が明らかにされた。この結果に基づき、昭和６年（1931）３月30日付けで秋田県最初の国指定史跡となり、昭和63年（1988）６月29日付けで史跡の追加指定がなされて現在に至っている。史跡指定面積は894,600㎡である。

昭和40年代に入り、史跡指定地域内外の総合整備パイロット事業等の計画が立案された。そこで秋田県教育委員会は地元仙北町と協議の上、この重要遺跡を保護するための基礎調査を実施して、遺跡の実体を把握することを目的に昭和49年（1974）、現地に「秋田県払田柵跡調査事務所」を設置し、本格的な発掘調査を開始した（昭和61年（1986）４月、「秋田県教育庁払田柵跡調査事務所」と改称）。幸い、地元管理団体仙北町および地域の人々の深い理解により、史跡指定地内は開発計画から除外された。

史跡は長森・真山を囲む外柵と、長森を囲む外郭線からなる。長森丘陵中央部には政庁がある。政庁は板塀で区画され、正殿・東脇殿・西脇殿や付属建物群が配置されている。これらの政庁の建物にはⅠ～Ⅴ期の変遷があり、創建は９世紀初頭、終末は10世紀後半である。政庁の調査成果は報告書『払田柵跡Ⅰ－政庁跡－』（昭和60年３月）として公刊した。

一方、区画施設である外柵は東西1,370m、南北780mの長楕円形で、標高32～37m、総延長3,600m、外柵によって囲まれる遺跡の総面積は約878,000㎡である。外柵は１時期の造営で杉角材による材木塀が一列に並び、東西南北に八脚門が開く。外郭は、東西765m、南北320mの長楕円形で、面積約163,000㎡、最高地は標高53mである。外郭線の延長は約1,760mで石塁、築地塀（東・西・南の山麓）と材木塀が連なり、東西南北に八脚門を配する。外郭線は全体に４時期にわたる造営が認められる。なお外柵・外郭は、従来それぞれ外郭線・内郭と呼称していたが、これまでの調査成果を踏まえ、平成７年（1995）から呼び替えたものである。これら区画施設の調査成果は報告書『払田柵跡Ⅱ－区画施設－』（平成11年３月）として公刊した。

出土品には、須恵器・土師器・瓦・緑釉陶器・灰釉陶器・青磁（越州窯系）などのほか、斎串・曲物・挽物・鋤・楔などの木製品、漆紙文書・木簡・墨書土器・箆書土器などの文字資料がある。木簡は昨年度までに88点確認しており、「飽海郡少隊長解申請」「十火大粮二石二斗八升」「嘉祥二年正月十日」などと記された文書・貢進用木簡があり、「別當子弟」「狄藻」などの文字もある。墨書・箆書土器は480点以上出土・採集されており、「大津郷」「鷹空上」「懺悔」「小勝」「出羽」「音丸」「厨家」

「厨」「官」「舎」「館」「千」「主」「長」「酒」などの文字が認められる。

管理団体である仙北町は、昭和54年（1979）から保存管理計画による遺構保護整備地区の土地買い上げ事業をすすめており、昭和57年(1982)からは調査成果に基づいて環境整備事業を実施している。さらに平成３年（1991）から「ふるさと歴史の広場」事業により、外柵南門や大路東建物、河川跡・橋梁の復元整備、ガイダンス施設（払田柵総合案内所）の設置などを実施し、更に平成７年（1995）からは「ふれあいの史跡公園」事業により、政庁東方の官衙建物の整備などを実施した。平成11年（1999）には外郭西門の門柱及びこれに取り付く材木塀の復元整備を、本年度は外郭北門周辺の盛土整地を実施している。

なお、平成13年度までに実施した過去28年間の発掘調査面積は、秋田県埋蔵文化財センター（第102次）・仙北町・千畑町調査分を含め48,856㎡であり、遺跡総面積のうちの5.5％にあたる。

第１表　払田柵跡周辺の主な古代・中世遺跡一覧

地図番号	遺跡名	所在地	備　考	文献
53－２	繁昌Ⅰ遺跡	仙北町高梨	遺物包含地（木製品）：古代	1
53－３	繁昌Ⅱ遺跡	仙北町高梨	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
53－４	上高梨遺跡	仙北町高梨	遺物包含地（須恵器）	1
53－５	堀田城跡	仙北町払田	真山を利用した中世城館	2
53－６	境田城跡	仙北町払田	中世城館：天正18年破却	2
53－７	杉ノ下I遺跡	仙北町横堀	遺物包含地（須恵器）	1
53－９	鍛冶屋敷遺跡	仙北町板見内	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
53－13	四十八遺跡	仙北町上野田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
53－14	中村遺跡	仙北町上野田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
53－18	弥兵谷地遺跡	仙北町板見内	遺物包含地（須恵器）	1
53－19	一ツ森遺跡	仙北町板見内	遺物包含地（須恵器系中世陶器）	1
53－25	田ノ尻遺跡	仙北町払田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
54－２	本堂城跡	千畑町本堂城回	中世城館：戦国期本堂氏の居館	2
54－３	厨川谷地遺跡	千畑町土崎	埋蔵銭出土地（大正４年） 古代祭祀遺跡、2001年発掘調査	3
54－４	中屋敷I遺跡	千畑町土崎	寺院跡	1
54－５	中屋敷Ⅱ遺跡	千畑町土崎	古代集落跡、2002年発掘調査	
54－14	内村遺跡	千畑町千屋	古代集落跡、1980年発掘調査	4
54－27	厨川谷地Ⅱ遺跡	千畑町土崎	中世以降？、2000年新発見	
54－28	厨川谷地Ⅲ遺跡	千畑町土崎	古代、2001年新発見	
54－29	下中村遺跡	千畑町土崎	古代、2002年新発見、墨書土器出土	
54－30	飛沢尻遺跡	千畑町土崎	古代、2002年新発見、墨書土器・和鏡出土	
54－31	下飛沢遺跡	千畑町土崎	古代、2002年新発見	
54－32	上飛沢遺跡	千畑町土崎	古代、2002年新発見	
54－33	上館遺跡	千畑町土崎	中近世城館か、2002年新発見	

文献　1　秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（県南版）』1987（昭和62年）／2　秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』1981（昭和56年）／3　千畑町「古銭発掘由来記」『千畑町郷土史』1986　（昭和61年）／4　秋田県教育委員会『内村遺跡』1981（昭和56年）／地図番号は、文献１の地図番号に対応する

第２章　調査計画と実績

払田柵跡の調査は「払田柵跡調査要項」に基づき、５年計画を起案し、調査顧問の指導と助言を受け継続実施している。平成11年度から15年度の調査は、「払田柵跡発掘調査第６次５年計画」として調査顧問の承認を得ており、本年度はその第４年度にあたる。

事業費については、国庫補助金の内示(総経費1,600万円のうち、国庫補助金800万円)を得たので、次のような「平成14年度払田柵跡調査計画（案)」を立案した。

第２表　調査計画表

調査次数	調　査　地　区	調　査　内　容	調 査 面 積	調 査 期 間
第121次	外　郭　西　部 (仙北町払田字長森)	外郭西門東部地域 の遺構分布調査	500㎡	５月７日～ ７月31日
第122次	外　郭　西　部 (仙北町払田字長森)	政庁西方の推定官 衙域の調査	500㎡	８月１日～ 10月４日
合　計	２　地　区		1,000㎡	

第121調査は、外郭西門東部地域の遺構分布確認調査である。外郭西門の北東側は北向き斜面となるが、昨年度までの調査により、ここに複数の整地層が形成されていることが判明した。整地層面には鍛冶関係の遺構が認められたが、関連するであろう建物や竪穴などの様相が不明確であった。そこで本次調査では、整地層面での遺構の分布状況の確認と、帰属時期を特定すべく計画を立案した。

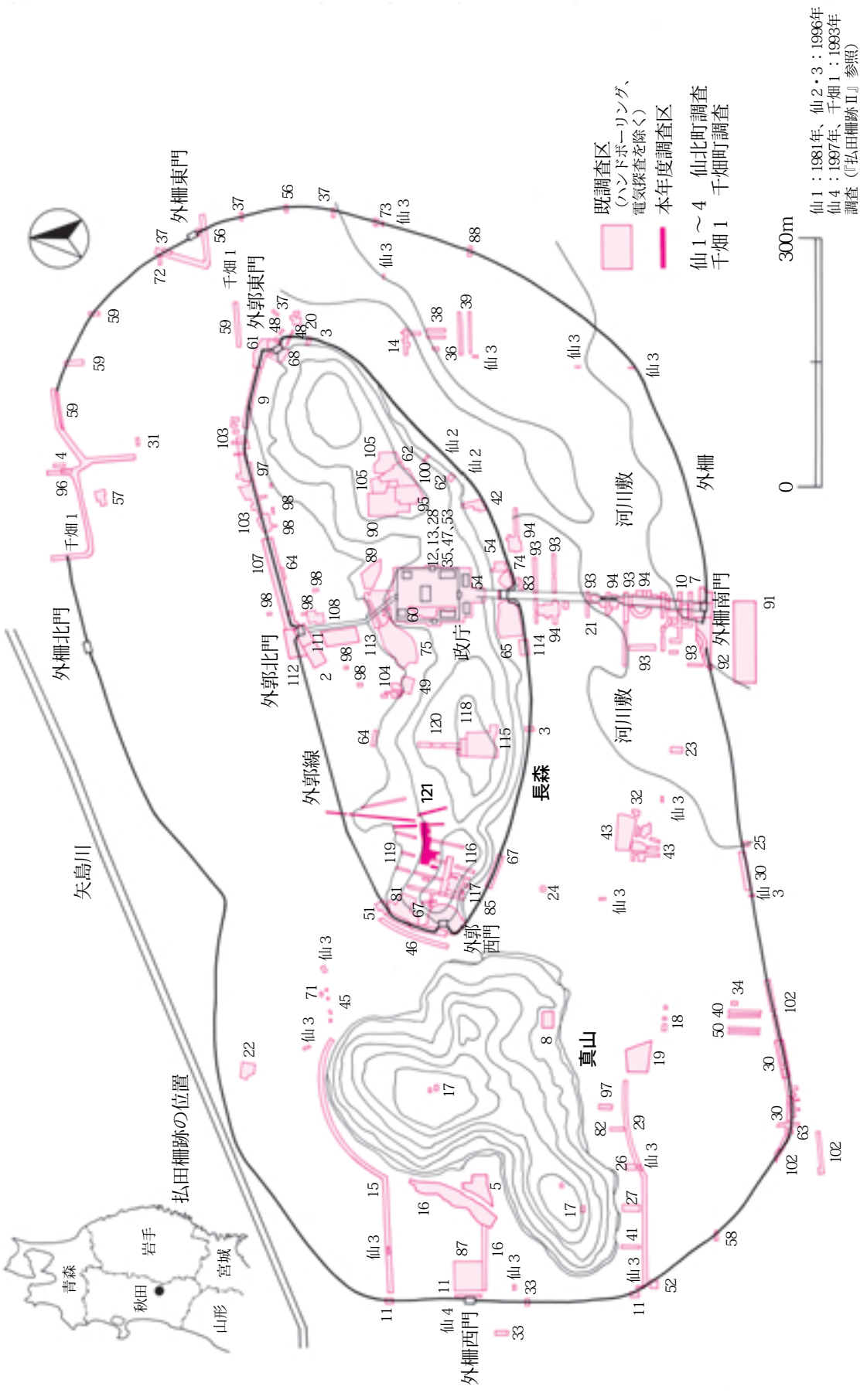
第122次調査は、政庁域西方の推定官衙域の調査である。昨年度までの調査によって、南北棟の建物やこれに付随する板塀跡が配置されるが、政庁域東側の遺構群と比して、その分布は希薄である。従って過年度調査区の北側にトレンチを設定することにより、建物等の有無及び広がりを把握するために計画を立案した。

平成14年度の調査の実績は第３表のとおりである。

第３表　調査実績表

調査次数	調　査　地　区	調　査　内　容	調 査 面 積	調 査 期 間
第121次	外　郭　西　部 (仙北町払田字長森)	外郭西門東部地域 の遺構分布調査	910㎡	６月３日～ 11月29日
合　計	１　地　区		910㎡	

本年度の調査は、結果的に第121次のみとなった。これは本次調査区が中世及び古代の複数の遺構確認面をもつこと、加えて遺構の重複、遺構底面までの深度（土量の多さ）・遺物量、遺物包含層の厚さなど、当初予想以上の作業量となり、第122次調査区に着手することができなかったことによる。



第２図　払田柵跡調査実施位置図

第３章　第121次調査の概要

第１節　調査経過

第121次調査の経過等を発掘調査日誌の記述から抜粋する。なお記述後に判明した事項は《　》内に追記する。

６月３日、本日より調査を開始。調査事務所で所長の挨拶、作業員説明会などを実施した。午後から作業員休憩用と機材収納用のテント２張りを現地に設営した。４日、調査区周辺の安全対策（看板設置、ロープによる調査区域の表示等）を実施する。５日からはトレンチ設定準備として、対象区域の雑木伐採・下草除去を行う。７日には３本のトレンチ（Ｍ・Ｎ・Ｏ）を設定する。10日よりトレンチ内粗掘りを開始する。Ｍトレンチ表土除去と並行して昨年度設定したＫトレンチにも作業員を振り分ける。19日、Ｋトレンチの第Ⅱ層面下で焼土遺構を２基確認する。同日、Ｎトレンチ、20日にはＯトレンチの表土除去にも着手。21日、Ｋトレンチの第Ⅲ層面で獣の歯らしき遺物が出土する。24日～27日にかけて図面・写真撮影の後、取り上げる《調査後の分析で馬歯と断定》。27日、新たにＰトレンチを設定し、表土除去に入る。28日、Ｐトレンチ表土下で２本の並行する溝と硬化面を確認する。近代の道路跡か《近代の馬車轍跡と推定》。Ｍ１トレンチで検出した焼土遺構内より炭化米が出土する《ＳＩ1401カマドＡ》。

７月１日、Ｎトレンチを完掘する。轍跡以外の遺構はなかった。４日、Ｏトレンチの西側にＱトレンチを設定し表土除去に入る。５日、Ｑトレンチ内より鉄滓が出土する。12日、昨年度設定し一部遺構確認していたＪ１トレンチ北部を再調査する。29日、Ｒ・Ｓトレンチを設定し掘り下げに入る。Ｓトレンチでは鍛冶炉らしき遺構が見つかる（ＳＸ1394）。30日、鍛冶炉は２基ありそうで、周辺から鉄滓・羽口と銅滓も出土した。31日、Ｓトレンチ・鍛冶炉の周りに上屋が伴うようである。同日は、市町村埋蔵文化財担当職員の現場実習が行われた。

８月６日、Ｋトレンチ北部で外郭材木塀跡を確認する。角材は３時期か《全４時期のうち、Ｂ期のみ抜き取られていた》。20日、お盆休み明けの初日。Ｋトレンチの遺構確認作業に入る。材木塀の南側の溝（ＳＤ1395）内には火山灰がブロック状に入っていた。28日、ＳＤ1395で栗材と思われる柱が打ち込まれた状態で検出される。写真撮影と図面作成を行う。

９月２日、Ｍ２トレンチは検出遺構が少なく、地山面まで掘り下げを完了する。３日、Ｐトレンチでは竪穴・建物掘形・土坑など多くのプランが、焼土・火山灰などと絡み、ぼんやりと見え出す。９日、Ｐトレンチの精査を続けるが、未だに建物としての組み合わせは不明。ただ焼土・火山灰を前後する時期の掘形が存在する。12日、Ｐトレンチ西端で溝状遺構を検出。中世の空堀か《ＳＤ877》。Ｒトレンチで方形プランの遺構を確認《ＳＫＩ1416》。上面が貼床状に堅く締まる。13日、Ｒトレンチ北東部で碁石出土。近世の轍跡と重複する位置にあたり、古代かそれ以降か不明。Ｐトレンチの建物掘形など確認面での全体写真撮影を行う。19日、払田柵跡周辺で稲刈りが始まる。Ｐトレンチ内の焼土遺構の一つ（ＳＮ1391）は、カマドの火床面の可能性が出てきた。土師器甕を倒立させ支脚としている。24日、Ｑ・Ｏトレンチの方形プランをＳＩ1430として掘り下げる《ＳＫＩ1430》。堆積土中に

は、焼けた礫や塼が見られる。25日、Ｐ・Ｊ１トレンチで確認した掘形等の平面プラン図を作成する。27日、ＳＩ1430は堅い床面が検出されたが、貼床をもつ床面もあり、複数の竪穴であった可能性が出てきた《最終的に４竪穴の重複》。30日、Ｏトレンチ・ＳＩ1431を切る溝《同住居カマド煙道部であった》上から完形の須恵器壺が出土。意図的に置かれたものか。

10月１日、Ｓトレンチで３基目の鍛冶炉を確認。周辺から鍛造剥片が出土。２日、ＳＩ1431の平面図作成に入る。４日、現場テントの眼前・真山北東側で落雷あり、杉の木を直撃する。８日、本年度の調査を現在行っている第121次調査のみに専念することで関係機関及び顧問の了解を得る。Ｐトレンチの南にＴトレンチを設定する。Ｐ・Ｍ１トレンチのＳＩ1401遺物出土状況の図面を作成し、取り上げる。９日、Ｋトレンチ最北端で溝（ＳＤ1446）を確認。材木塀と同一方向となる。Ｕトレンチを設定し、掘り下げに入る。17日、現況での調査区全体写真撮影を行う。18日、Ｓトレンチ土坑内より金床石出土。21日、遺跡見学会に向けての環境整備を開始する。23日、Ｐトレンチ南側壁面の土層断面図を作成する。31日、第55回顧問会議開催。調査現場を見て頂き、指導を仰いだ。竪穴内出土の塼が溶解炉・炉体の可能性があるとの指導を得た。

11月２日、遺跡見学会を開催する。初雪が舞う日となったが、県内はもとより青森・岩手・山形から見学者が訪れた。５日より一部のトレンチ埋め戻しに入る。同時に補足調査と図面作成を断続的に行う。12日、見学会以降雨天が続き、当初予定の20日には調査終了できない可能性が出てきた。14～18日までは積雪のため埋め戻しを含む一切の調査が全くできなかった。このため調査終了日を29日とすることにした。19日から埋め戻しと補足調査を再開する。27日には現地で作成図面の最終チェックを実施する。28日は埋め戻しに専念して、29日にテント、機材の撤収・後かたづけを行い、本年度の野外調査を終了した。

第２節　検出遺構と遺物

１　調査区の立地と基本層序

第121次調査地は、外郭西門の北東側に位置し、長森丘陵西側の北向き斜面から一部は沖積地に及ぶ。ここは昨年度第119次調査区の東・北側に隣接する。調査区での標高は、丘陵部斜面中位で43m、丘陵北端部で36m、さらに北側の沖積地は35mである。現況はかつて杉林・雑木林であったところを10数年前に伐採しているが、その後手が加えられておらず、下草や低木等で鬱蒼たる藪となっていた。調査区のトレンチ設定及び遺構精査については、次のような方針で臨んだ。

①第119次調査区の隣接地にトレンチを設定して遺構の確認調査をする。

②本区域は３年連続で隣接地を調査しており、調査の状況によっては面的な拡張も視野に入れる。

③第119次調査で確認した整地層と鍛冶関連遺構（鍛冶炉・掘立柱建物跡・竪穴等）の関係・配置等について見極める。

上記の方針に従い、最終的に設定したトレンチは、計９本（Ｍ～Ｕトレンチ）となった。その他に昨年度設定し、第Ⅰ層のみを掘り下げていたＫトレンチも対象とした。また昨年度Ｉ１・Ｊ１トレンチの一部（北端部）も再調査の形となった。設定したトレンチの配置は、付図の通りである。

調査区の基本層序は、Ｕトレンチ・西側壁面で観察した。（第７図土層図参照）

第Ⅰ層：暗褐色シルト質土（10Ｙ Ｒ3/4）表土、植物根が多くブカブカしている。層厚は５～10㎝。

第Ⅱ層：極暗褐色シルト質土（7.5Ｙ Ｒ2/3）部分的に炭化物が混入する。層厚10㎝前後。

第Ⅲ層：黒褐色シルト質土（10Ｙ Ｒ2/3～2/2）炭化物を少量含む。層厚20㎝前後。同層は下位ほど土壌の明度がやや高くなり、観察箇所によりⅢａ層：黒褐色土（10Ｙ Ｒ2/3）Ⅲｂ層：黒褐色土（10Ｙ Ｒ2/2）となる。

第Ⅳ層：にぶい黄褐色土（10Ｙ Ｒ4/3）地山漸移層、層厚10㎝前後。

第Ⅴ層：黄褐色土（10Ｙ Ｒ5/6）地山土

昨年度の調査により、第Ⅱ層と第Ⅲ層の間に整地（盛土）層が形成されていたことが判明しているが、本次・Ｍ２トレンチにおいて、これを追認した。整地層の状況は第28図中で説明する。なお、調査区内を東西に走る現道南側では、近代以降の削平を受け、表土層下が第Ⅳ層あるいは第Ⅴ層となる箇所が存在する。

当該地域では、過去の事例を参照にすると、概ね第Ⅱ層面で確認される遺構が中世となり、整地層並びに第Ⅲ層中では古代、第Ⅳ層まで掘り下げると縄文時代の遺構が検出される。

本調査において検出した遺構と出土遺物は、下記の通りであり、次項より古代、中世、縄文時代、近代の順で概略を報告する。なお今次調査で新規に付した遺構番号は、1387～1480であり、1386以前の番号は、昨年度までに登録していた番号となる。

【古　代】掘立柱建物跡21棟、竪穴住居跡３軒、竪穴状遺構７基、鍛冶炉６基、炭窯跡１基、焼土遺構12基、土坑29基、溝跡10条、柱穴列４列、材木塀跡１列

《遺物》須恵器・土師器・瓦・木製品・鉄製品・石製品・土製品・炭化米　等

【中　世】空堀跡１条、竪穴状遺構２基、土坑３基、道路状遺構１条

《遺物》須恵器系・瓷器系陶器、青磁・白磁

【縄　文】溝状遺構（陥し穴）７基　《遺物》縄文土器、石製品、石鏃・剥片

【近　代】馬車轍跡

２　古代の検出遺構と遺物

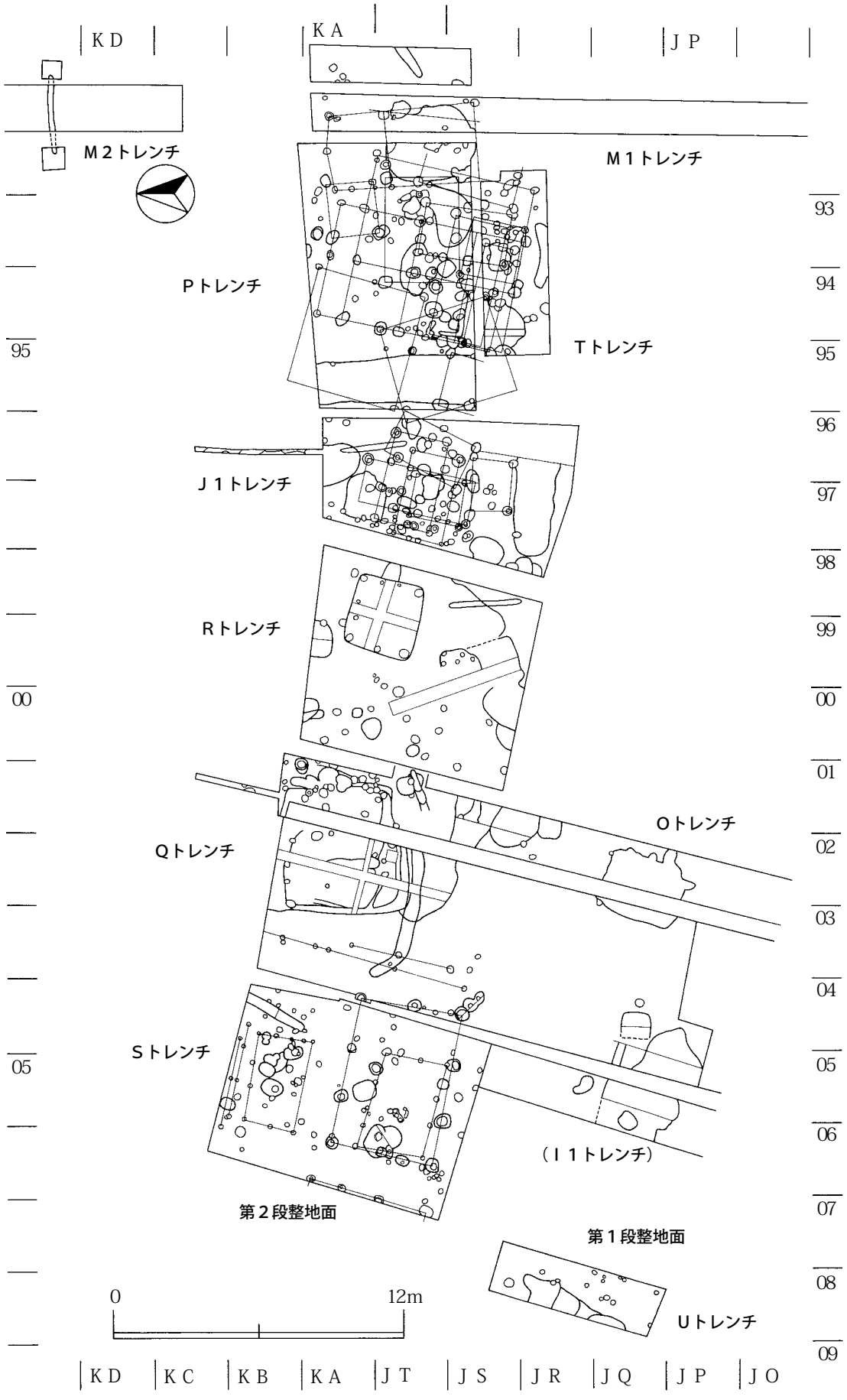
昨年度の調査及び本年度の追跡調査により、長森丘陵部西側北向き斜面において、古代整地層（面）の存在が明確となった。本項では、まず各整地面に名称を付した上で、その概要を記す。次に各整地面単位での検出遺構と出土遺物を明示する構成としたい。

【第１段整地面】

最上段の整地面、斜面中位に位置する。標高は42～43.5m。視覚的には幅７ｍ前後の平坦面となるが、標高43.5mライン上に沿わせるように各施設（竪穴・土坑・溝等）を構築・配置した結果、段状の地形が現れ出たと解することができる。整地面・遺構の構築時期は、十和田ａ火山灰降下前、９世紀代に収まる。

【第２段整地面】

第１段整地面の下段に位置する。標高は40～41ｍ、上位段との差は漸移的だが50～70㎝程度である。整地面の幅は14m程となり、構築される遺構数も非常に多い。ただ東側域では、中世以降現代に至る



第3図　第1・2段整地面検出遺構配置図

まで、削平等の土地改変を受けており、東西に走る現道は、本段の北端に沿うように作られる。整地面・遺構の構築時期は、十和田ａ火山灰を挟む前後の時期、９世紀後半から10世紀前半代までか。

【第３段整地面】

第２段整地面の下段に位置する。標高は約39m、上位段（現道面）との差は約40㎝。その幅は５～７m程となり、確認された遺構は少ない。なお本段北端部には、中世の空堀（ＳＤ877・1319）が東西に構築される。

【第４段整地面】

第３段整地面の下段に位置する。標高は約38m、上位段との差は明瞭であり約55㎝となる。その幅は７～８m程であり、確認された遺構は少ない。本整地面の形成時期は、昨年度Ｈ２・Ｉ２トレンチでの観察により、十和田ａ火山灰降下・堆積期を上限とし、10世紀中葉を下限とする頃と判断する。

【第５段整地面】

第４段整地面の下段に位置する。標高は約37m、上位段との差は明瞭であり約90㎝となる。その幅は４～５m程と狭くなり、確認された遺構は非常に少ない。同層面は、昨年度最東端に設定したＬトレンチの更に東方向に連続して延びる面と同一と考えられる。

【第６段整地面】

第５段整地面の下段に位置し、丘陵地北端・最下位の整地面となる。標高は約36m、上位段との差はＭ２トレンチでは明瞭で約90㎝となるが、東隣のＫトレンチでは僅か30㎝にすぎない。同層面の構築時期は不明瞭ではあるが、Ｋトレンチでの精査により、十和田ａ火山灰降下期を前後する時期及び中世（13世紀代）に使用されていたことは確実である。

（１）第１段整地面検出の遺構と遺物

本整地面の遺構は、Ｏ・Ｑ・Ｕトレンチで検出された竪穴住居跡１軒、土坑４基、炭窯跡１基がある。

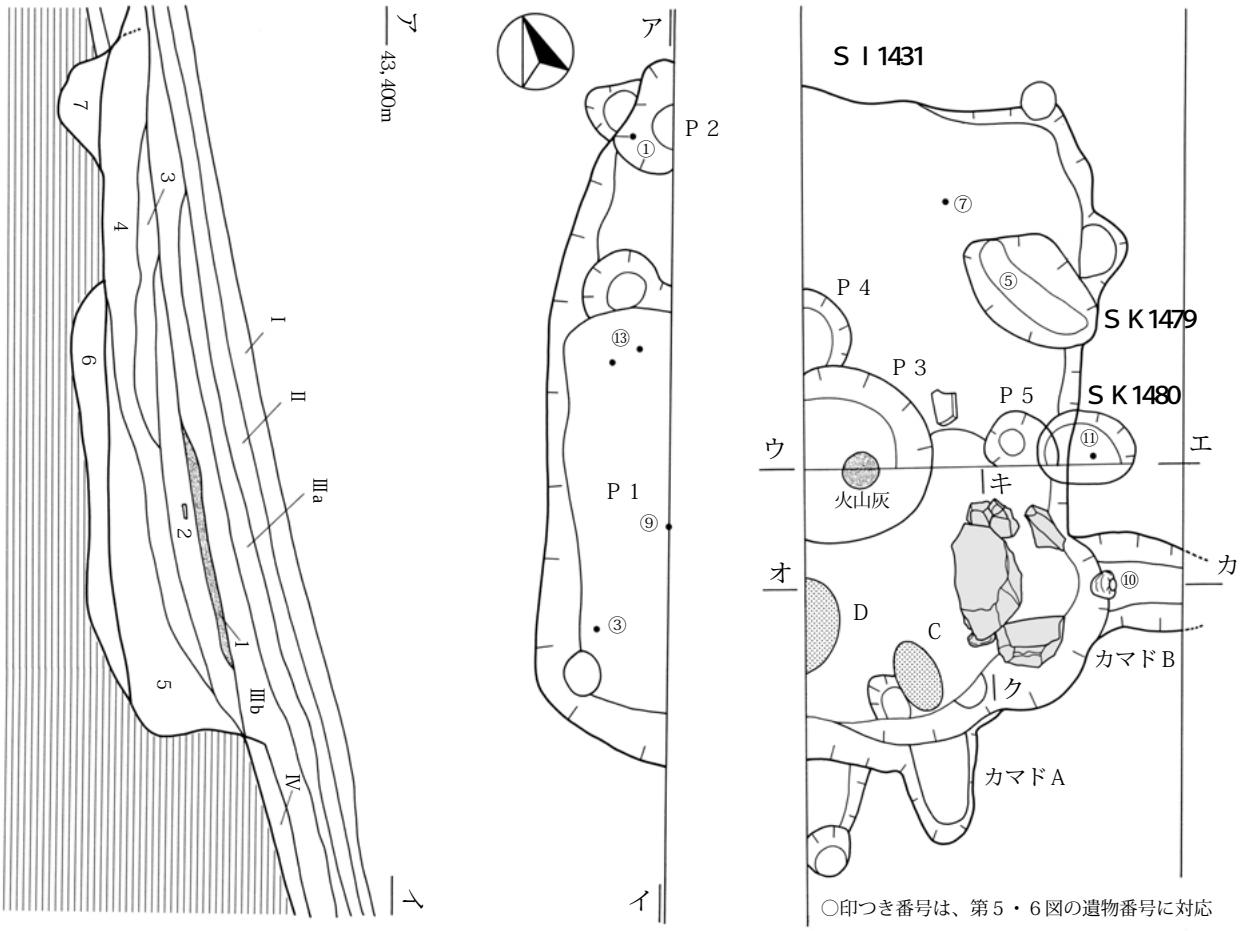
ＳＩ1431竪穴住居跡（第４～６図、図版３）

Ｏ・Ｑトレンチ南東部、第Ⅲｂ層で確認した。竪穴東側壁をＳＫ1479・1480土坑により切られる。規模は、南北の長さが3.6m、東西長が2.6～2.8mのやや歪な長方形を呈する。壁高は斜面上位の南側では70㎝となるが、北側では僅か10㎝にすぎない。床面上には、幾つかの柱穴等（Ｐ１～５）が掘り込まれるが、壁溝はなく、主柱穴も明確ではない。Ｐ１～５は貼床下に位置し、竪穴より旧い段階の構築となる。ただ配置を考慮すると、Ｐ１は竪穴構築時の掘形とも推測される。Ｐ３は、径約90㎝、深さ70㎝の円形を呈する土坑である。

竪穴本体の堆積層は大きく５層（１～５層）に分けられる。地山粘土・炭化物の混入具合から判断して２～５層は、人為的埋土と考えられる。最上層である１層には十和田ａ火山灰が含まれる。

カマドは南側壁面東寄り（Ａ）と東側壁面南寄り（Ｂ）に位置するが、残存状態の観察により、ＡからＢに作り替えがなされたと類推される。カマドＡは、床面上には火床面（Ｃ）と袖部の芯材掘形と思われる小ピットが残るのみである。壁から南には長さ55㎝、幅40㎝の煙道が延びる。

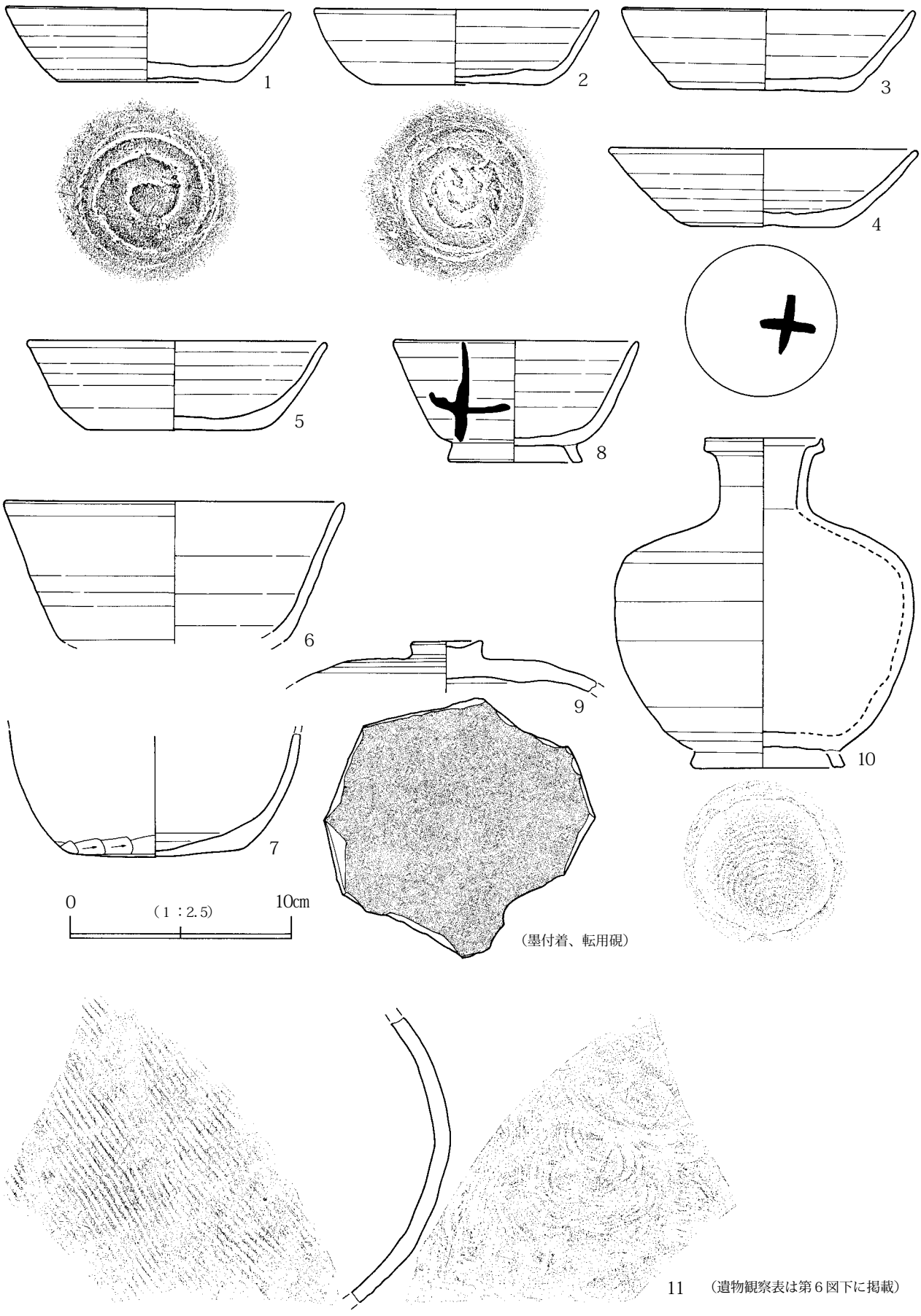
カマドＢは、石組の両袖部と天井石を遺す。袖部は幅20～35㎝、厚さ15㎝前後、長さ（高さ）30㎝程の石を片側につき二つ並べ埋め込んで構成される。その上には原位置を保つ天井石（長さ62㎝、幅



S I 1431

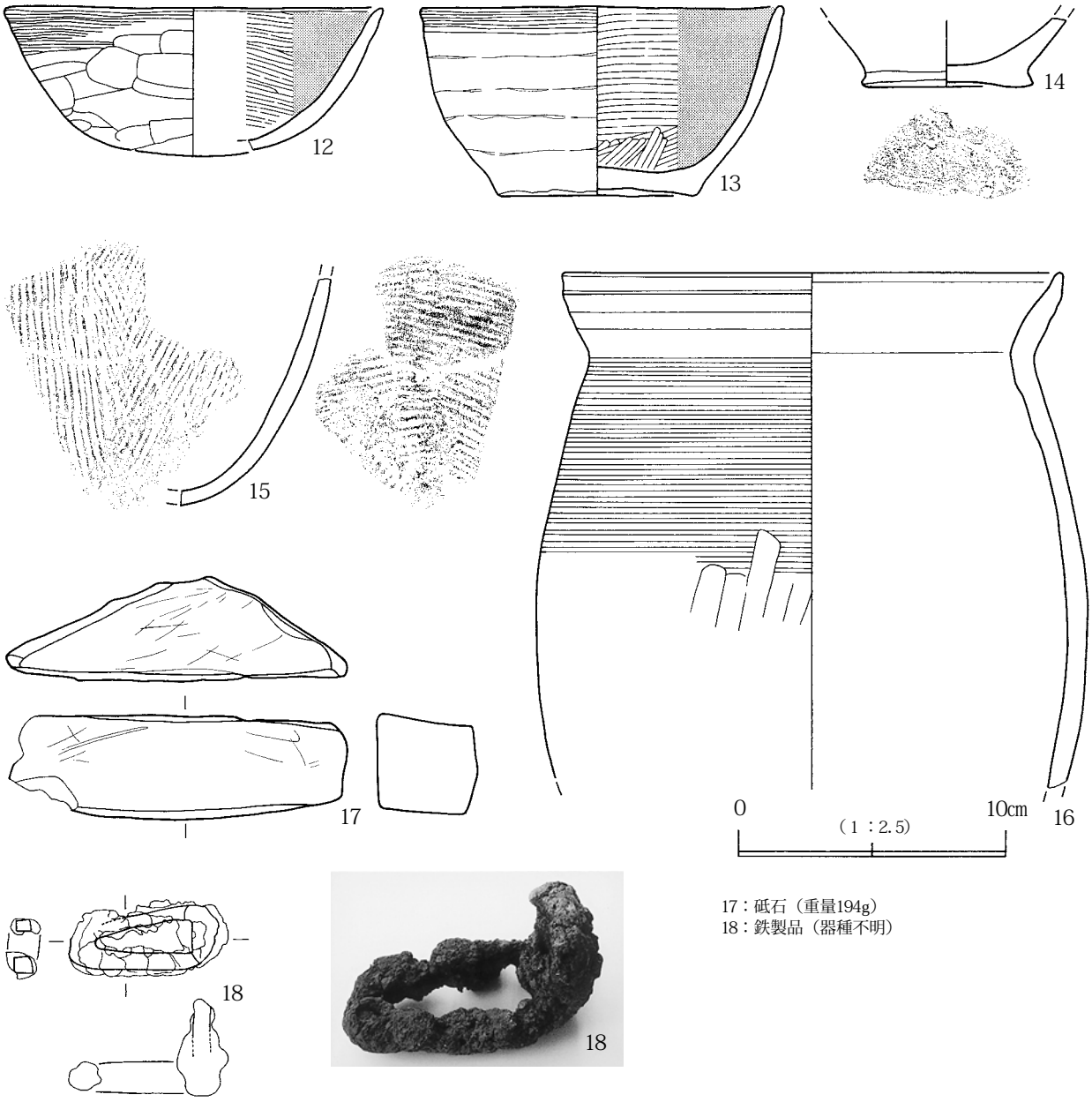
1：にぶい黄褐色シルト質土（10Y R4/3）火山灰ブロック 礫・炭化物少量含む
2：黒褐色シルト質土（10Y R3/2）遺物・礫多く、地山粘土少量含む。人為堆積層
3：黒褐色シルト質土（10Y R3/1）
4：黒褐色シルト質土（10Y R2/2）人為堆積層
5：黒色シルト質土（10Y R1.7/1）炭化物を大量に含む
6：暗褐色シルト質粘土（10Y R3/3）Ｐ１埋土。地山粘土斑状に多く、炭化物もやや多く含む、人為堆積層
7：黒色シルト質土（10Y R2/1）Ｐ２埋土
8：黒褐色シルト質土（10Y R3/1）
9：褐色シルト質粘土（10Y R4/4）20層と同質
10：暗褐色シルト質土（10Y R3/3）
11：暗褐色シルト質粘土（10Y R3/4）
12：黒褐色シルト質土（10Y R2/2）22層と同質
13：黒褐色シルト質土（10Y R2/3）
14：にぶい黄橙色粘土（10Y R6/4）
15：暗褐色シルト質土（10Y R3/3）
16：にぶい黄褐色粘土（10Y R5/3）
17：黒褐色シルト質土（10Y R2/2）
18：黄褐色粘質土（10Y R5/6）
19：暗褐色シルト質粘土（10Y R3/4）
20：褐色シルト質粘土（10Y R4/4）地山粘土をブロック状に多く含む人為堆積層
21：にぶい黄褐色シルト質粘土（10Y R4/3）地山粘土をやや多く含む
22：黒褐色シルト質土（10Y R2/2）地山粘土殆ど含まず
23：褐色シルト質土（7.5Y R4/3）焼土・炭化物・地山粘土をやや多く含む
※Ｐ３堆積層である13～17層は、黒褐色シルト質土と粘土が互層となる人為堆積層

第４図　S I 1431竪穴住居跡



（遺物観察表は第６図下に掲載）

第５図　ＳＩ1431竪穴住居跡、ＳＫ1479・1480土坑出土遺物（１）



17：砥石（重量194g）
18：鉄製品（器種不明）

番号	種別	器形	出土位置・層位	特　　徴	口径 cm	底径 cm	器高 cm	底径指数	高径指数	外傾度
5－1	須恵器	坏	ＳＩ1431Ｐ２床面直上	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り、口縁上部に細かな打ち欠きがほぼ全周する	12.7	8.2	3.3	0.64	26.0	28
2	須恵器	坏	ＳＩ1431－２層	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り、完形で出土	12.9	7.9	3.4	0.61	26.4	26
3	須恵器	坏	ＳＩ1431Ｐ１上床面直上	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り	13.2	7.9	3.6	0.60	27.3	27
4	須恵器	坏	ＳＩ1431カマド内２層	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り→「十」墨書、内面全体が使用による擦りか	13.8	6.8	3.6	0.49	26.1	40
5	須恵器	坏	ＳＫ1479	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り	13.4	8.0	4.0	0.60	29.9	25
6	須恵器	坏	ＳＩ1431	内外：ロクロ調整	15.2		(6.4)			
7	土師器	坏	ＳＩ1431床面	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り→体部下半手持ちケズリ、椀状を呈する		7.8	(5.5)			
8	須恵器	台付坏	ＳＩ1431－５層	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り→付高台、台部内に墨付着、体部倒位「十」墨書	11.0	6.0	5.5	0.55	50.0	22
9	須恵器	蓋	ＳＩ1431－２層	内外：ロクロ調整、内面転用硯に使用→周縁部打ち欠き			(2.4)			
10	須恵器	台付壺	ＳＩ1431カマド内２層	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り→付高台、台部打ち欠きで欠損	5.2	7.0	(14.9)			
11	須恵器	甕	ＳＫ1480	外：平行タタキ、内：青海波アテ具			(12.8)			
6－12	土師器	坏	ＳＩ1431Ｐ３内	非ロクロ、外：ケズリ→口縁横ナデ、内：ミガキ→黒色処理	14.1		5.6			
13	土師器	坏	ＳＩ1431Ｐ１内６層	非ロクロ、外：ナデ→口縁横ナデ、内：ミガキ→黒色処理、底：ナデ	13.4	7.5	7.1	0.56	53.0	14
14	土師器	甕	ＳＩ1431カマド周辺	非ロクロ、底：木葉痕、被熱		6.2	(2.5)			
15	土師器	長胴甕	ＳＩ1431	砲弾形底部、外：平行タタキ、内：平行アテ具			(8.4)			
16	土師器	甕	ＳＩ1431カマド周辺床面	内外：ロクロ調整、外面ケズリ、被熱・媒状炭化物付着	18.8		(19.4)			

第６図　ＳＩ1431竪穴住居跡出土遺物（２）

34㎝、厚さ15㎝、重量約37kg）が乗る。これらの石材は肉眼観察では、基盤層に存在する硬質泥岩を切り出していると考えられる。煙道は幅50㎝でカマドＡと同形態と見られるが、先端部は調査区外となり、長さは不明である。なお焼土面はＣの北西側床面上（Ｄ）にも存在する。

遺物（第５・６図）は、住居内及びＰ１・２・４から出土したが、カマドＡ・Ｂの位置する住居内南東部近辺に集中する。器種は、須恵器坏（１～６）・蓋（９）・壺（10）・甕、土師器椀（７）・坏（12・13）・甕（14～16）、砥石（17）、器種不明の鉄製品（18）・鉄滓と軽石も出土した。またカマドＢ火床面周辺の焼土内より少量ながら炭化米が発見された。

10と４はカマドＢ廃棄段階での埋納遺物である。10は須恵器台付壺であり、燃焼部奥壁上、最上層において正位あるいは口縁を東に向けるようにして発見された。台部を全て欠くものの（意図的な打ち欠きか）、その他はほぼ完形を保っていた。４は完形の須恵器坏であり、壺の直下、燃焼部内２層下位で正立状態で出土した。底部に「十」の墨書が見られる。

ＳＫ1479・1480土坑（第４・５図）

Ｏ・Ｑトレンチ南東部、第Ⅲｂ層面で確認した。両土坑ともＳＩ1431竪穴住居跡の東側壁を切り込んで構築される。ＳＫ1479は長さ80㎝、幅55㎝の楕円形を呈し、深さは30㎝程である。遺物は須恵器坏（第５図５）が１個体出土した。ＳＫ1481は、長さ50㎝、幅40㎝の楕円形を呈し、深さは約15㎝である。遺物は須恵器甕（11）が１点出土した。

ＳＫ1439Ａ～Ｄ土坑（第７図）

Ｕトレンチ西側、第Ⅲ層面で検出した。プラン確認の段階では、軸線が等高線に直交する方向（Ｎ－30°－Ｅ）をとる一辺が約4.5ｍの竪穴状遺構とした。精査の結果、長さ1.5ｍ程度の不定形土坑が少なくとも４基（南からＡ～Ｄ）重複することで、結果的に竪穴状を示す遺構と判断した。新旧関係は、旧い方からＣ→Ｂ→Ａ、Ｃ→Ｄとなる。深さは30～65㎝とばらつきがあり、特に底面の凹凸が顕著である。堆積土は６層に分けられるが、２・３層は、地山粒子を殆ど含まないシルト質土で人為的に埋めている。なお層中に火山灰の混入は認められなかった。遺物は２層中より須恵器甕破片、羽口などが少量出土した。

以上の状況から、本遺構は土取り穴の集合体と推測される。同様の遺構は、同一整地面で昨年度確認したＳＫＩ1321（Ｈ１トレンチ）やＳＫＩ1330（Ｉ１トレンチ）がある。

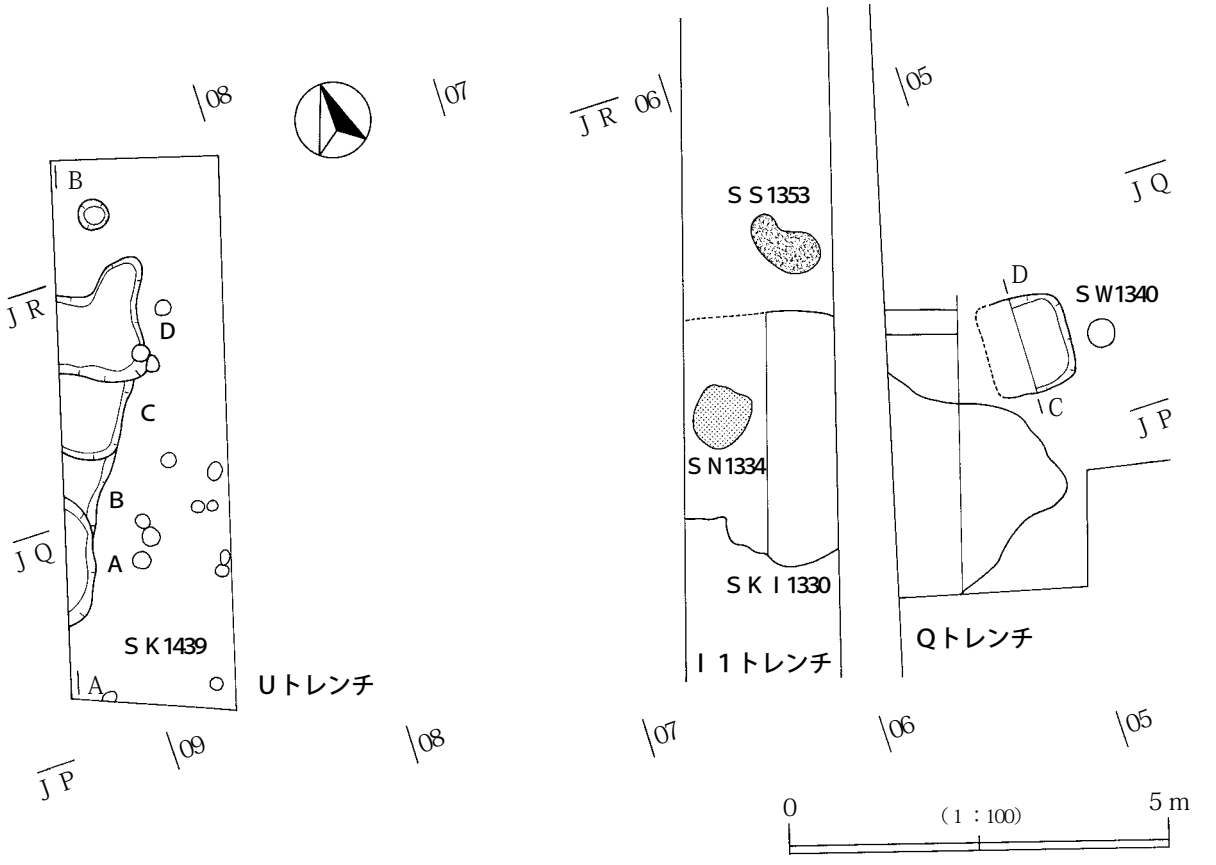
ＳＷ1340炭窯跡（第７図、図版４）

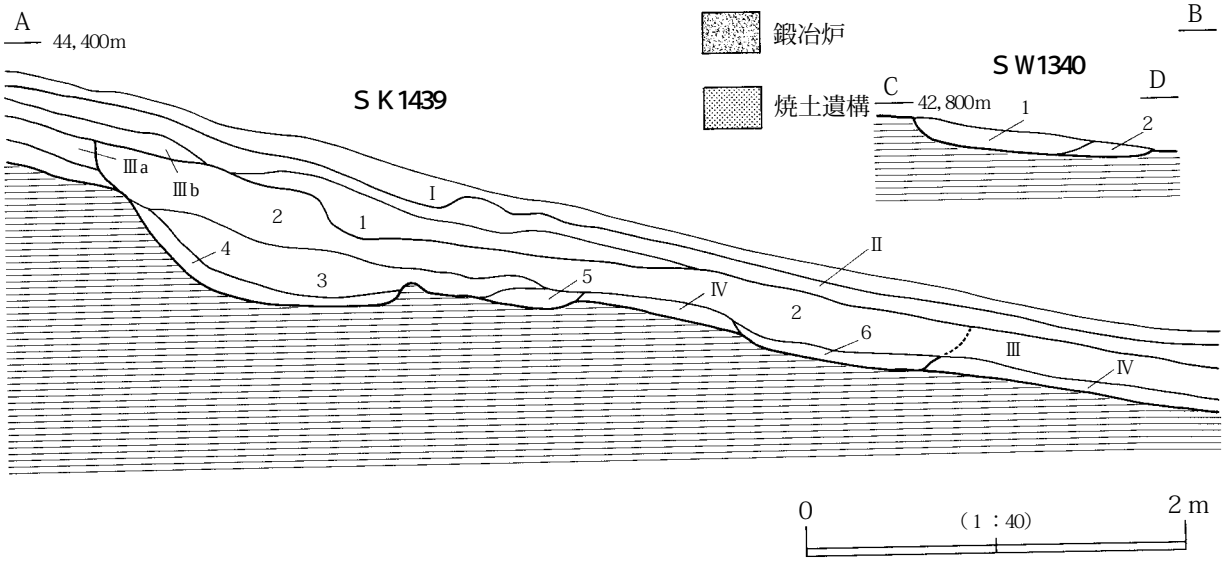
Ｑトレンチ南西部、第Ⅲ層で検出したが、昨年度のＩ１トレンチ拡張区でプランを確認していた遺構である。ＳＫＩ1330竪穴状遺構の東側に隣接する。規模は一辺が1.55ｍの隅丸方形を呈し、深さは10㎝前後である。精査の結果、炭化物を主とする堆積層である点と、壁面が熱を受けて赤化していることから、炭窯跡と判断した。遺物の出土はない。

（２）第２段整地面検出の遺構と遺物

本段で検出された遺構は、非常に多い。ここでは、次のように遺構群を３分割して記述する。

①西部の遺構群（第８図）：概ね04ライン以西、ＳトレンチとＱトレンチ西端部の遺構群
②中央部の遺構群（第11図）：98～04ライン、Ｒ・ＯトレンチとＱトレンチ東側の遺構群
③東部の遺構群（第21図）：98ライン以東、Ｊ１・Ｐ・Ｔ・Ｍ１トレンチの遺構群





SK1439
1：黒褐色シルト質土（10YR3/2）地山粘土ほとんど含まず
2：黒褐色シルト質土（10YR2/2）地山粘土・炭化物少量含む
3：黒色シルト質土（10YR2/1）地山粘土少量含む
4：暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土やや多く含む
5：暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粘土がブロック状に入る
6：にぶい黄褐色シルト質土（10YR4/3）地山粘土がブロック状に入る
※下位ほど締まり弱

SW1340
1：黒褐色シルト質土（10YR2/3）炭化物・地山粒子多く含む
2：黒色炭化物土（10YR1.7/1）
焼面色調：赤褐色（2.5YR4/6）

第7図　第1段整地面（Q・I1・Uトレンチ）検出遺構配置図

なお各トレンチ北端部、現道寄りの箇所は、近代以降に削平を受けており、表土下が第Ⅳ層（地山漸移層）あるいは第Ⅴ層（地山面）となる。

①西部の遺構群（第８～11図、巻頭図版２）

Ｓトレンチの緩斜面を中心に掘立柱建物跡４棟、鍛冶炉６基、土坑３基、柱穴列４列が検出された。このうち、いくつかの鍛冶炉と土坑は建物内に納まるような位置関係にあることから、そのような配置を保つ複数の遺構をまとめてみると、建物跡は鍛冶炉等を内包する工房跡と考えることができる。

以下では、建物と鍛冶炉あるいは“足入れ穴”（土坑）の組み合わせが推測されるまとまりを一つの工房跡として報告する(註１)。ただ建物内に収まらない鍛冶炉や調査区外に及ぶ建物の存在、柱穴列もあり、ここで示す３箇所以上の工房が稼働していたことになる。これら遺構は平均８°の傾斜地に立地する。なお出土遺物は、土坑を除き認められなかった。

《第１鍛冶工房跡》（第８～10図、図版４）

Ｓトレンチ南側に位置し、ＳＢ1440掘立柱建物跡、ＳＳ1434鍛冶炉、ＳＫ1438Ａ・Ｂ土坑（足入れ穴）で構成される。

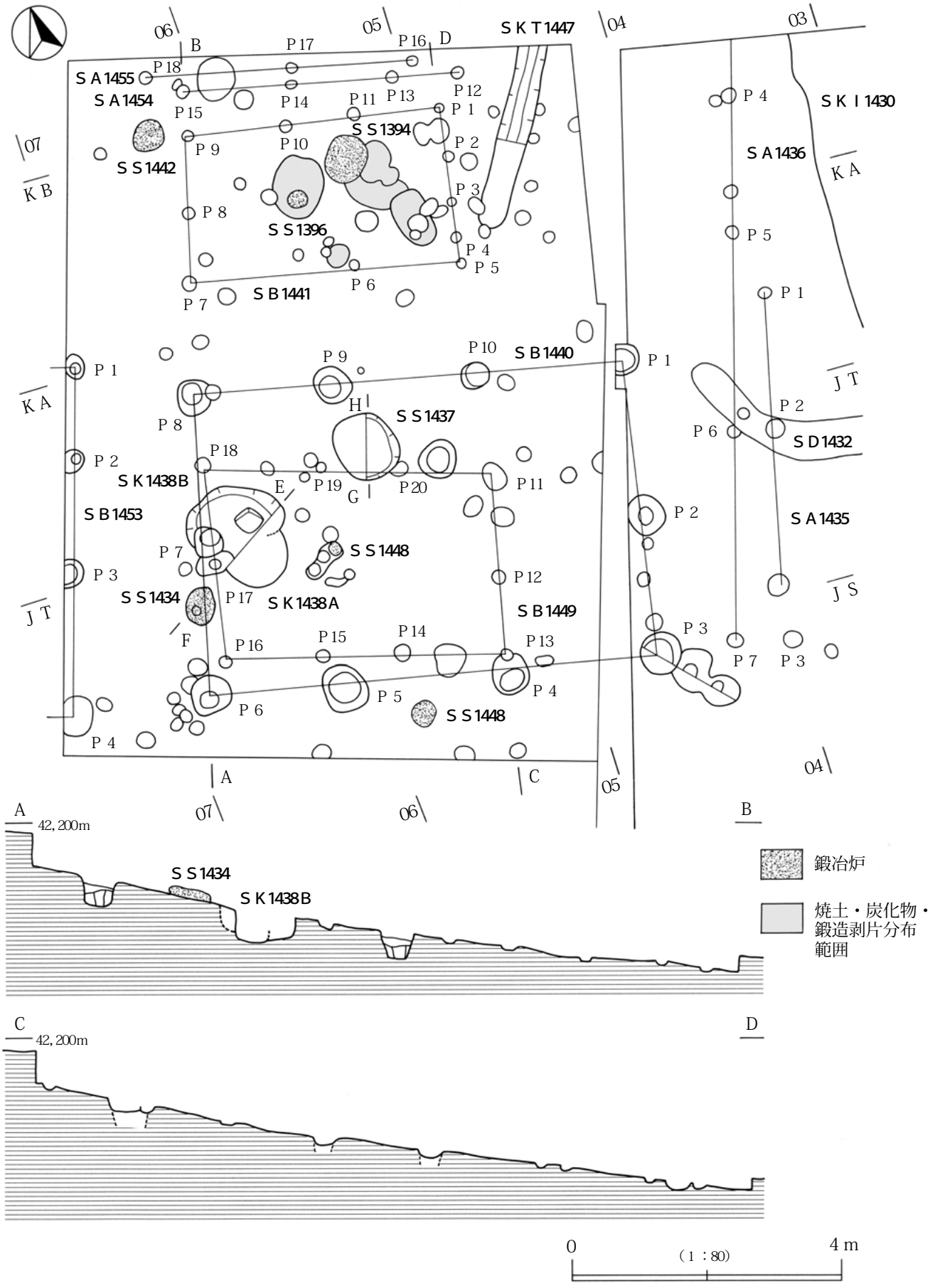
ＳＢ1440建物跡は、第Ⅳ層面で確認した桁行３間×梁行２間の東西棟建物跡である。ＳＢ1449建物跡と重複し、これより旧い。平面規模は、桁行総長・北側柱列で6.4m、柱間（Ｐ８－９－10－１）寸法は、西から2.0m＋2.2m＋2.2mである。南側柱列で6.65m、柱間（Ｐ６－５－４－３）寸法は、西から1.95m＋2.5m＋2.2mである。梁行総長は東側柱列で4.4m、柱間（Ｐ１－２－３）寸法は、北から2.3m＋2.1m。西側柱列で4.45m、柱間（Ｐ８－７－６）寸法は、北から2.2m＋2.25mとなる。

柱穴掘形は、北側柱列で一辺が50㎝前後の略円形、南側柱列で一辺が60～70㎝の隅丸方形を呈する。深さはＰ６・７で約50㎝である。柱痕跡はＰ６・８で明瞭に確認され、柱の直径は20㎝前後であった。

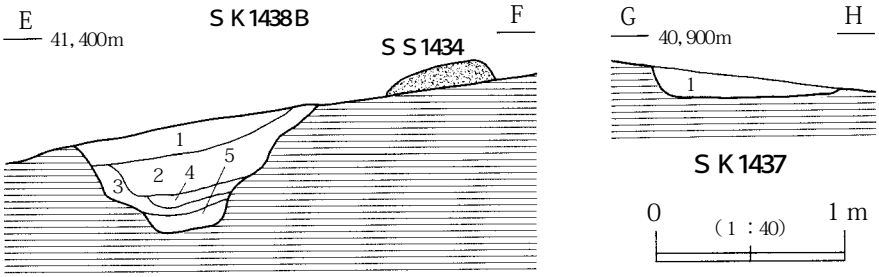
建物の軸線方向は、西側柱列を基準にすると、Ｎ－15°－Ｅとなる。遺物はＰ６内より土師器坏小片が出土した。

ＳＳ1434鍛冶炉は、ＳＢ1440西側柱列上にあたる第Ⅲ層下面で赤褐色・酸化した硬化面を確認した。硬化面とした範囲内外より少量ながら鍛造剥片が検出されたことから、鍛冶炉と判断した。規模は長さ55ｃｍ、幅45ｃｍの楕円形を示す。酸化面中には、径15㎝程の範囲が半還元状態に置かれたような灰色の硬化面をなしており、ここが炉底であったと考えられる。炉底は第Ⅳ層面に位置し、地山面までの掘り込みはない。

ＳＫ1438Ａ・Ｂ土坑は、ＳＳ1434鍛冶炉の北東側約50㎝に隣接し、第Ⅲ層下面で確認した。遺構確認時の状況及び平面形状から、ＳＫ1438ＡとＳＫ1438Ｂの重複の可能性があり、前者の北西側に後者が位置する。ＳＫ1438Ａは、径１ｍ程度の円形を呈し、確認面上には鉄滓・焼土・炭化物の分布が認められた。掘り下げを実施しなかったため、深さ等は不明である。ＳＫ1438Ｂは、一辺が約1.4mの楕円あるいは略円形を呈し、深さは50㎝となる。堆積土内、土坑底面から約15㎝上位より金床石（鉄床石・鉄砧石、第10図１）が出土した。６面全てに鉄片の付着（図中の黒塗部）と敲打による剥落が認められる。剥落を免れた箇所には、擦面を残すことから、金床石として使用する前段階において、石材を平坦化させるための研磨がなされたと判断される。大きさは、長さ33㎝、幅29㎝、厚さ28.5㎝



第８図　第２段整地面：西部の遺構群配置図



SK1438B
1：黒褐色シルト質土（10YR3/2）鉄滓・炭化物を多く含む
2：暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土粒子・炭化物を少量含む
3：暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粘土小ブロックをやや多く含む
4：黒褐色シルト質土（10YR2/2）炭化物を少量含む
5：黒褐色シルト質土（10YR3/1）地山粘土小ブロックを少量含む

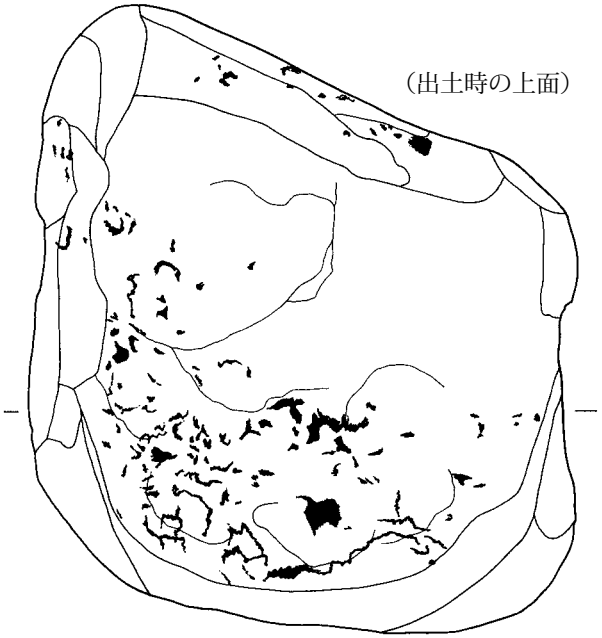
SK1437
1：黒褐色シルト質土（10YR2/2）炭化物を少量含む

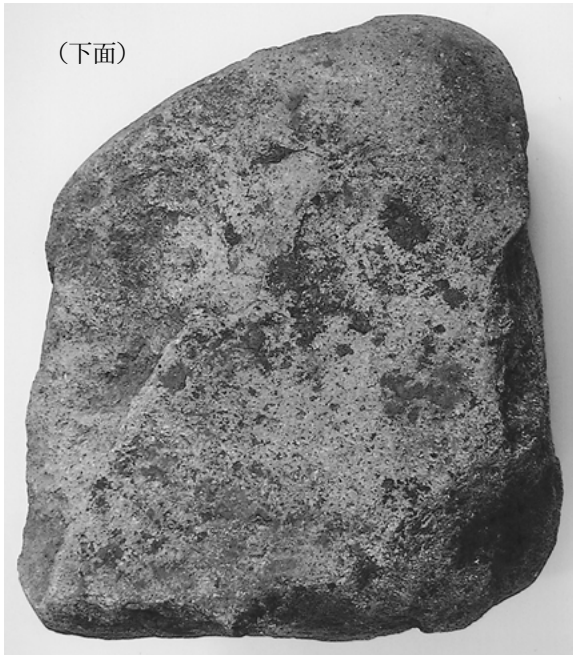
ＳＳ1434鍛冶炉、ＳＫ1438Ａ・Ｂ土坑
ＳＫ1437土坑確認状況（西→）

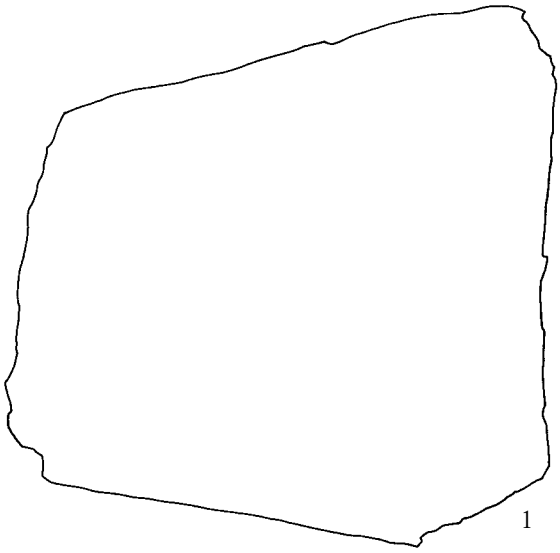
ＳＫ1438Ｂ土坑、金床石出土状況
（北西→）
写真左奥にＳＳ1448鍛冶炉

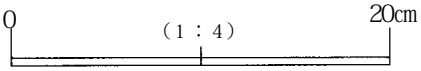
同上　金床石を取り上げた後に撮影
（北西→）
石の直下から須恵器坏（第10図２）
が倒立状態で出土

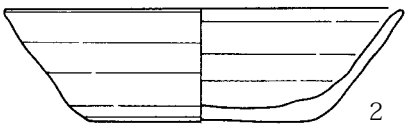
第９図　ＳＫ1437・1438Ｂ土坑、ＳＳ1434鍛冶炉

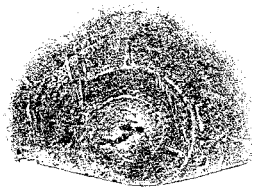




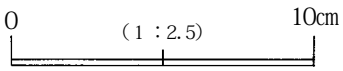








2：須恵器坏
口径13.0cm／底径7.2cm／器高3.7cm
底径指数0.56／高径指数28.5／
外傾度32°



（下面の鉄片付着状況）

第10図　ＳＫ1438Ｂ土抗出土遺物

であり、重量は52.5kgであった。またこの石の下から半割状態の須恵器坏（２）が１個体出土した。その他の遺物は、Ｂ土坑より須恵器坏・甕の小片と鉄滓が出土した。

金床石の出土から、本土坑は“足入れ穴”と判断され、本来金床石は穴の中ではなくその側（上）に置かれていたと考えられる。またＡ・Ｂ２つの土坑は、足入れ穴の重複か、Ａが金床石を据える掘形となる可能性もある。

《第２鍛冶工房跡》（第８図、図版４）

Ｓトレンチ南側に位置し、ＳＢ1449掘立柱建物跡、ＳＳ1448鍛冶炉で構成される。第１工房跡の中に入り込む形となり、足入れ穴であるＳＫ1438Ａ・Ｂ土坑は当工房段階でも使用していた可能性がある。

ＳＢ1449建物跡は、第Ⅳ層上面で確認した桁行３間×梁行２間の東西棟建物跡である。ＳＢ1440建物跡Ｐ４柱掘形と重複し、これより新しい。平面規模は、桁行総長・北側柱列で4.35m、柱間（Ｐ18－19－20－11）寸法は、西から1.8m＋1.15m＋1.4mである。南側柱列で4.1m、柱間（Ｐ16－15－14－13）寸法は、西から1.4m＋1.2m＋1.5mである。梁行総長は東側柱列で2.7m、柱間（Ｐ11－12－13）寸法は、北から1.5m＋1.2m。西側柱列で2.85m、柱間（Ｐ18－17－16）寸法は、北から1.４m＋1.45mとなる。

柱穴掘形は、Ｐ17で一辺が50㎝前後の楕円形、柱痕跡は径15㎝の円形となる。他は径20～25㎝程度の柱穴のみの確認である。深さはＰ17で約35㎝となるが、他は10～15㎝である。

建物の軸線方向は、西側柱列を基準にすると、Ｎ－10°－Ｅとなる。なお東側柱列は、ＳＢ1440建物跡Ｐ10－Ｐ４を結ぶ線上に位置する。

ＳＳ1448鍛冶炉は、ＳＢ1449建物内ほぼ中央に位置する。炉は径が15㎝程の円形を呈し、地山面をわずか10㎝程度ではあるが、掘り込む構造をとる。なお本鍛冶炉に接して同規模の柱穴様の掘り込みが３箇所存在する。明確な還元面は見られないものの、焼土・炭化材の分布から、炉あるいはこれに関連をもつ施設と考えることができる。

《第３鍛冶工房跡》（第８図、図版４）

Ｓトレンチ北側に位置、ＳＢ1441掘立柱建物跡、ＳＳ1394・1396鍛冶炉で構成される。

ＳＢ1441建物跡は、第Ⅳ層で確認した北側桁行３間×西側梁行２間の東西棟建物跡である。平面規模は、桁行総長・北側柱列で3.8m、柱間（Ｐ９－10－11－１）寸法は、西から1.5m＋1.05m＋1.25mである。南側柱列で4.0m、柱間（Ｐ７－６－５）寸法は、西から2.45m＋1.55mである。梁行総長は東側柱列で2.3m、柱間（Ｐ１－３－５）寸法は、北から1.4m＋0.9m。西側柱列で2.2m、柱間（Ｐ９－８－７）寸法は、北から1.15m＋1.05mとなる。

柱穴は、径15～20㎝程の円形で、深さは10㎝前後である。建物の軸線方向は、西側柱列を基準にすると、Ｎ－15°－Ｅとなり、ＳＢ1440建物跡西側柱列と同一軸線上にのる。また東側柱列は、ＳＢ1449建物跡東側柱列及びＳＢ1440建物跡Ｐ10－Ｐ４を結ぶ線上に位置する。遺物はＰ６内より羽口片・鉄滓が出土した。

ＳＳ1394・1396鍛冶炉は、ＳＢ1441建物内、第Ⅳ層面で青黒色・還元化した硬化面を２箇所で確

認した。２基とも硬化面として線引きした範囲から鉄滓・鍛造剥片が多数検出されたことから、鍛冶炉と判断した。ＳＳ1394は長さ70㎝、幅60㎝程の楕円形、ＳＳ1396は径約30㎝の略円形を呈する。以上の２基は、炉底を地山面に置くものの、下部に掘り込みをもたない構造をとる。なお両鍛冶炉の周辺には明確な硬化面は認められないものの、焼土・炭化物・鍛造剥片を伴うプランが複数確認された（図の網掛け部）。これらは鍛冶炉に関連をもつ場と考えることができる。

《その他の遺構群》

上記３棟の工房跡の他に、次のような掘立柱建物跡と鍛冶炉、柱穴列、土坑がある。これらは現在のところ、工房跡とそれを構成する遺構とすることはできないものの、未調査区及び周囲の柱穴等からすれば、いずれ工房とそれを構成する施設となるものと考えられる。

ＳＢ1453掘立柱建物跡（第８図）

Ｓトレンチ西端部、第Ⅳ層上面で確認した建物跡である。東側柱列を３間分検出し、調査区外西側に延びる。柱列の長さは5.2m、柱間（Ｐ１－２－３－４）寸法は、北から1.4m＋1.7m＋2.1mである。

柱穴掘形は、Ｐ１～３で一辺が40㎝前後の楕円・隅丸方形、Ｐ４は一辺60㎝程の隅丸方形となる。柱痕跡を確認するために、一段掘り下げたところ、Ｐ１・２では径15㎝の円形柱痕を検出した。

建物の軸線方向は、Ｎ－18°－Ｅとなる。

ＳＳ1433鍛冶炉（第８図）

Ｓトレンチ南側、第Ⅲ層下面で赤褐色・酸化した硬化面を確認した。硬化面とした範囲内外より少量ながら鍛造剥片が検出されたことから、鍛冶炉と判断した。ＳＳ1433は径約40㎝の略円形を呈する。炉周辺からは羽口片、土師器甕も出土した。

ＳＳ1442鍛冶炉（第８図）

Ｓトレンチ北西部、第Ⅳ層面で青黒色・還元化した硬化面を確認した。硬化面として線引きした範囲内外より鉄滓・鍛造剥片が検出されたことから、鍛冶炉と判断した。ＳＳ1442は、ＳＢ1441建物跡外の北西側に位置し、径45～50㎝の略円形を示す。本炉は、炉底を地山面に置くものの、下部に掘り込みをもたない構造をとる。

ＳＫ1437土坑（第８・９図）

Ｓトレンチ中央部、第Ⅲ層下面で確認した。ＳＢ1449建物跡を構成する柱穴（Ｐ20）と重複するが、新旧は不明である。規模は長さ105㎝、幅90㎝の整った隅丸方形を呈する。深さは15㎝である。遺物は土師器坏など小片が10数点出土した。

ＳＡ1435・1436柱穴列（第８図）

Ｑトレンチ西端、第Ⅳ層面で確認した。ＳＢ1440建物跡東側柱列の東外側に位置し、南北に延びる。ＳＡ1435は、径20～30㎝の柱穴３本で構成され、柱列の長さは4.35m、柱間（Ｐ１～３）寸法は、北から2.05m＋2.3mとなる。軸線方向は、Ｎ－14°－Ｅとなり、ＳＢ1440東側柱列の東2.1mにあたる。

ＳＡ1436は、径25㎝前後の柱穴４本で構成され、柱列の長さは8.1mとなるが、更に北に延びる可能性もある。柱間（Ｐ４～７）寸法は、北から2.0m＋3.0m＋3.1mとなる。軸線方向は、Ｎ－17°－Ｅとなり、ＳＢ1440東側柱列の東1.2～1.7mにあたる。

ＳＡ1454・1455柱穴列（第８図）

Ｓトレンチ北端、第Ⅳ層面で確認した。ＳＢ1441建物跡北側柱列の北外側に位置し、東西に延びる。軸線方向は両者ともＳＢ1441北側柱列に近似する。ＳＡ1454は、径20㎝前後の柱穴４本で構成され、柱列の長さは4.1m、柱間（Ｐ12～15）寸法は、東から0.95m＋1.5m＋1.65mとなり、ＳＢ1441北側柱列の北50～65㎝にあたる。ＳＡ1455は、径20㎝前後の柱穴３本で構成され、柱列の長さは3.95m、柱間（Ｐ16～18）寸法は、東から1.8m＋2.15mとなり、ＳＢ1441北側柱列の北75～90㎝にあたる。

なお両施設とも調査区外北側に及ぶ建物南側柱列であった可能性もある。

②中央部の遺構群（第11図）

本区域で検出された遺構は、竪穴状遺構５基、土坑９基、焼土遺構４基、溝跡３条であり、西部の遺構群に見られる掘立柱建物跡は確認されなかった。

ＳＫＩ1430Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ竪穴状遺構（第12・13図、図版５）

Ｏ・Ｑグリッド北部、第Ⅲ層面で検出した。当初は一辺が約６ｍ四方の竪穴状遺構１基と見ていたが、精査の結果、少なくとも４基の竪穴状遺構の重複であることが判明した。堆積土・壁面・床面の状況を観察し、その新旧関係は旧い方から、1430Ａ→1430Ｂ→1430Ｃ→1430Ｄの変遷をたどる。各竪穴のプランは、第13図右の模式図を参照。

ＳＫＩ1430Ａは、1430Ｂ床面精査時に幅15㎝前後の壁溝を発見したことを端緒とする。壁溝はＡ竪穴の西側壁から南側にあたり、同一軸線をとる東側壁面と結び、東西の長さが5.7mになると推測される。竪穴北側の様相は不明瞭であり、南北の規模・形状は明らかではない。壁溝の深さは10㎝未満であり、東側の壁高も10～15㎝にすぎない。柱穴等の施設の有無も不明である。軸線方向は、Ｎ－15°－Ｅとなる。

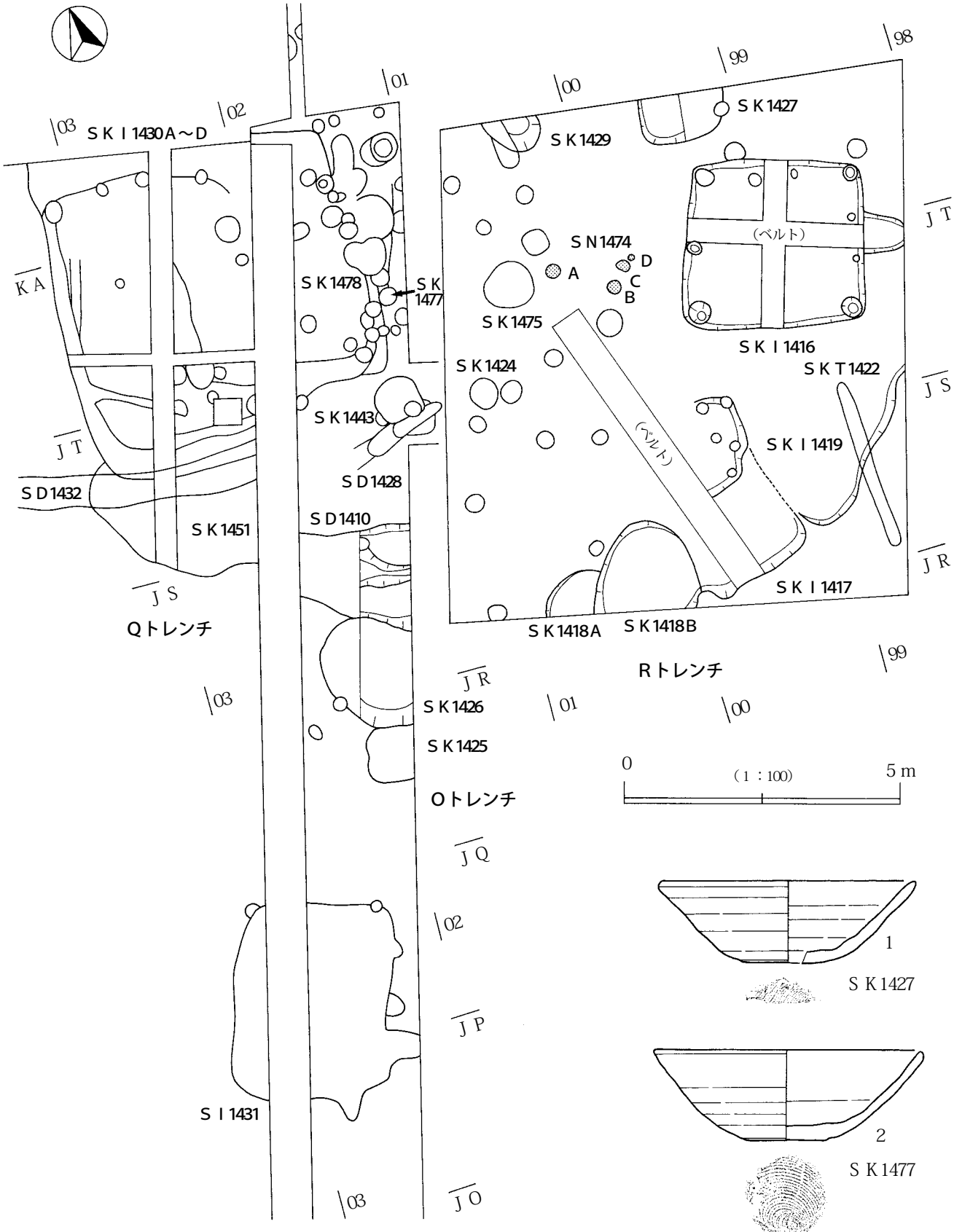
ＳＫＩ1430Ｂは、東側の壁面を除く三方の壁立ち上がりを確認した。規模は南北が5.4m、東西は推定で3.8mの長方形を呈すると見る。壁高は南側で30㎝となるが、北側では５㎝にすぎない。西側から南側には幅15～20㎝、深さ10㎝の壁溝が巡る。北側には壁溝は認められなかったものの、壁に接して径25～30㎝の柱穴が４本配される。軸線方向はＮ－Ｓを指す。

ＳＫＩ1430Ｃは、1430Ｂの北東部側床面を切り込んで構築される。竪穴北西部の様相は不明確ながら、南北4.3m、東西3.2mの長方形を呈する。壁溝はなく、壁高は南西部で15㎝程となる。軸線方向は1430Ｂと同様にＮ－Ｓを指す。

ＳＫＩ1430Ｄは、1430Ｂ・Ｃと同一軸線をとり、西側壁は1430Ｂ西壁の一部を共有（再掘り込み）する。南側壁は1430Ｂと並行するものの、その内側（北）約50㎝の箇所を掘り込む。東側壁は1430Ｃ東壁の外側（東）約30ｃｍに位置させ、結果的に1430Ｂ・Ｃ両竪穴を取り込む形で構築することになる。その規模は、東西が5.7m、南北は5.8m以上となり、調査区外北側に延びる。壁高は南側で30㎝、壁溝は幅が20㎝前後で、深さは10～15㎝となる。

本竪穴の北東側床面上には、複数の焼土面（Ｅ～Ｇ）が認められ、その西側・竪穴の中央寄りには塼の分布と炭化物の広がり（Ｈ）がある。Ｈは径約45㎝の略円形を呈する。前者の一部はカマドの火床面、後者は塼組みによる炉、あるいは後述する溶解炉に関連するものかもしれない。なお前者は、焼土面の配置・重複から、1430Ｃ段階に形成された面も存在していた可能性が高い。

遺構内の出土遺物(第14～16図)は、壁溝内、堆積土内、床面直上より多く得られた。特に1430Ｃ・



1：土師器坏
口径11.5cm／底径3.7cm／器高3.7cm
底径指数0.32／高径指数32.2／外傾度38°

2：土師器坏
口径12.1cm／底径3.8cm／器高4.1cm
底径指数0.31／高径指数33.9／外傾度35°

第11図　第２段整地面：中央部の遺構群配置図

Ｄ床面北東部の焼土面、炭化物の分布する箇所に集中する。またＨの周辺では塼（第15・16図）が多量に出土した。個体数を把握できたものだけで42点となる。塼は粘土を直方体様に成形加工後、焼成した土製品であるが、16のみ凝灰岩を切り出し成形する。いずれも二次的に火熱を受け煤状炭化物（図のトーン部）が付着する個体もある。これらの遺物は、Ｃ・Ｄ両竪穴とも同一床面上を利用していることから、多くの遺物は、最終の1430Ｄ段階に属すると考えられる。

塼以外の器種（第14図）は、須恵器坏（１）・台付坏（２）・蓋・壺・甕（10・11）、土師器坏・皿（６・７）・台付坏（５）・甕（８）、瓦（渦巻文、格子目：９）、羽口・炉壁片？、鉄滓である。６は内面に煤状炭化物が付着する。７は坏を再加工した皿となる。

ＳＫＩ1416竪穴状遺構（第17図）

Ｒトレンチ北東部、近代の轍跡（ＳＭ1390）を除去後、第Ⅲ層面で確認した。規模は、東西の長さ3.1～3.3m、南北の長さ2.9～3.1mのやや歪な方形を呈し、東側壁面の中央には幅75㎝、推定奥行き80㎝の張り出しを伴う。ほぼ平坦な床面までの深さは30㎝前後であり、張り出し部は僅か10㎝となる。周壁に沿って９本の柱穴が掘り込まれ、四隅（Ｐ１～４）が主柱穴と見られる。主柱穴掘形は、径30～40㎝の略円形を示し、Ｐ４を除く３本には径15㎝程の柱痕跡が確認される。その他、床面上に焼土面の形成や壁溝などの掘り込み施設はない。

竪穴堆積土は、地山粒子を斑状に多く含む暗褐色土で充填されており、明らかに人為的埋土である。また張り出し部も同質の土が観察されることから、両者同時期に埋められたと判断される。さらに最上面が非常に堅く締まっていることから、竪穴を埋め立てた後の平坦面を利用した施設が存在していたと考えられる。なお張り出し部は、東壁中央のＰ５・６（径10～15㎝）の位置と合わせて出入口施設の可能性がある。

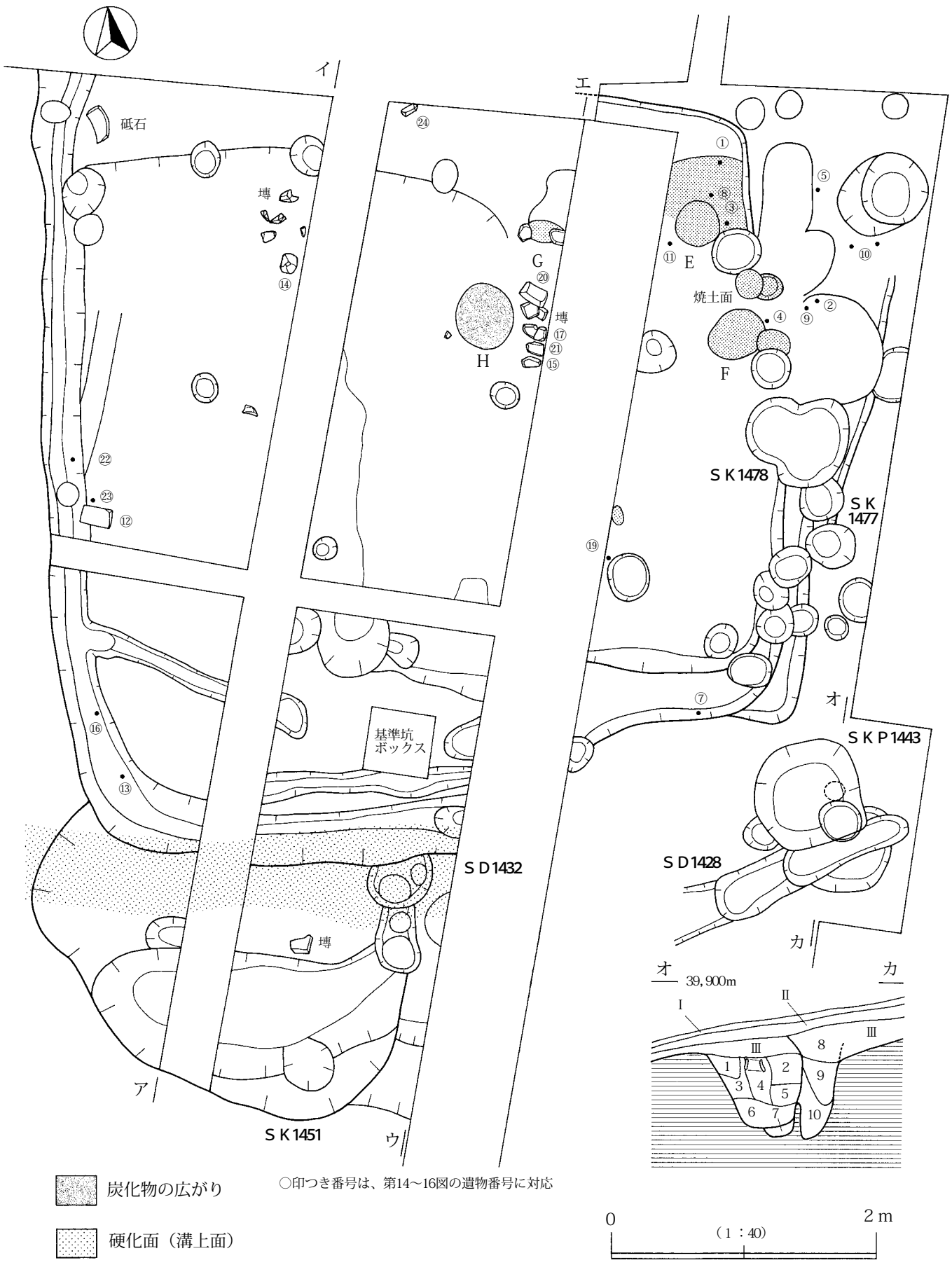
遺物は、須恵器坏・蓋・甕、土師器坏・甕、羽口がある。

ＳＫＰ1443柱穴（第12・18～20図）

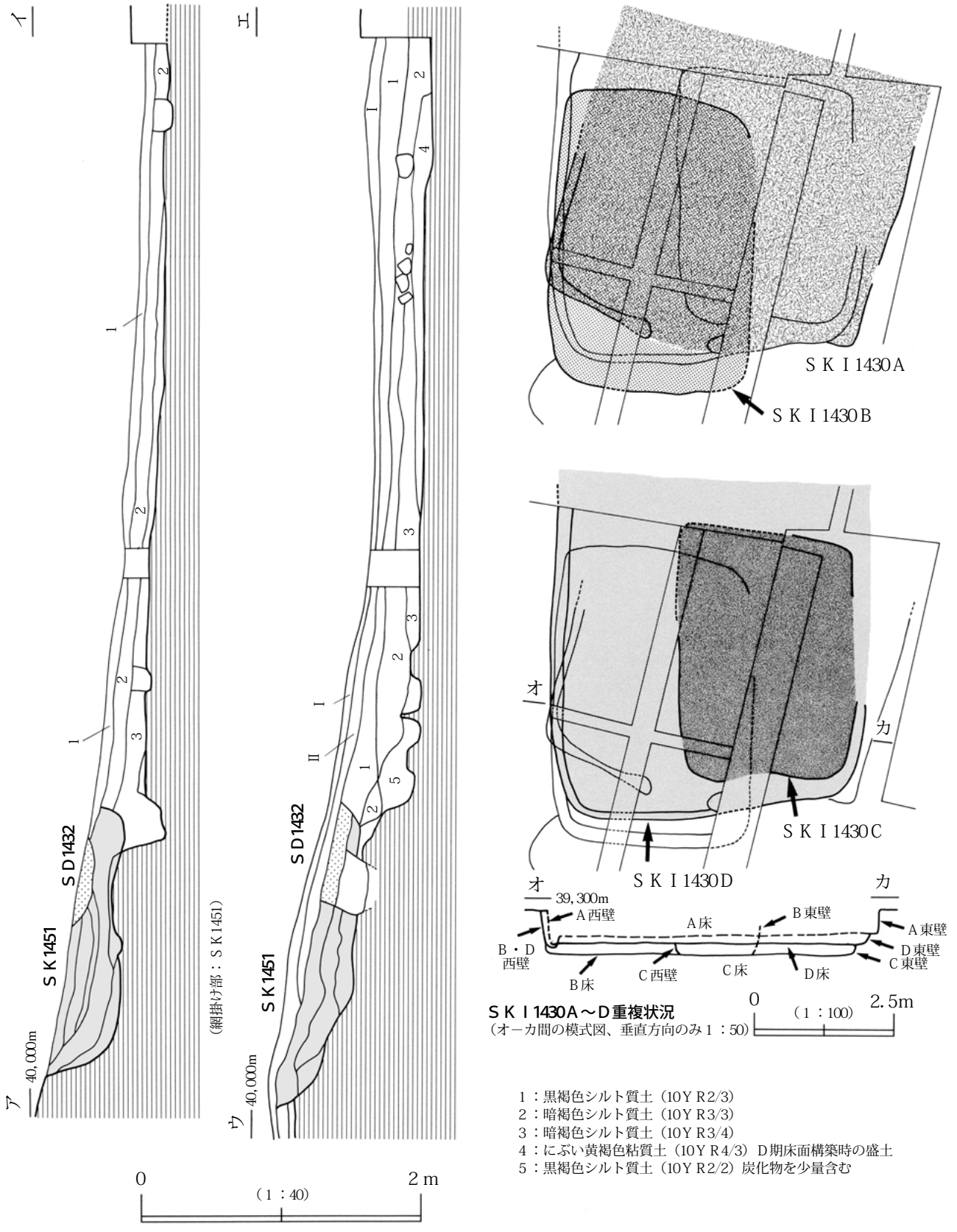
Ｏトレンチ北部、第Ⅲ層で検出した。径30㎝の柱穴（７層）を切り込んで構築し、ＳＤ1428溝跡（８～10層）に南側を切られる。規模は、一辺が80㎝の隅丸方形を呈し、深さは55㎝となる。

本土坑は、特異な履歴をもった柱穴と判断する。それは遺物の出土状況と堆積土の状況から、次のように推測した。まず掘り上げられた土坑・掘形に須恵器大甕破片（第20図13）を整然と敷くように並べ置く。大甕は意図的に打ち割られ、内面を上にさせて、６層土と共に約20㎝の厚さまで埋める（第18図イ）。次いで６層上面を底面として、ここに径13～15㎝程の柱をまっすぐに立てる。柱の周りには、にぶい黄褐色の粘質土（５層）を15㎝前後の厚さに埋め戻す。同層中には遺物は殆ど含まれない。この上には、土師器坏２個体を正立・並立させて柱の側に置く（３層下面：４・５、第18図ア）。更には土師器・須恵器を中心にして砥石・台石（14・15）・鉄滓などを比較的雑然と投げ入れる。３層上面から２層にも遺物は含まれるが、上位ほど小破片が多くなる傾向にある。柱痕跡（４層）内、最上層には口縁部から肩部にかけては完形となる須恵器中甕（８）を倒立させ埋めている。これは柱が朽ちた後の穴に入れたか、柱が立っている段階にはめ込まれた可能性もある。

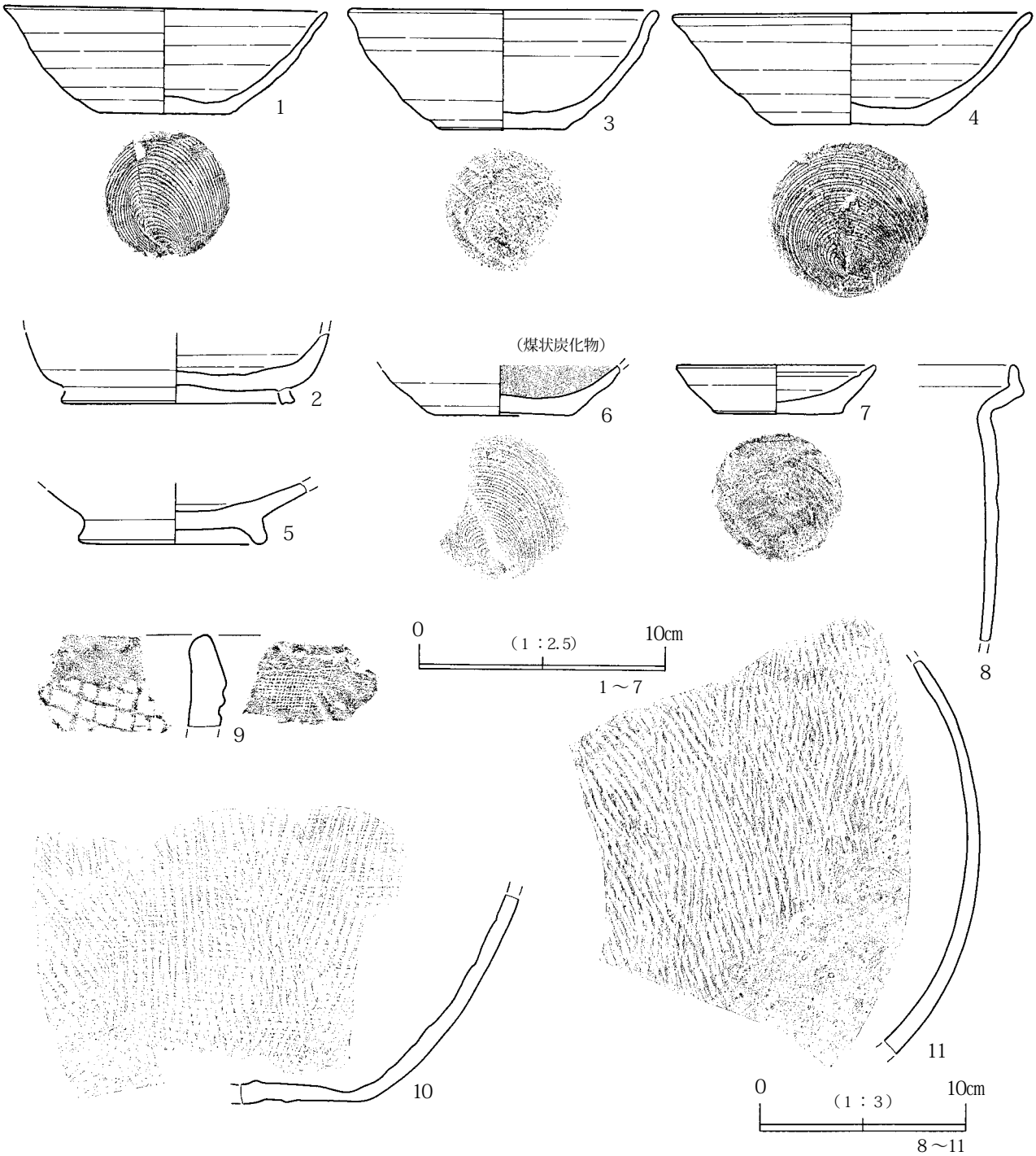
本柱穴の周囲には対となるであろう柱穴が見あたらない。一方、隣接するＳＫＩ1430との位置関係、両者の接合状況（第14図10の須恵器甕）を加味すると、一般的な建物の柱穴とは異質の施設、あるいはＳＫＩ1430に関連する構築物であった可能性がある。



第12図　ＳＫＩ1430Ａ～Ｄ竪穴状遺構（１）、ＳＫＰ1443柱穴、ＳＫ1447・1478土坑、ＳＤ1428・1432溝跡

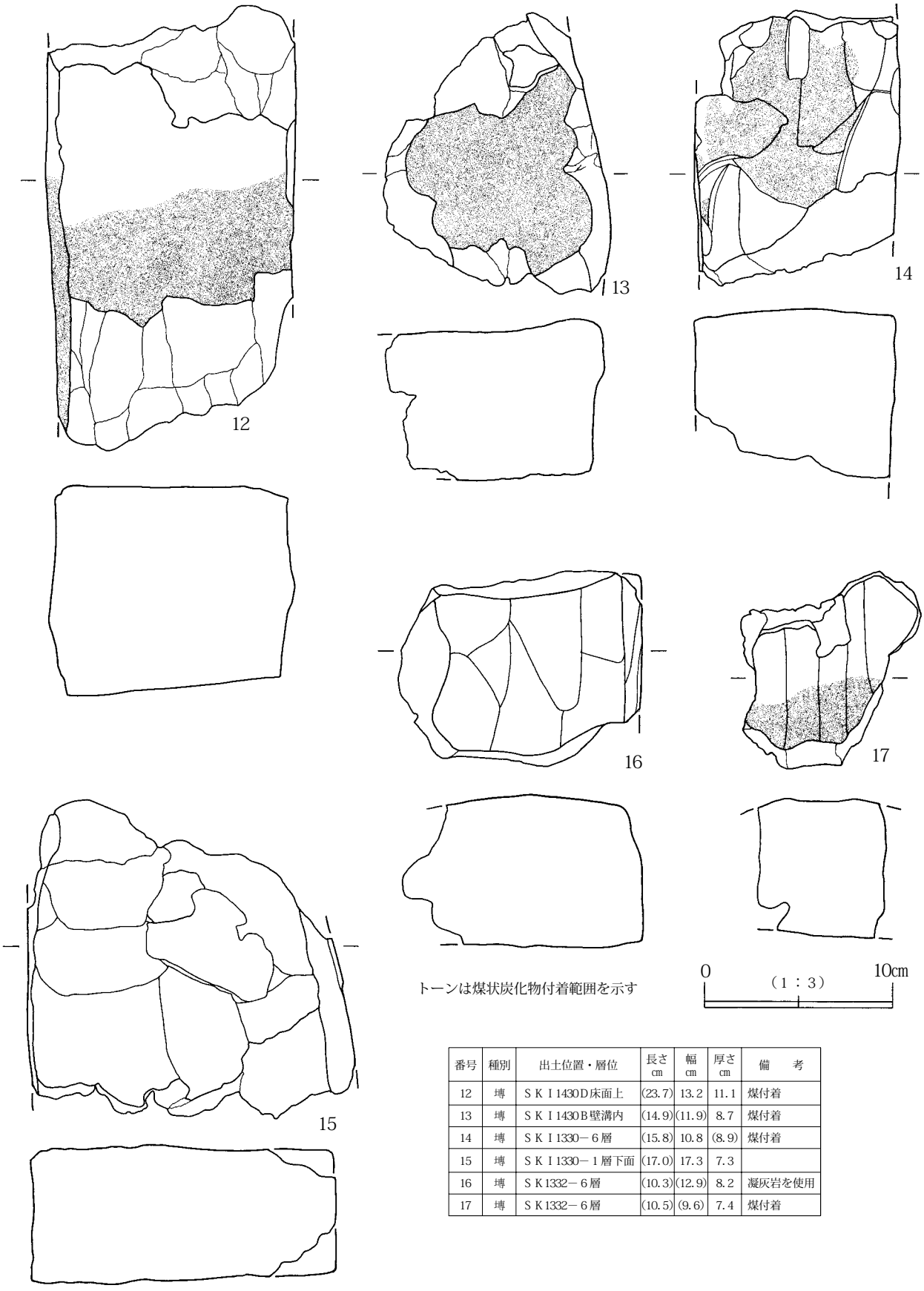


第13図　ＳＫＩ1430Ａ～Ｄ竪穴状遺構（２）



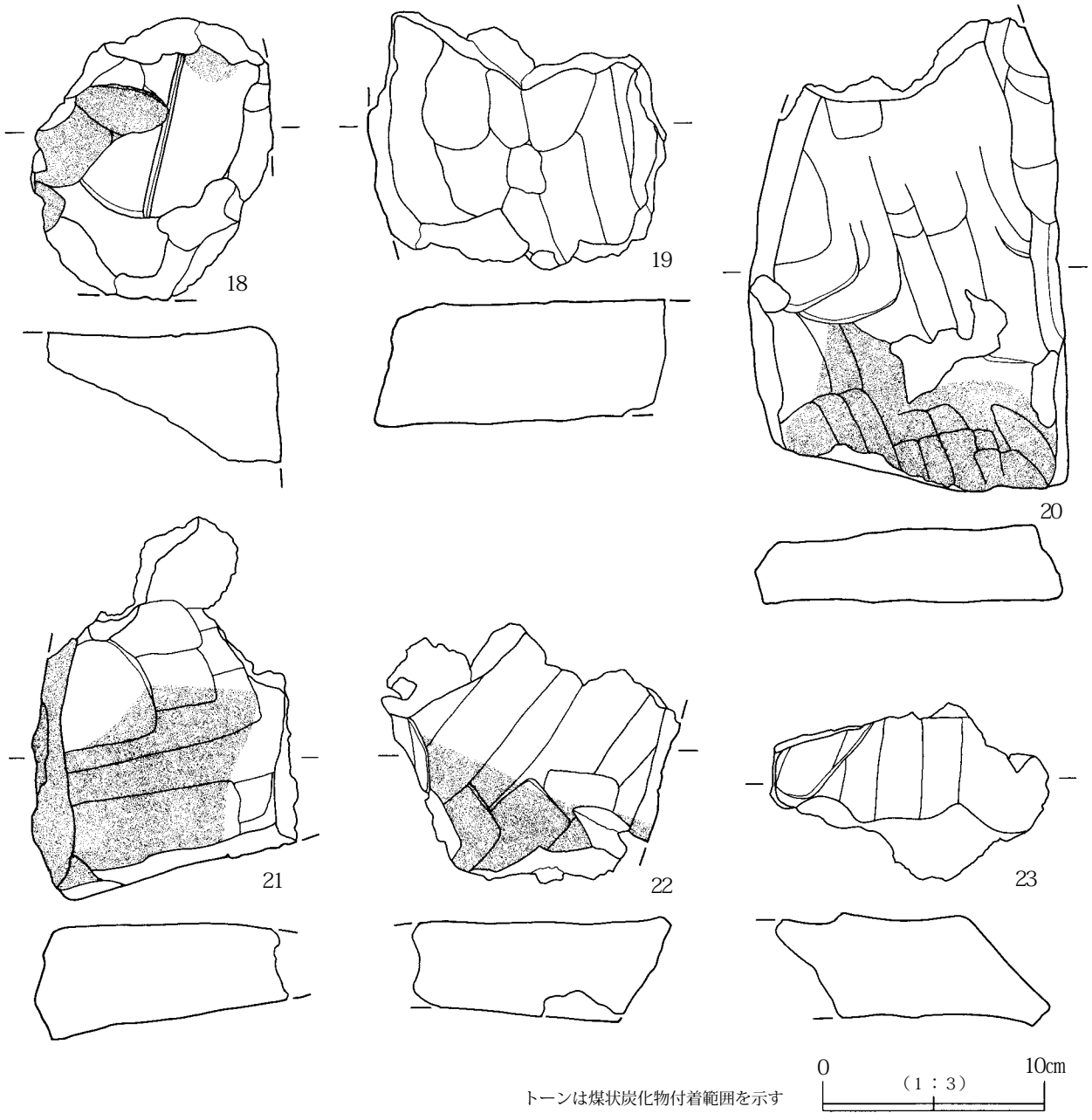
番号	種別	器形	出土位置・層位	特　　徴	口径 cm	底径 cm	器高 cm	底径指数	高径指数	外傾度
1	須恵器	坏	ＳＫＩ1430ＣＤ	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り、灯明皿に使用か	13.0	5.5	4.4	0.42	33.8	33
2	須恵器	台付坏	ＳＫＩ1430ＣＤ	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り→付高台		8.4	(2.4)			
3	土師器	坏	ＳＫＩ1430Ａ	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	12.4	5.1	4.9	0.41	39.5	30
4	土師器	坏	ＳＫＩ1430Ｄ	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り、煤状炭化物付着	14.3	6.1	4.6	0.43	32.2	37
5	土師器	台付皿	ＳＫＩ1430Ａ	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り→付高台		7.4	(2.5)			
6	土師器	坏	ＳＫＩ1430ＣＤ	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り、内面煤状炭化物付着		5.8	(2.5)			
7	土師器	皿	ＳＫＩ1430Ｄ	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り、坏を再成形して皿に転用		5.2	(2.0)			
8	土師器	甕	ＳＫＩ1430ＣＤ	内外：ロクロ調整			(13.5)			
9	瓦	平瓦	ＳＫＩ1430Ａ	凸面：正格子タタキ、凹面：布目、黄白色を呈し、焼成ややあまい						
10	須恵器	甕	ＳＫＩ1430Ａ＋ＳＫＰ1443－３層	体部下半から底部、外：平行タタキ、内：原体不明アテ具			(9.8)			
11	須恵器	甕	ＳＫＩ1430ＣＤ	外：平行タタキ、内：ナデか			(19.1)			

第14図　ＳＫＩ1430竪穴状遺構出土遺物（１）



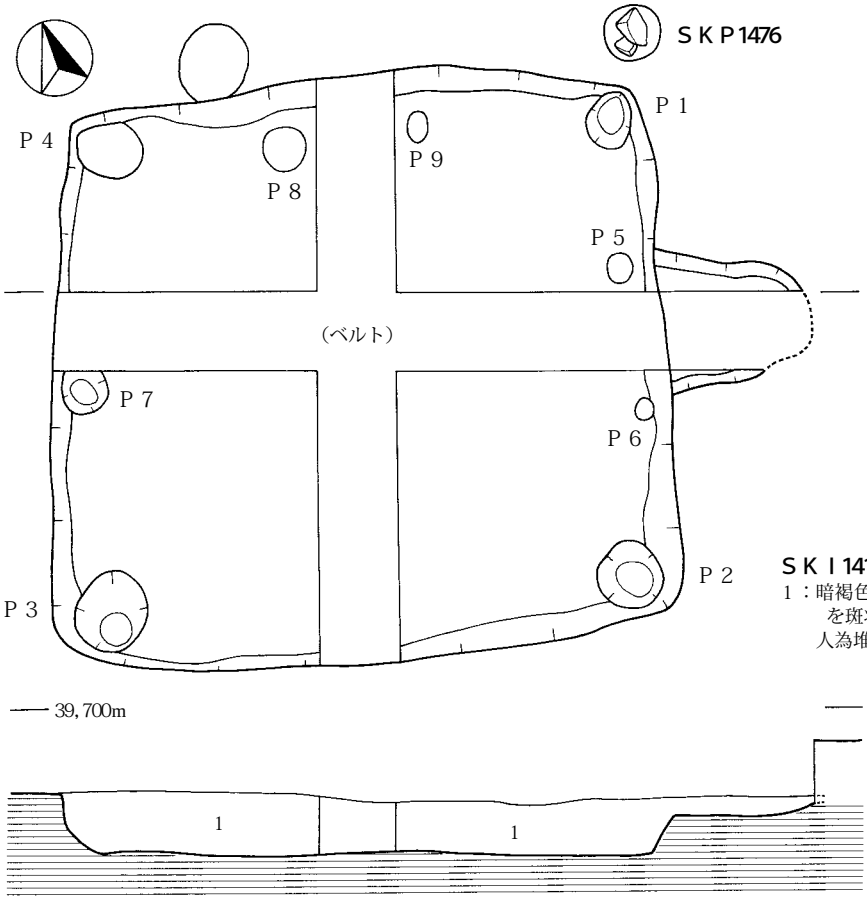
番号	種別	出土位置・層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	備　考
12	塼	ＳＫＩ1430Ｄ床面上	(23.7)	13.2	11.1	煤付着
13	塼	ＳＫＩ1430Ｂ壁溝内	(14.9)	(11.9)	8.7	煤付着
14	塼	ＳＫＩ1330－６層	(15.8)	10.8	(8.9)	煤付着
15	塼	ＳＫＩ1330－１層下面	(17.0)	17.3	7.3	
16	塼	ＳＫ1332－６層	(10.3)	(12.9)	8.2	凝灰岩を使用
17	塼	ＳＫ1332－６層	(10.5)	(9.6)	7.4	煤付着

第15図　ＳＫＩ1430竪穴状遺構出土遺物（２）



番号	種別	出土位置・層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	備　考
18	塼	ＳＫＩ1430Ｄ床面上	(12.1)	(11.0)	(6.2)	煤付着
19	塼	ＳＫＩ1430Ｄ床面上	(11.7)	(13.2)	5.6	
20	塼	ＳＫＩ1430Ｄ床面上	(21.4)	14.3	3.4	煤付着
21	塼	ＳＫＩ1430Ｄ床面上	(17.3)	(12.0)	5.2	煤付着
22	塼	ＳＫＩ1430Ｄ壁溝内	(11.8)	(13.5)	4.6	煤付着
23	塼	ＳＫＩ1430Ｄ床面上	(8.0)	(12.3)	5.2	
24	塼	ＳＫＩ1430Ｄ床面上	(10.8)	(10.7)	4.1	煤付着

第16図　ＳＫＩ1430竪穴状遺構出土遺物（３）

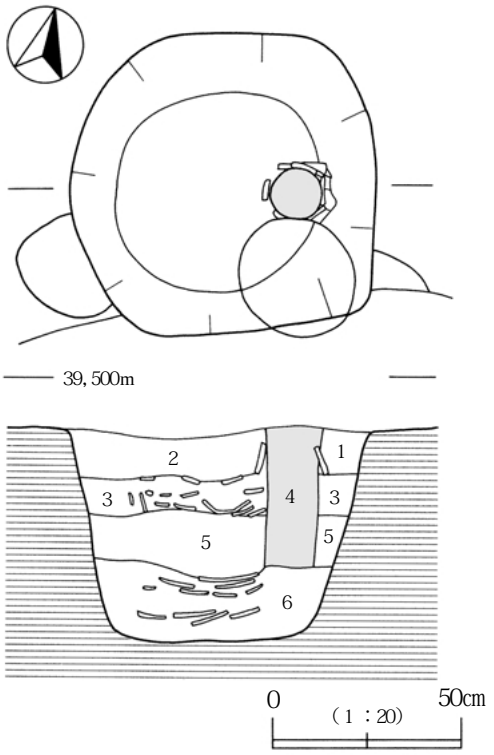


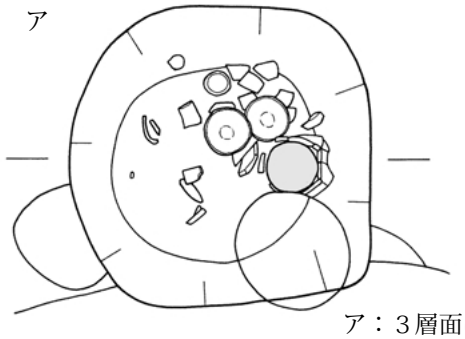
ＳＫＰ1476柱穴
焼けた礫が２点認められる
柱を抜いた後に入れたもの
と考えられる

ＳＫＩ1416
1：暗褐色シルト質粘土（10Y R3/3）地山粘土
を斑状に多く含む
人為堆積層、上面は堅く締まる

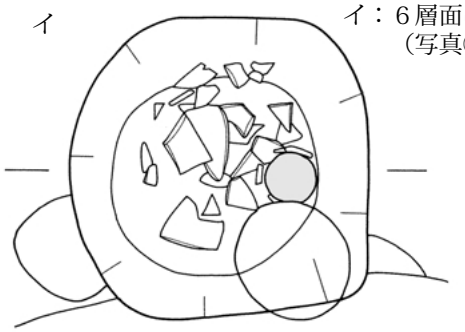
左上：ＳＫＩ1416竪穴状遺構確認状況（北→）
この面は非常に堅く締まっていた
左下：同上　完掘状況（北→）
右：土層の堆積状況（北→）
地山粘土粒子の混入状況から
短期間に埋め戻した堆積土である
ことが判明

第17図　ＳＫＩ1416竪穴状遺構



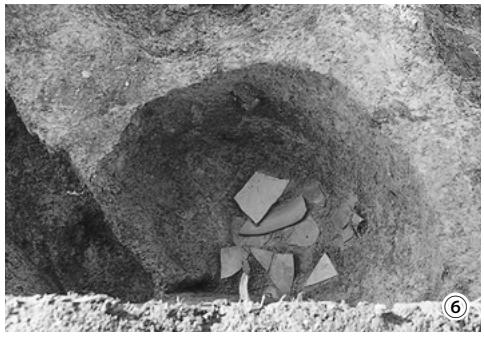


ア：３層面における遺物出土状況
（写真①～③に対応）



イ：６層面における遺物出土状況
（写真⑤⑥に対応）

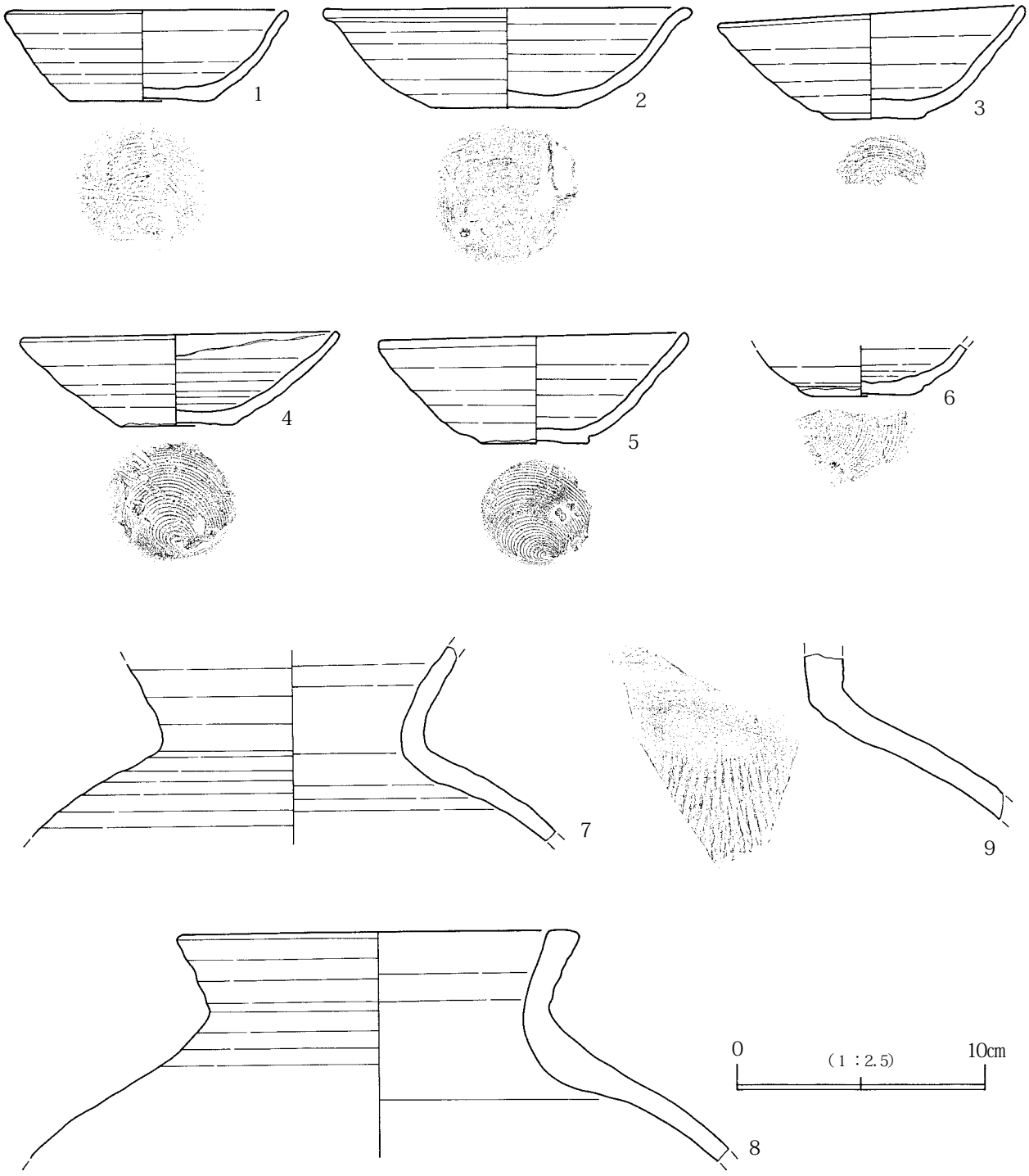
４層（柱痕跡）



ＳＫＰ1443
1：褐色シルト質粘土（10Ｙ Ｒ4/4）
地山粘土をやや多く含む
2：にぶい黄橙色粘質土（10Ｙ Ｒ6/4）
地山粘土を斑状に多く含む
3：黒褐色シルト質土（10Ｙ Ｒ3/2）
地山粘土少量のみ含む、遺物多く含む
4：黒褐色シルト質土（10Ｙ Ｒ3/1）
地山粘土少量のみ含む、柱痕跡
5：にぶい黄褐色シルト質粘土（10Ｙ Ｒ4/3）
地山粘土をやや多く含む、遺物殆ど含まず
6：暗褐色シルト質粘土（10Ｙ Ｒ3/4）
遺物多く含む
7：褐色シルト質粘土（10Ｙ Ｒ4/4）
ＳＫ1443に切られる柱穴埋土
8：にぶい黄橙色粘質土（10Ｙ Ｒ6/3）
地山粘土をやや多く含む、10層までＳＤ1428埋土
9：にぶい黄褐色シルト質粘土（10Ｙ Ｒ4/3）
地山粘土をやや多く含む
10：黒褐色シルト質土（10Ｙ Ｒ2/2）
地山粘土少量含む
※１～６層は人為堆積土か

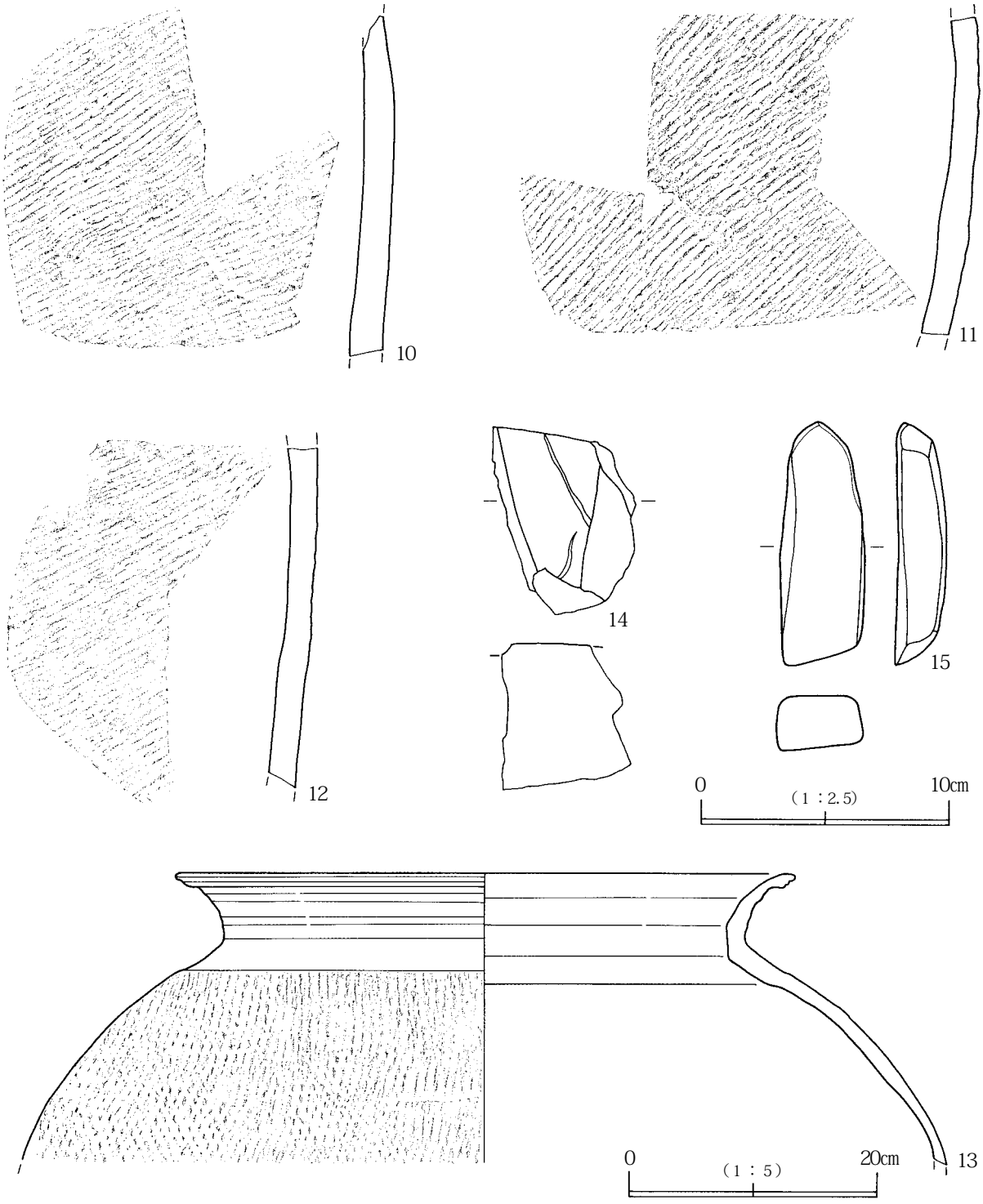
①：３層上面での遺物出土状況（東→）
②：３層中位での遺物出土状況（東→）
③：３層下面での遺物出土状況（東→）
土師器坏が正立して並べられる
右下が５、左上が４
④：５層面の状況（東→）
４層の円形プラン《柱痕跡》が見える
⑤：６層中位での遺物出土状況（西→）
壁面に残る土器が４層上部に倒立して入れられた須恵器壺（８）
⑥：６層下面での遺物出土状況（東→）
⑤⑥とも全ての破片が内側を上にして置かれる
ほとんどの破片が13の須恵器大甕に復元

第18図　ＳＫＰ1443柱穴遺物出土状況



番号	種別	器形	出土位置・層位	特　　徴	口径 cm	底径 cm	器高 cm	底径指数	高径指数	外傾度
1	土師器	坏	ＳＫＰ1443－３層上	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り、胎土に赤色粒子含む	11.2	5.7	3.7	0.51	33.0	29
2	土師器	坏	ＳＫＰ1443－３層上	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り、胎土に赤色粒子含む	14.8	5.9	4.0	0.40	27.0	38
3	土師器	坏	ＳＫＰ1443－３層	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	12.3	4.0	4.5	0.33	36.6	40
4	土師器	坏	ＳＫＰ1443－３層下	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り、粘土巻き上げ痕残る、完形正位で出土	12.7	4.5	3.8	0.35	36.3	36
5	土師器	坏	ＳＫＰ1443－３層下	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り、粘土巻き上げ痕残る、完形正位で出土	12.4	4.3	4.5	0.35	36.3	36
6	土師器	坏	ＳＫＰ1443－２層	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り		4.0	(2.1)			
7	須恵器	壺	ＳＫＰ1443－６層	内外：ロクロ調整、外面に自然釉かかる			(7.9)			
8	須恵器	壺	ＳＫＰ1443－４層上	外：平行タタキ→ロクロ調整、外面に自然釉かかる	15.3		(9.4)			
9	須恵器	甕	ＳＫＰ1443－６層	外：平行タタキ→ロクロ調整			(6.6)			

第19図　ＳＫ1443土坑出土遺物（１）



番号	種別	器形	出土位置・層位	特　　徴	口径 cm	底径 cm	器高 cm	底径指数	高径指数	外傾度
10	須恵器	甕	ＳＫＰ1443－６層上	外：平行タタキ、内：ナデ			(13.7)			
11	須恵器	甕	ＳＫＰ1443－６層	外：平行タタキ、内：ナデ			(12.8)			
12	須恵器	甕	ＳＫＰ1443－６層	外：平行タタキ、内：ナデ、10～12同一個体か			(13.8)			
13	須恵器	甕	ＳＫＰ1443－６層	外：平行タタキ、内：ナデ、最大径（74.4）	50.0		(23.4)			
14	砥石		ＳＫＰ1443－３層	長さ（7.6）×幅（5.8）×厚さ（5.9）、重量（300.9ｇ）						
15	砥石		ＳＫＰ1443－３層	長さ9.9×幅3.4×厚さ2.2、重量92.1ｇ						

第20図　ＳＫ1443土坑出土遺物（２）

ＳＫ1451土坑（第12図）

Ｑトレンチ東側、第Ⅲ層面で確認した。ＳＫＩ1430Ｂ竪穴状遺構の南壁を切り込んで構築し、ＳＤ1432溝跡に切られる。規模は確認される東西の長さは3.1ｍであり、南北は約1.9ｍとなり、歪な楕円状を呈する。壁面及び底面は凹凸が著しく、深さは最深で45㎝となる。

遺物は底面直上より塼、土師器・須恵器が少量出土した。

ＳＫ1427土坑（第11図）

Ｒトレンチ北端部、第Ⅳ層面で確認した。土坑の北側は調査区外（道路面）となるため、形状は明らかではないが、東西の長さは1.4ｍとなる。底部までの深さは約45㎝。堆積土中には地山粒子や炭化物をやや多く含み、人為的な埋土と判断される。遺物は須恵器甕、土師器坏（第11図１）・台付皿・鍋、羽口、鉄滓などが出土した。

ＳＫ1429土坑（第11図）

Ｒトレンチ北西端部、第Ⅳ層面で確認した。柱穴あるいは溝状遺構と南西側で重複し、かつＳＫ1427同様、その北側は調査区外に及ぶ。従って形状は不明確となるが、一辺・径が90㎝以上の楕円・円をなすと考えられる。底部までの深さは40㎝であり、堆積土の状況はＳＫ1427のそれに近似する。遺物は土師器が破片として数点出土した。

ＳＫ1424・1475土坑（第11図）

Ｒトレンチ西部、第Ⅳ層面で検出した。ＳＫ1424は径60㎝、ＳＫ1475は径80㎝程の略円形を呈する。深さは両者とも10㎝前後である。遺物はＳＫ1424から須恵器長頸壺、土師器坏が少量出土した。

なお両土坑近辺には、Ｏトレンチ北側を含め、径20～25㎝規模の柱穴が点在する。これらは建物を構成する柱穴と思われるが、配置に規則性が認められなかった。

ＳＫ1477土坑（第12図）

Ｏトレンチ北部、第Ⅲ層で確認した。ＳＫＩ1430Ａ・Ｄ期の東側壁を切り込んで構築される。規模は径40㎝程の略円形を呈する。柱掘形を想定して段下げを行ったが、10㎝足らずで底面に達した。堆積土中には炭化物を含むシルト質土が充填され、人為的埋土と判断される。

底面直上から完形の土師器坏が倒立して出土した（第11図２）。意図的に埋納したと考えられる。

ＳＫ1478土坑（第12図）

Ｏトレンチ北部、第Ⅲ層で確認した。ＳＫＩ1430Ｃ・Ｄ期の東側壁を切り込んで構築される。平面形は径50㎝程と径約70㎝の円形土坑が連結したような達磨形を示す。当初、２つの柱掘形と推定して10㎝程の段下げを行ったが、重複の有無、柱痕跡は確認できなかった。

遺物は、土師器小片が出土した。

ＳＫ1425土坑（第11図）

Ｏトレンチ中央部、第Ⅲ層で確認した。ＳＫ1426と北側で重複し、これに切られる。また東側は調査区外に及ぶ。規模は現況で、南北の長さ１ｍ、東西の幅が95㎝となる。深さは25㎝程であり、壁面・底面共に小さな凹凸が認められる。遺物は土師器小片、鉄滓が出土した。

ＳＮ1474Ａ～Ｄ焼土遺構（第11図）

Ｒトレンチ北西側、第Ⅳ層面で検出した４箇所の焼土遺構である。いずれも地山漸移層面での火の使用に伴う酸化面として確認したが、下部への掘り込みはない。規模はＡ～Ｃで径25㎝前後、Ｄが径

10㎝程の略円形を呈する。

ＳＤ1410溝跡（第11図）

Ｏトレンチ中央部、第Ⅲ層で確認した。ＳＫ1426と南側で重複し、これに切られる。幅1.1～1.9mの溝が東西方向に延びるが、東西両端とも隣接するトレンチ内に及ばないことから、その長さは２m以上3.4m未満となる。深さは15㎝程で、底面には幅40㎝前後、深さ10㎝の溝が東西に掘り込まれる。溝内より遺物は出土しなかった。

ＳＤ1428溝跡（第11図）

Ｏトレンチ北部、第Ⅲ層上面で確認した。ＳＫＰ1443南側を切り込んで東西に延びる。確認された長さは約２m、幅は20～35㎝となる。深さは最深で80㎝に達する。

遺物は９層内より須恵器甕、土師器坏・甕、瓦の小片、鉄滓が出土した。

ＳＤ1432溝跡（第11・12図）

Ｑトレンチ中央部で検出した。ＳＫＩ1430Ｂ竪穴状遺構とＳＫ1451土坑を切り込んで東西に延びる。確認された長さは5.7mであり、西端が北西方向に屈曲する。幅は50～70㎝であり、深さは20㎝程となる。溝底面は小さな凹凸はあるものの、非常に堅く締まり、ここを通路として使用していたかのようである。本溝跡はＳＫＩ1430Ｃ竪穴状遺構の南壁と約30㎝の間隔を保ち並行することから、当該竪穴使用時期に併存していた可能性がある。遺物は土師器破片が少量のみ出土した。

③東部の遺構群（第21～27図、巻頭図版２、図版６）

本区域で検出された遺構は、掘立柱建物跡17棟、竪穴住居跡２軒、土坑２基、溝状遺構１条、焼土遺構５基である。なお昨年度に遺構確認調査を実施したＪ１トレンチ部では、本年度は建物を構成する柱穴と焼土面及び溝状遺構１条（ＳＤ1325）のみを精査した。

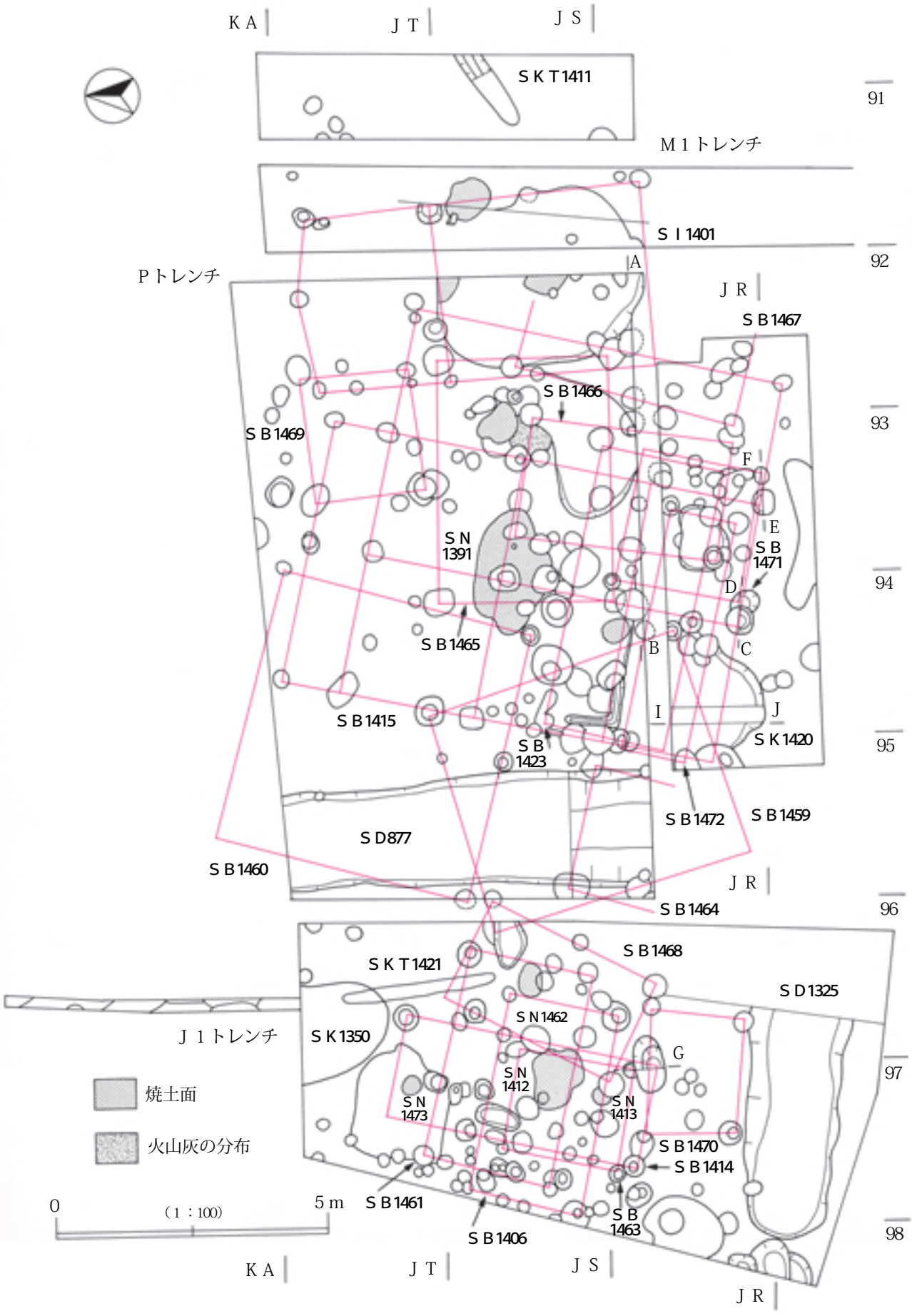
これらの遺構確認面は、基本的には第Ⅲ層中と考えられるが、近代以降の土地改変（轍跡・硬化面の形成など）により、同層が失われ、表土下が第Ⅳ層となり、ここで遺構プランが見つかる例が多い。以下において確認面層序の表記のないものは、削平された第Ⅳ層での検出を指すものとする。

掘立柱建物跡は、現地ではその組み合わせを明確にすることができなかった。従って以下に示す建物跡は柱筋・柱間を基に図上で復元したものである。ここでは17棟を示すが、建物に組み入れることのできなかった柱掘形・柱穴が数多く残り、本来は更に多くの建物が存在していたはずである。

これら建物群の構築時期は、新旧を明らかにできない事例もあるが、いずれも竪穴住居跡を切り込んでいる。しかし中世の空堀には全て切られる。Ｊ１トレンチ南部では中世陶器も出土するが、柱掘形・柱穴から該期遺物の出土はない。以上の点から、本項では古代の遺構として報告するが、幾つかの建物は、中世期に構築された可能性が残る。

建物跡の記述は、柱間構成、重複、平面規模、柱掘形・柱痕跡、軸線方向、その他の順とするが、柱間寸法は、第22・23図の表記（単位m）を参照いただきたい。

また柱掘形埋土は、①：地山粘土と黒褐色シルト質土が斑状に混在するタイプ、②：暗褐色シルト質土を主とし、地山粘土や炭化物をやや多く含むタイプ、③：黒褐色シルト質土を主とし、地山粘土・炭化物を少量含むタイプの別がある。①②を示す例が多く、③は少数であるが、特定の建物がいずれかのタイプの埋土で占められることはなく、混在する。以下の記述では、③タイプ埋土をもつ柱掘形



第21図　第２段整地面：東部の遺構群配置図

については番号で特定することにする。従って記載のないものは、①②タイプ混在の埋土であることになる。

ＳＢ1415掘立柱建物跡（第22図）

Ｐ・Ｔトレンチで検出した桁行３間×梁行２間の南北棟総柱建物跡であり、東側桁行と北側梁行にそれぞれ１間の庇が付く。ＳＩ1401・1423住居跡と重複し、これを切る。平面規模は、身舎部桁行総長で7.0m、北側庇部を加えると8.1mとなる。身舎部梁行総長は北側柱列で4.9m、東側庇部を加えると7.25m。南側柱列で4.85m、東側庇部を加えると7.1mとなる。柱掘形は、身舎部で径あるいは一辺が40～55㎝の円あるいは隅丸方形を示し、庇部では径30㎝前後の略円形を呈する。深さはＰ４で約50㎝、Ｐ５で75㎝に達する。柱掘形埋土はＰ10のみ③タイプとなる。柱痕跡はＰ４・５で明瞭に確認され、柱の直径は20㎝前後であった。建物の軸線方向は、西側柱列を基準にすると、Ｎ－10°－Ｅとなる。遺物はＰ５掘形より土師器坏小片と鉄滓が出土した。

ＳＢ1459掘立柱建物跡（第22図）

Ｐ・Ｊ１・Ｔトレンチに跨る桁行２間×梁行２間の南北棟建物跡である。ＳＫ1420土坑を切り、ＳＤ877空堀に切られる。平面規模は、桁行総長・東側柱間で4.8m、西側柱間は推定5.0m、梁行総長は北側柱列で4.2m、南側柱列は推定4.25mとなる。柱掘形はＰ１で一辺55㎝、Ｐ２で70㎝程の隅丸方形を呈するが、他は径40～50㎝程の略円形を示す。柱痕跡はＰ１・２で径25㎝前後である。建物の軸線方向は、東側柱列を基準にすると、Ｎ－18°－Ｗとなる。

ＳＢ1468掘立柱建物跡、ＳＮ1462焼土遺構（第23図）

Ｊ１・Ｐトレンチで確認した桁行２間×梁行１間の南北棟建物跡である。ＳＮ1413と重複し、これを切る。平面規模は、桁行総長は3.4m、梁行総長は、南側柱列は2.0mである。柱掘形は径30～50㎝の略円形を呈する。本建物内には、ＳＮ1462（長さ65㎝、幅50㎝）が位置する。建物の軸線方向は、東側柱列を基準にすると、Ｎ－28°－Ｅとなる。

ＳＢ1414掘立柱建物跡（第22図）

Ｊ１トレンチで確認した桁行２間×梁行１間の南北棟建物跡である。ＳＢ1463と重複し、これを切る。平面規模は、桁行総長は4.75m、梁行総長は1.9mである。柱掘形は径40～55㎝の略円形を呈する。深さはＰ３で65㎝、柱痕跡は径約20㎝となる。建物内北部にはＳＮ1473（第27図下、径約40㎝）が、南側にはＳＮ1413（径約40㎝）がそれぞれ位置する。建物の軸線方向は、東側柱列を基準にすると、Ｎ－10°－Ｗとなる。遺物は南東隅柱であるＰ３内より土師器坏・甕、格子目瓦が出土した。

ＳＢ1466掘立柱建物跡（第22図）

Ｐ・Ｔトレンチで確認した桁行２間×梁行１間の南北棟建物跡である。ＳＢ1467と重複し、これに切られる。平面規模は、桁行総長・東側柱列で3.75m、梁行総長は2.2mである。柱掘形は径35～45㎝の略円形を呈する。柱痕跡は径20㎝前後となる。建物の軸線方向は、Ｎ－10°－Ｅである。

ＳＢ1467掘立柱建物跡（第22図）

Ｐ・Ｔトレンチで確認した西側柱間２間の建物である。ＳＢ1466、ＳＩ1401と重複し、これを切る。西側柱列の長さは4.2mであり、柱掘形は径40㎝前後の略円形となる。Ｐ８掘形埋土のみ③タイプである。建物の軸線方向は、Ｎ－16°－Ｅである。

ＳＢ1461掘立柱建物跡（第22図、27図下）

Ｊ１トレンチで確認した桁行３間×梁行２間（東側１間）の東西棟建物である。平面規模は、桁行総長・北側柱列で3.9m、南側柱列で4.0mとなる。梁行総長・西側柱列で2.4m、東側柱列で2.3mとなる。柱掘形は径あるいは一辺が40㎝前後の略円形、隅丸方形を呈する。Ｐ１・２掘形埋土が③タイプを呈する。建物内東側にはＳＮ1462が位置する。建物の軸線方向は、Ｎ－15°－Ｅである。

ＳＢ1406掘立柱建物跡（第22図）

Ｊ１トレンチで確認した桁行２間×梁行１間の東西棟建物である。平面規模は、桁行総長・北側柱列で3.7m、南側柱列で3.8mとなる。梁行総長は2.1mとなる。柱掘形は径あるいは一辺が25～50㎝の略円形、隅丸方形を呈する。建物内にはＳＮ1412が位置する。建物の軸線方向は、Ｎ－15°－Ｅである。南西隅柱であるＰ４内より須恵器坏（第27図６）、土師器坏片が出土した。

ＳＢ1465掘立柱建物跡（第22図）

Ｐトレンチ東側で確認した桁行２間×梁行１間の東西棟建物である。ＳＩ1401を切り、ＳＢ1469、ＳＫ1444に切られる。平面規模は、桁行総長は4.5m、梁行総長は東側柱列で3.2m、西側柱列で3.25mとなる。柱掘形は径あるいは一辺が40～55㎝の略円形、隅丸方形を呈する。建物の軸線方向は、Ｎ－Ｓである。

ＳＢ1460掘立柱建物跡（第22図）

Ｐトレンチ北西側で確認した桁行２間×梁行２間の東西棟建物である。平面規模は、桁行総長は5.05mとなる。梁行総長・東側柱列4.75mとなる。柱掘形は径40㎝前後の略円形を呈する。建物の軸線方向は、Ｎ－15°－Ｅである。

ＳＢ1423掘立柱建物跡（第22図）

Ｐ・Ｔトレンチで確認した桁行２間×梁行１間の東西棟建物である。ＳＫ1444・1420を切る。平面規模は、桁行総長は5.2m、梁行総長は東側柱列で2.3mとなる。柱掘形は径40～50㎝の略円形を呈する。建物の軸線方向は、Ｎ－15°－Ｅである。

ＳＢ1472掘立柱建物跡（第22図）

Ｐ・Ｔトレンチで確認した桁行２間×梁行１間の東西棟建物である。ＳＫ1420を切る。平面規模は、桁行総長・北側柱列で4.5m、南側柱列では4.55mとなる。梁行総長は1.2mとなる。柱掘形は径35～40㎝の略円形を呈する。建物の軸線方向は、Ｎ－15°－Ｅである。

ＳＢ1471掘立柱建物跡（第23図）

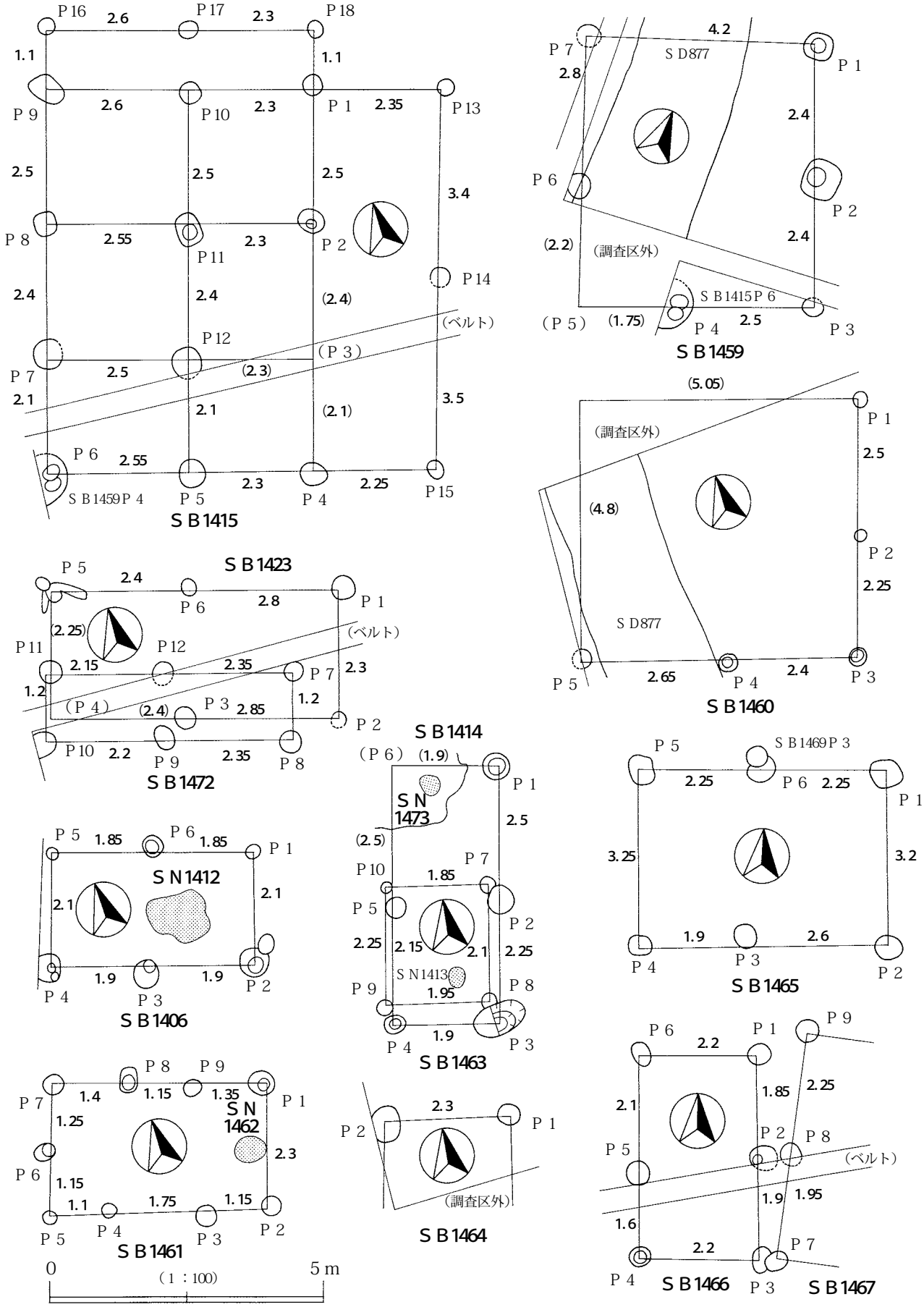
Ｐ・Ｔトレンチで確認した１間四方の建物跡である。ＳＢ1415に切られる。平面規模は、南側柱列2.4m、西側柱列2.35mとなる。柱掘形は径35～45㎝の略円形となり、深さはＰ３で40㎝となる。建物の軸線方向は、Ｎ－12°－Ｅである。

ＳＢ1469掘立柱建物跡（第23図）

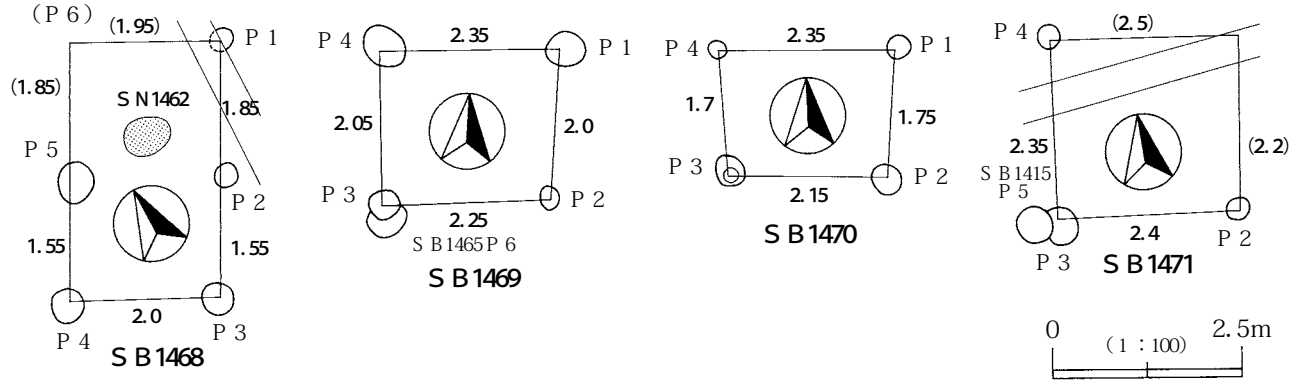
Ｐトレンチ北東側で確認した１間四方の建物跡である。ＳＢ1465を切る。平面規模は、北側柱列で2.35m、南側柱列が2.25m、東側柱列が2.0m、西側柱列が2.05mとなる。柱掘形は径が35～50㎝の円・楕円形となる。Ｐ２掘形埋土が③タイプを呈する。建物の軸線方向はＮ－６°－Ｗとなる。

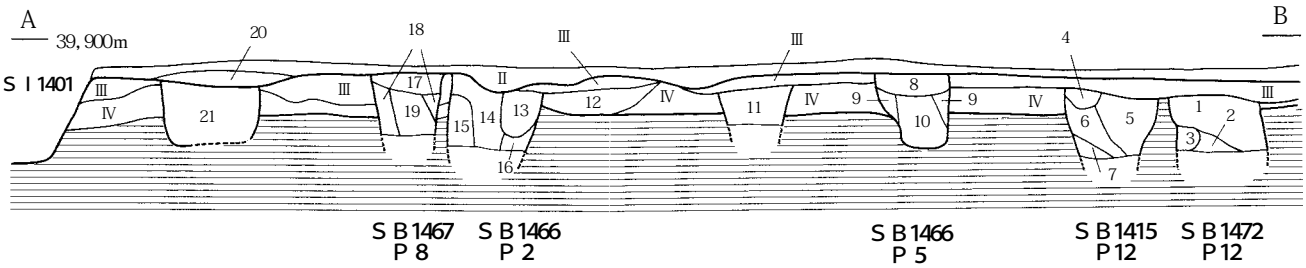
ＳＢ1463掘立柱建物跡（第22図）

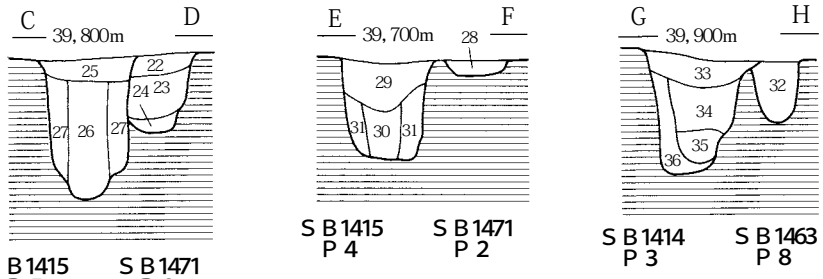
Ｊ１トレンチで確認した１間四方の建物跡である。ＳＢ1414に切られる。平面規模は、北側柱列で1.85m、南側柱列が1.95m、東側柱列が2.1m、西側柱列が2.25mとなる。柱掘形は径が30㎝前後の

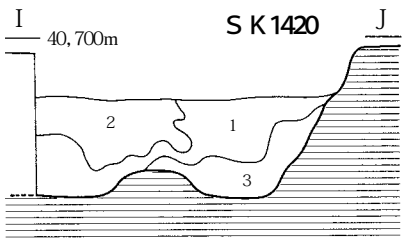


第22図　東部の遺構群：掘立柱建物跡（1）









SK1420

1：黒褐色シルト質土（10YR2/2）地山粘土小ブロック少量含む
2：黄褐色粘質土（10YR5/8）地山粘土二次堆積層
3：黄褐色粘質土（10YR5/6）地山粘土二次堆積層
※全体に締まりなく、ボソボソする、人為的堆積層

掘立柱建物跡

1：黒褐色シルト質土（10YR3/1）地山粒子・炭化物ごく少量含む
2：黒褐色シルト質土（10YR3/2）地山粒子少量含む、ボソボソする
3：黄褐色粘土（10YR5/6）地山粘土ブロック
4：黄褐色粘土（10YR5/6）地山粘土ブロック
5：暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粒子斑状に多く含む
6：暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粒子斑状に多く含む
7：黒褐色シルト質土（10YR3/2）地山粒子少量含む
8：黒褐色シルト質土（10YR3/2）地山粒子ごく少量含む
9：褐色シルト質粘土（10YR4/4）地山粘土小ブロック多く含む
10：黒褐色シルト質土（10YR3/2）地山粒子少量含む
11：にぶい黄褐色シルト質粘土（10YR4/3）地山粘土小ブロック斑状に多く含む
12：黒褐色シルト質土（10YR2/3）浅い土坑か、地山粒子少量含む
13：黒褐色シルト質土（10YR3/2）P２掘形を切る柱穴
14：黒褐色シルト質土（10YR2/3）地山粒子ごく少量含む
15：暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粒子斑状に多く含む
16：黒褐色シルト質土（10YR3/2）地山粒子ごく少量含む
17：黒褐色シルト質土（10YR3/2）地山粒子少量含む
18：暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粒子斑状に多く含む
19：黒褐色シルト質土（10YR3/1）地山粒子少量含む
20：黒褐色シルト質土（10YR2/3）地山粒子少量含む
21：暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粒子斑状に多く含む、ボソボソする
22：黄褐色粘質土（10YR5/6）地山粘土が主となりシルト質土が混入
23：黒褐色シルト質土（10YR2/2）地山粒子ほとんど含まず
24：黒褐色シルト質土（10YR3/1）底面堅く締まる、柱圧痕
25：にぶい黄褐色シルト質粘土（10YR4/3）地山粘土小ブロック斑状に多く含む
26：黒褐色シルト質土（10YR3/1）地山粒子ごく少量含む、ボソボソする
27：黒褐色シルト質土（10YR2/2）地山粒子やや多く含む
28：黒褐色シルト質土（10YR2/3）地山粒子やや多く含む
29：黒褐色シルト質土（10YR3/2）地山粒子少量含む
30：黒色シルト質土（10YR2/1）地山粒子ごく少量含む
31：黒褐色シルト質土（10YR2/2）地山粒子やや多く含む
32：暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粒子斑状に多く含む
33：黒褐色シルト質土（10YR2/3）地山粒子やや多く含む
34：黒褐色シルト質土（10YR3/1）地山粒子ごく少量含む
35：黒褐色シルト質土（10YR3/2）地山粒子少量含む
36：にぶい黄褐色シルト質粘土（10YR4/3）地山粘土小ブロック斑状に多く含む

第23図　東部の遺構群：掘立柱建物跡（２）、ＳＫ1420土坑

略円形となる。深さはＰ８で約30㎝である。建物の軸線方向はＮ－10°－Ｗとなる。

ＳＢ1470掘立柱建物跡（第23図）

Ｊ１トレンチで確認した１間四方の建物跡である。平面規模は、北側柱列で2.35m、南側柱列が2.15m、東側柱列が1.75m、西側柱列が1.7mとなる。柱掘形は径が35～40㎝の略円形となる。建物の軸線方向はＮ－Ｓとなる。

ＳＢ1464掘立柱建物跡（第22図）

Ｐトレンチ南西側で確認した北側柱間１間の建物跡である。ＳＤ877空堀跡に切られる。柱間は2.3mであり、柱掘形は一辺が50～60㎝の隅丸方形を呈する。建物の軸線方向はＮ－10°－Ｗとなる。

ＳＩ1401竪穴住居跡（第24・25図、図版７）

Ｐトレンチ東端からＭ１トレンチにかけての第Ⅲ層上面で確認した。西側壁を切り込んでＳＢ1415建物跡Ｐ14、ＳＢ1467建物跡Ｐ９が構築される。竪穴の規模は南北3.95m、東西3.2mの隅丸方形を呈する。床面までの深さは40～50㎝となる。平坦で堅く締まる床面上には、３箇所で焼土面が見つかった他に、明確な柱穴・壁溝はない。そこで壁面や周囲を精査した結果、竪穴の外側に柱が配される構造と推測した。

柱穴配置は、南北に２間、東西に１間で竪穴部を覆う。さらに北壁柱列から北側に、もう１間分の張り出しが伴う。いわゆる竪穴住居に掘立柱建物が併設される施設と考えることができる。柱間距離での規模は、竪穴部で南北3.95m、東西3.3m、掘立部で南北2.4～2.6m、東西は3.2～3.3mとなる。各柱穴は径が25～45㎝程であり、東側壁中央のＰ２は壁面を切り込んで構築している。柱列の軸線方向はＮ－５°－Ｗとなる。竪穴内の堆積土は12層に分けられるが、基本的に人為的埋土であり、各層共に堅く締まる。

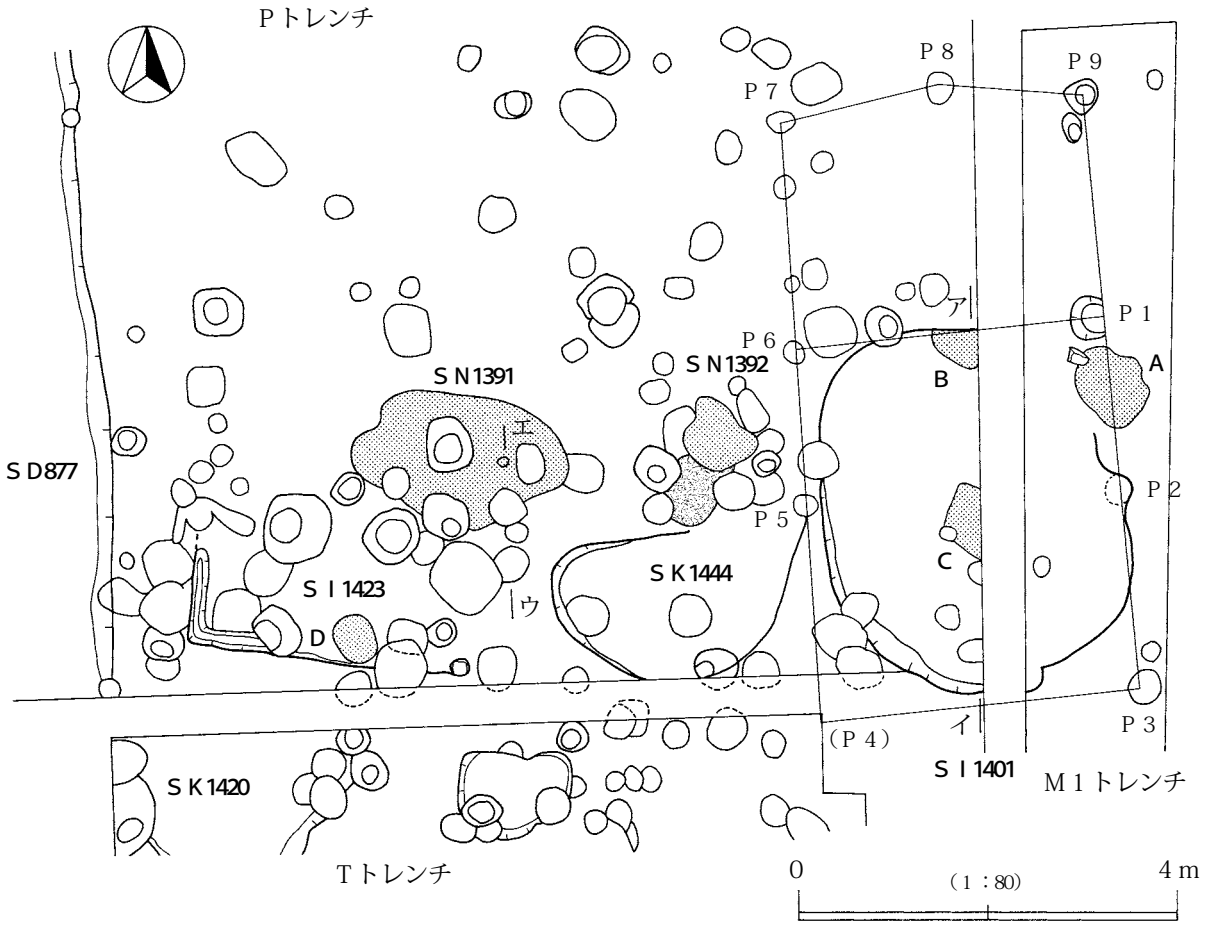
焼土面は、東壁北寄り（Ａ）、北壁中央部（Ｂ）、中央部（Ｃ）の３箇所で確認した。配置から見てＡ・Ｂはカマド火床面、Ｃは地床炉であったと推測される。

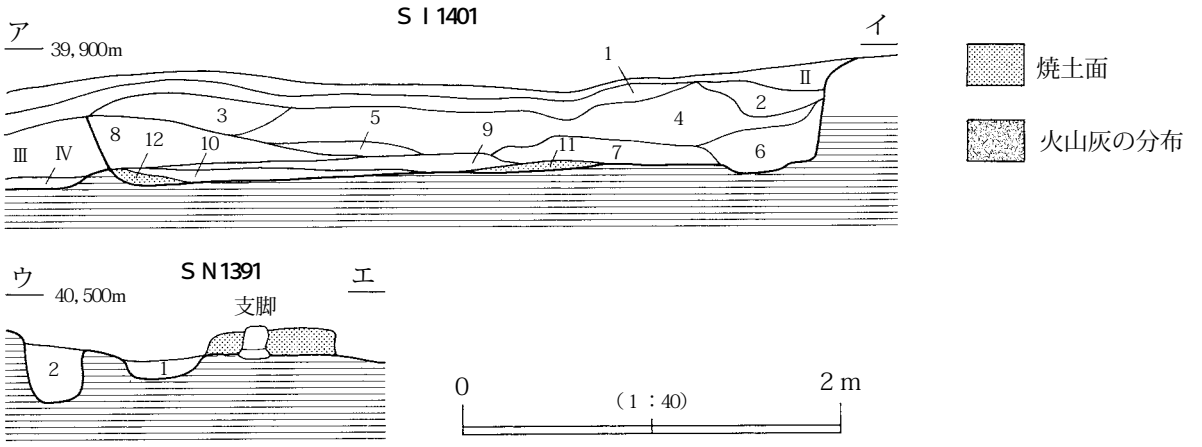
カマドＡは、長さ90㎝、幅70㎝程の焼土面として確認した。火熱を受けた角礫が１点焼土中に立っており、位置的にはカマド左袖部の芯材であった可能性がある。なお焼土を篩いにかけたところ炭化米（35粒）・種子が出土した。Ｂは北側壁中央に接する位置、床面直上で検出した。カマド本体は破壊され、火床の基底部のみ残存する。このことからカマドは当初Ｂが作られ、これを廃棄後にＡを構築したと類推される。Ｃも床面直上で検出し、一辺が80㎝程となる。

遺物（第25図）は、４層内及び床面直上から多く出土した。須恵器坏（２～４）・台付坏（５）・蓋（６）・甕（８）、土師器坏（１・７）・甕・鍋（９）、鉄鎌（10）・鉄滓、砥石（台石片）がある。１は赤褐色を呈し、焼成良好な土師器坏で、底面に回転ヘラ切り痕を留める。体部下端にはケズリ調整が加わる。10は床面直上出土の鉄鎌で、すぐ側から鉄滓が共伴した。

ＳＩ1423竪穴住居跡（第24・26図、図版８）

Ｐトレンチ中央やや西側、近代の轍跡・硬化面と重複する焼土遺構（ＳＮ1391）として確認した。精査の結果、焼土面が支脚を伴うカマド火床面であり、壁・壁溝の一部が検出されたことから竪穴住居と判断した。なお本竪穴周辺には、数多くの建物柱穴と重複する位置関係にあたるが、明らかにＳＮ1391を切り込んで構築されるＳＢ1415・1466建物跡掘形を除くと新旧は不明である。

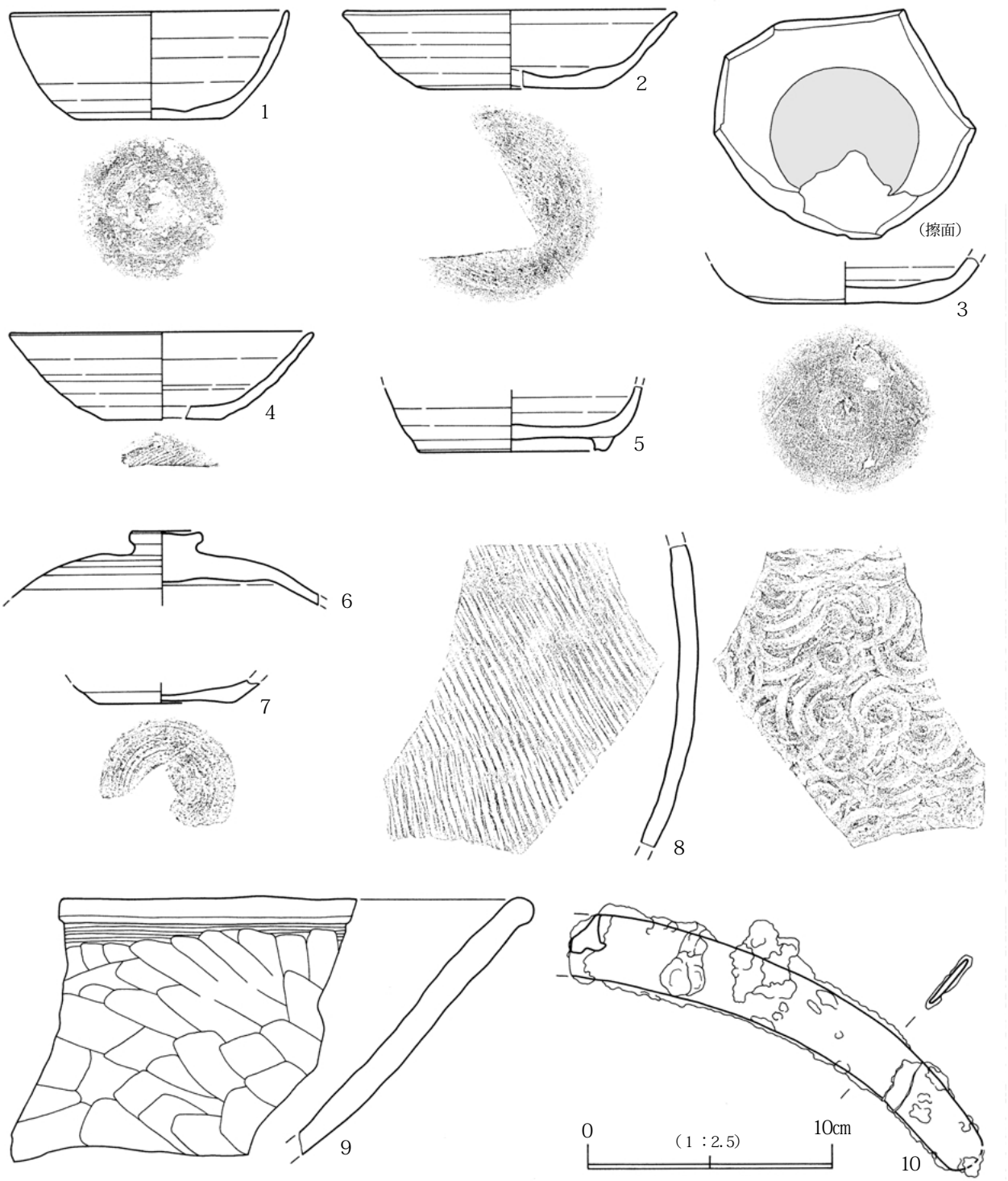




SＩ1401
1：黒褐色シルト質土（7.5Y R3/2）上面堅く締まる（SM1390轍跡）
2：褐色シルト質土（7.5Y R4/3）炭化物ごく少量含む
3：黒褐色シルト質土（7.5Y R3/2）炭化物ごく少量含む
4：黒褐色シルト質土（10Y R2/3）焼土・炭化物粒子少量、地山粘土粒子ごく少量含む
5：黒褐色シルト質土（10Y R3/2）焼土・炭化物・地山粘土粒子少量含む
6：黒色シルト質土（10Y R2/1）炭化物・地山粘土粒子ごく少量含む
7：黒褐色シルト質土（10Y R2/3）地山粒子を大量に、焼土・炭化物粒子ごく少量含む
8：黒褐色シルト質土（7.5Y R2/2）焼土・地山粘土粒子少量、炭化物ごく少量含む
9：黒褐色シルト質土（7.5Y R3/2）焼土・炭化物・地山粘土粒子ごく少量含む
10：黒褐色シルト質土（10Y R2/3）炭化物少量含む
11：暗赤褐色焼土（５Y R3/6）
12：赤褐色焼土（５Y R4/6）
※８～10層を除き、全体に堅く締まる

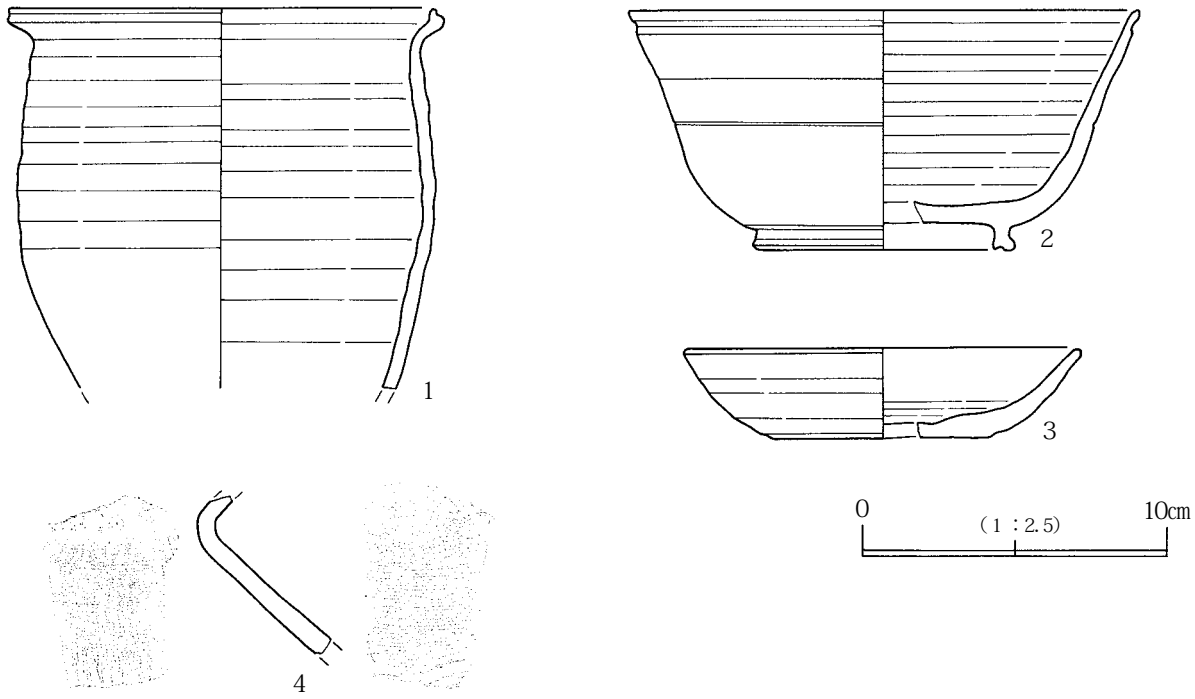
SN1391
赤褐色焼土（2.5Y R4/6）
1：黒褐色シルト質土（10Y R2/2）炭化物少量含む
2：暗褐色シルト質土（10Y R3/3）

第24図　ＳＩ1401・1423竪穴住居跡、ＳＮ1391・1392焼土遺構、ＳＫ1444土坑



番号	種別	器形	出土位置・層位	特　　徴	口径 cm	底径 cm	器高 cm	底径指数	高径指数	外傾度
1	土師器	坏	ＳＩ1401	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り→体部下半ケズリ、器面あばた状に剥落	11.3	6.0	4.4	0.53	38.9	21
2	須恵器	坏	ＳＩ1401	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り	13.4	7.3	3.2	0.54	27.6	37
3	須恵器	坏	ＳＩ1401	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り、体部を打ち欠き、内面底部に擦面		6.4	(1.9)			
4	土師器	坏	ＳＩ1401	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	12.3	4.8	3.6	0.39	29.3	39
5	須恵器	台付坏	ＳＩ1401	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り→付高台		7.7	(2.7)			
6	土師器	蓋	ＳＩ1401	内外：ロクロ調整、天井部ケズリ、周縁部打ち欠き			(3.0)			
7	土師器	坏	ＳＩ1401床面	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り→底部～体部下半まで回転ケズリ調整		5.4	(0.9)			
8	須恵器	甕	ＳＩ1401	外：平行タタキ、内：青海波アテ具			(12.3)			
9	土師器	鍋	ＳＩ1401	整形時ロクロ使用、外：ケズリ、煤状炭化物付着			(10.5)			
10	鉄製品	鎌	ＳＩ1401床面	長さ19.2×幅2.0～2.7×厚さ0.2、柄部側欠損						

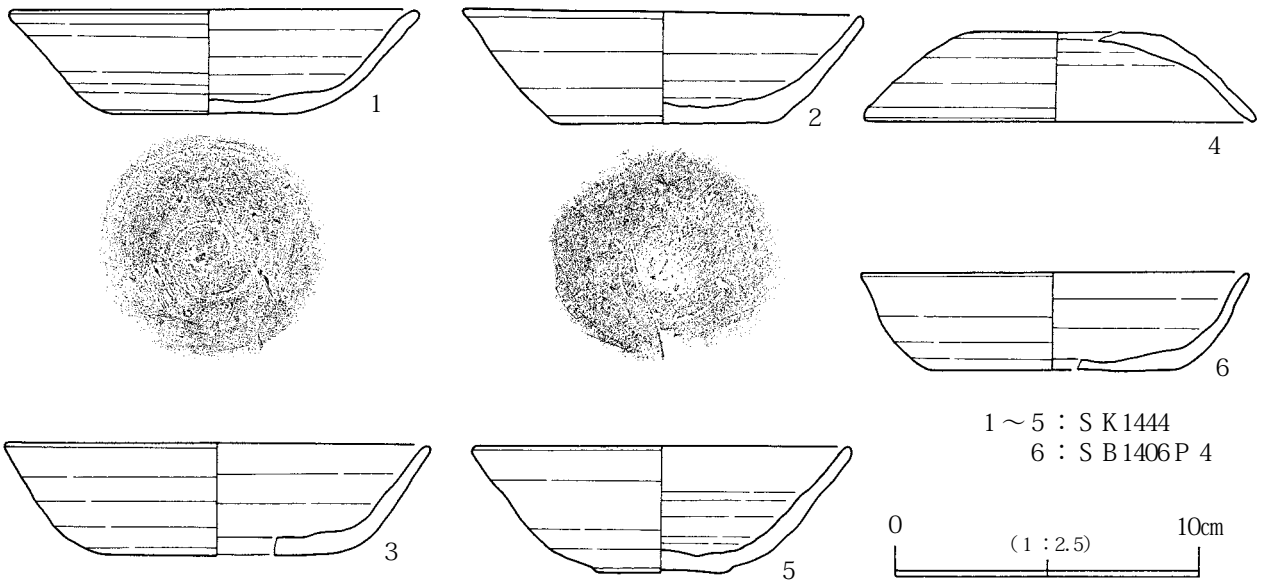
第25図　ＳＩ1401竪穴住居跡出土遺物



番号	種別	器形	出土位置・層位	特　　徴	口径 cm	底径 cm	器高 cm	底径指数	高径指数	外傾度
1	土師器	甕	ＳＩ1423カマド支脚転用	内外：ロクロ調整、被熱	13.9		(12.5)			
2	須恵器	台付坏	ＳＮ1391＋ＳＩ1401	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り→付高台、体部に２条の沈線	16.7	8.5	7.9	0.51	47.3	21
3	須恵器	坏	ＳＮ1391（ＳＩ1423内）	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り	12.9	7.3	3.0	0.57	23.3	30
4	須恵器	甕	ＳＮ1392	外：平行タタキ、内：ロクロナデ			(5.0)			

ＳＩ1423竪穴住居跡カマド（ＳＮ1391）
支脚（土師器甕）出土状況（北東→）
第26図１に掲載

第26図　ＳＩ1423竪穴住居跡、ＳＮ1392焼土遺構出土遺物



番号	種別	器形	出土位置・層位	特　　徴	口径 cm	底径 cm	器高 cm	底径指数	高径指数	外傾度
1	須恵器	坏	ＳＫ1444	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り	13.4	6.9	3.4	0.51	25.4	36
2	須恵器	坏	ＳＫ1444	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り	13.0	7.0	3.8	0.54	29.2	34
3	須恵器	坏	ＳＫ1444	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り	13.9	8.2	3.7	0.58	26.6	30
4	須恵器	蓋	ＳＫ1444	内外：ロクロ調整、切り離し：回転ヘラ切り、天井部ケズリ	12.8		3.0			
5	土師器	坏	ＳＫ1444	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	12.4	4.4	4.2	0.35	33.9	34
6	須恵器	坏	ＳＢ1406Ｐ6	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り	12.8	8.4	3.2	0.66	25.0	27

Ｊ１トレンチ北部
上：ＳＢ1461建物柱掘形（Ｐ８）
下：ＳＮ1473焼土遺構
　　ＳＫ1349土坑上面に構築

第27図　ＳＫ1444土坑・ＳＢ1406建物跡出土遺物

竪穴は南西隅部を起点として、南側の壁・壁溝の長さ約３ｍ、西側壁溝の長さ１ｍ程を確認した。ＳＮ1391の広がり、支脚の位置から、竪穴は一辺が３ｍ以上で3.5m前後の方形を呈すると推測される。壁溝の幅は15～20㎝、深さは約10㎝である。南側壁東寄りに一部残存する壁の立ち上がりは約15㎝である。ＳＮ1391は、長さ2.3m、幅1.45mの広がりをもつ。焼土中の東寄りには土師器甕（第26図１）を倒立させており、現位置を保った転用支脚と判断される。また南壁に接する位置には長さ50㎝、幅40㎝程の焼土面（Ｄ）が存在する。これもＳＩ1401カマドＢ同様に南壁沿いに置かれたカマド火床面の可能性があり、ＳＮ1391前段階のカマドとも思われる。本竪穴に伴う柱穴、その他の施設の有無は不明である。

支脚とした甕以外には、ＳＮ1391周辺から須恵器台付坏（２）・坏（３）・甕、土師器坏・甕が出土した。２はＳＩ1401堆積土中出土個体と接合したものである。

ＳＮ1392焼土遺構・ＳＫ1444土坑（第24・27図、図版８）

Ｐトレンチ中央やや東側、近代の轍跡・硬化面と重複する形で焼土の広がり（ＳＮ1392）と火山灰の分布を確認した。硬化面形成に伴う土壌汚染により、焼土・火山灰と近接する建物掘形・柱穴との新旧関係は明確にできなかった。ただＳＢ1466を構成する柱穴（Ｐ１）は、焼土面を切り込んで構築される。焼土内より、須恵器坏・蓋・甕（第26図４）、土師器坏・甕が出土した。

ＳＫ1444はＳＮ1392の南側に位置し、焼土面周辺を精査した段階、第Ⅲ層下面で確認した。複数の建物掘形と重複するが、新旧関係は旧い順に、ＳＢ1465Ｐ３→ＳＫ1444→ＳＢ1423Ｐ１・ＳＢ1466Ｐ２となる。規模は東西約2.5m、南北が1.5m程の楕円状を呈するが、北東側のプランは明らかにできなかった。深さは15㎝前後である。

遺物（第27図）は、須恵器坏（１～３）・蓋（４）・甕、土師器坏（５）・甕が出土した。

両者はＳＩ1401とＳＩ1423に挟まれる位置にあり、特にＳＮ1392はＳＮ1391と同質の焼土面であることから、ＳＮ1392をカマドとする住居が存在していた可能性がある。

ＳＫ1420土坑（第21・23図）

Ｔトレンチ西端部、第Ⅲ層で確認した。少なくとも４棟の建物掘形と重複し、いずれにも切られる。ＳＢ1415Ｐ６、ＳＢ1423Ｐ３、ＳＢ1459Ｐ３・４、ＳＢ1472Ｐ９・10である。その規模は、東西が約2.3m、南北は土坑北端がＰトレンチ南端で確認されなかったことから、2.7m以上3.1m未満となる歪な円形を呈すると思われる。深さは確認面より85㎝に達するが、壁面・底面共に凹凸が著しい。堆積土はその堆積状況から、明確に人為的な埋土と判断される。遺物は出土しなかった。

ＳＤ1325溝状遺構（第21図、図版12）

Ｊ１トレンチ南部、第Ⅲ層面で確認した。そのプランは、第119次調査時に土坑として検出しており、今回精査を実施した。規模は、確認面での幅が1.7m前後、長さは4.2m以上の長円状を呈する。深さは南側で45㎝となるが、北側では10㎝未満となる。軸線方向はＥ－Ｗを指し、ＳＤ877空堀跡と直交する位置関係にある。

堆積土は７層に分けられる。最上層は地山粘土の二次堆積土であり、堅く締まることと、その位置から、ＳＤ877空堀の内側（西側）に存在したであろう土塁（ＳＦ1300）盛土であったと推測される。

遺物は、底面直上および５層中より土師器坏・甕、須恵器坏破片が、確認面上及び２・３層内では中世陶器がそれぞれ出土した。このことから、遺構自体は古代において構築されたものであり、中世

期には土塁盛土に覆われたと判断される。

ＳＮ1412・1413・1462・1473焼土遺構（第21～23図、27図下）

Ｊ１トレンチ、第Ⅲ層面で検出した。ＳＮ1412は長さ1.2m、幅１ｍ程の不整円形の焼土面が確認され、ＳＢ1406内に収まる位置となる。ＳＮ1413は径35ｃｍ程の略円形の焼土面である。ＳＢ1414・1463内に収まる位置にあたる。ＳＮ1462は長さ60㎝、幅50㎝程の略円形を呈する。ＳＢ1461・1468内に収まる位置となる。ＳＮ1473は、ＳＫ1349（第119次検出）埋土最上位に構築される。径40ｃｍの略円形の焼土面であり、ＳＢ1414内北側に位置する。

（３）第３～６段整地面検出の遺構と遺物

①：第３・４段整地面

第３段整地面での検出遺構はない。昨年度の調査事例ではＪ２トレンチ南端、ＳＫ1354が該当する。

第４段整地面の遺構は、Ｋトレンチ内で検出された１遺構のみである。

ＳＫⅠ1389竪穴状遺構（第29・31図）

第Ⅲｂ層を掘り込み面とする竪穴状遺構である。遺構の西側部を検出し、現況での長さは3.3m、幅は１ｍ、深さは25～30㎝となる。堆積土は６層に分層される。

遺物は須恵器坏（１～３）、土師器坏・甕が出土した。

②：第５段整地面

本整地面の遺構は、Ｋトレンチ内で検出された１遺構のみである。

ＳＤ1405溝跡（第29図）

整地面北端部で確認した硬化面をもつ溝状の遺構である。第６段整地面南端にあたるＳＤ1404の南約３ｍに位置する。東西方向に延びる溝状プランは、幅1.1m程であり、第Ⅱ層除去後の第Ⅲｂ層上面で検出した。溝の両端からそれぞれ幅20～30㎝の範囲が特に硬化しており、ＳＤ1404Ａ（硬化面）同様に道路跡であった可能性がある。

本遺構の構築面は、土層観察により第Ⅲａ層上面と判断されるが、掘り込みあるいは使用に伴い、溝部分のみ同層が消滅している。同層が掘り込み面とすれば、層序としては、ＳＤ1404Ａより後出となる。なお本溝確認箇所は、現地表でも東西方向に僅かに窪んでいる。

③：第６段整地面

本整地層面の遺構は、ＳＤ1458のみＭ２トレンチ、他は全てＫトレンチで検出された。北端部より概観する。

ＳＫ1402土坑（第30図右）

整地面北端部、丘陵部最先端部で確認した土坑である。次のＳＤ1397溝跡と後述の沖積地面で検出したＳＤ1395溝跡に挟まれる位置関係となる。土坑の規模・形状は不明確であるが、本整地面の先端部を構成する整地面（ａ～ｅ層）形成以前に構築された施設となる。遺物は土師器坏が出土した。

ＳＤ1397溝跡（第30図右、図版11）

整地面北端部で検出した東西方向の溝跡である。精査の結果、土層図でＡ層とした整地層（盛土）を掘り込み面とする幅90㎝前後、深さ約60㎝の溝跡と判明した。出土した遺物はない。

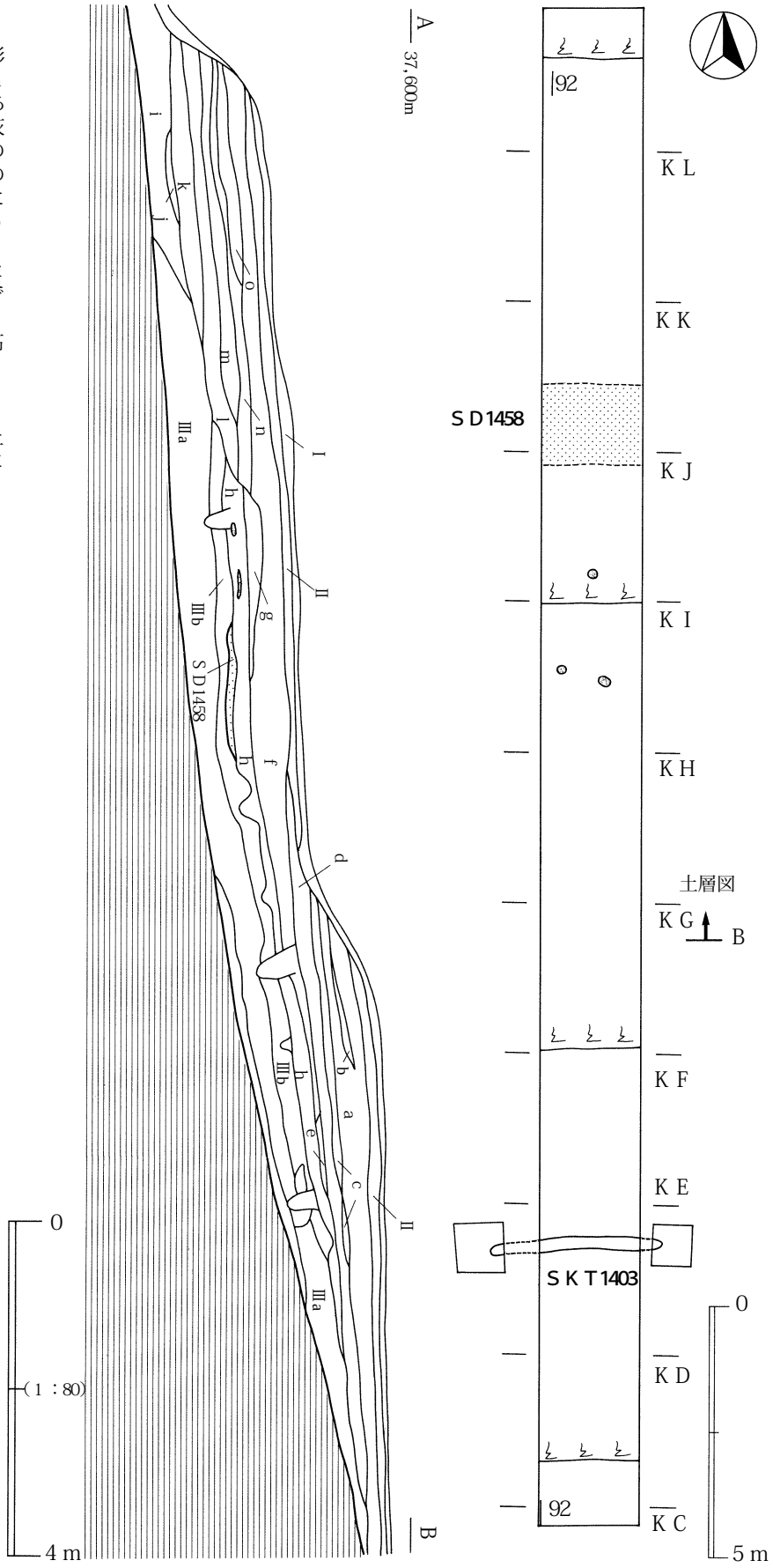
ＳＫⅠ1400竪穴状遺構（第30図左）

Ｍ２トレンチにおける整地層の堆積状況

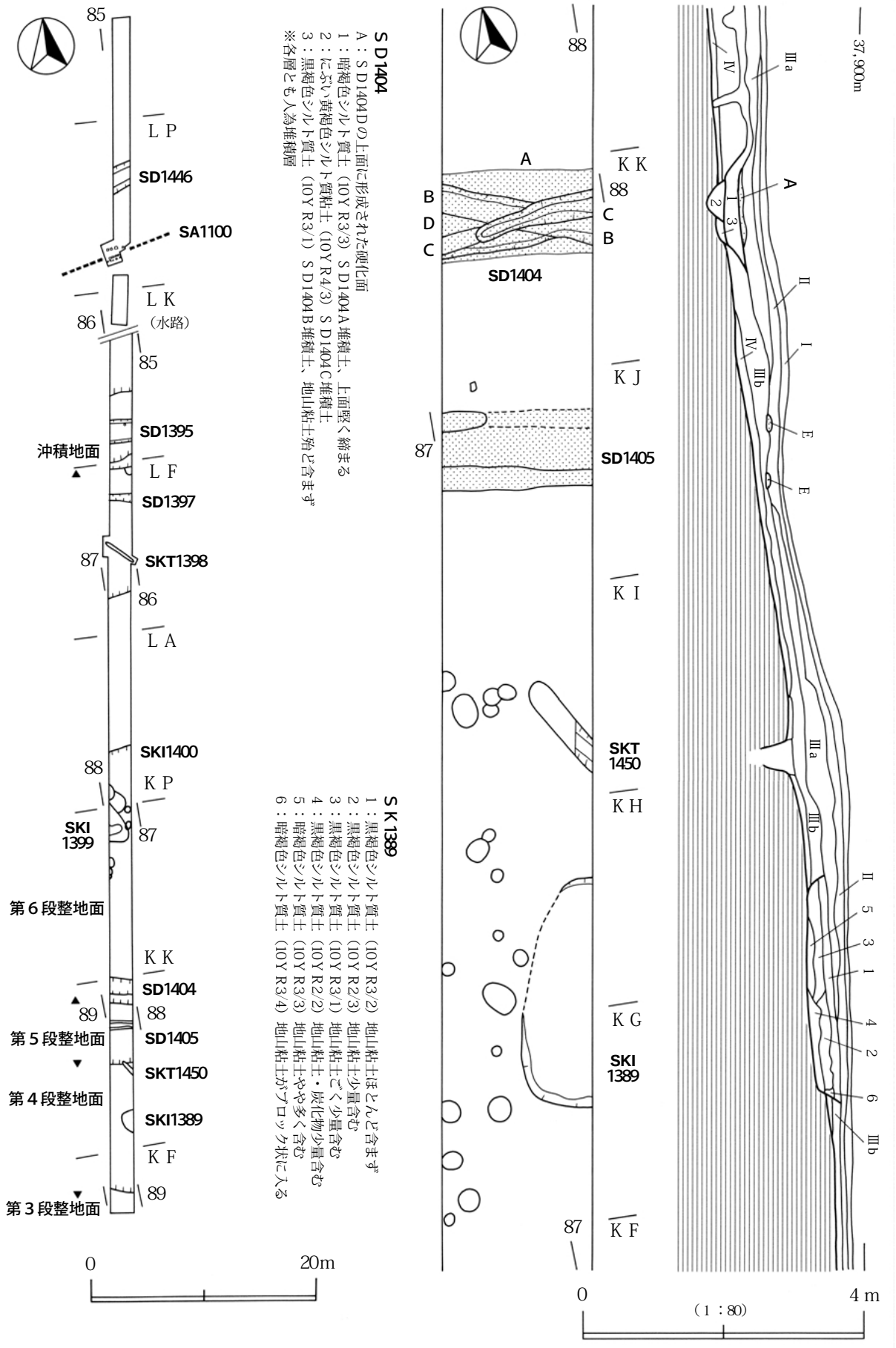
整地層は、第Ⅲ層と第Ⅱ層の間に形成される。最初は、第Ⅲｂ層の上にｈ層が水性堆積する。層厚20㎝前後であり、中に火山灰が筋状に入る。火山灰の存在により、本区域の整地層形成の上限時期が10世紀前葉となる。その後、人為堆積となるｇ層がｈ層の上にのる。次後、おそらく土砂流失という天災に見舞われ、北側（土層図の上・左側）では地山面まで露出する事態となる。この後、ｉ～ｍ層が水性堆積で形成される。次いで人為堆積層ｎ・ｏ層が上にのる。ここでｇ層形成時の高さまで復元された形となる。その後、最大層厚40㎝のｆ層が人為堆積する。ここには炭化物などと共に遺物が多く含まれ、遺物包含層をなす。ｆ層の上層には順にｅ～ａ層が人為的・帯状に形成される。

ａ：暗褐色シルト質粘土（7.5Y R3/3）
　堅く締まる
ｂ：褐色粘質土（7.5Y R4/3）
　ａ層中に幅５㎝程の帯状に入る、ａ層より堅く締まる
ｃ：暗褐色シルト質粘土（10Y R3/4）
　幅10㎝前後の帯状に入る。堅く締まり、貼床状
ｄ：暗褐色シルト質土（10Y R3/3）
　地山粘土・炭化物斑状にやや多く含む
ｅ：黒褐色シルト質土（10Y R2/2）
　炭化物多く含む
ｆ：黒褐色シルト質土（10Y R2/3）
　地山粘土・炭化物斑状にやや多く含む、遺物包含層
ｇ：暗褐色シルト質土（10Y R3/4）
　地山粘土がブロック状に入る
ｈ：極暗褐色シルト質土（7.5Y R2/3）
　火山灰を帯状に含む、地山粒子・炭化物ごく少量含む
ｉ：黒褐色シルト質土（10Y R2/3）
　第Ⅲ層の二次堆積層か、水性堆積
ｊ：にぶい黄褐色シルト質粘土（10Y R 4/3）
　地山粘土の二次堆積層、帯状に入る
ｋ：黒褐色シルト質土（10Y R2/2）
　第Ⅲ層の二次堆積層か、水性堆積
ｌ：黒褐色シルト質土（10Y R3/1）
　水性堆積
ｍ：褐灰色シルト質土（10Y R4/1）
　水性堆積
ｎ：暗褐色シルト質土（10Y R3/3）
　地山粘土やや多く含む、人為堆積
ｏ：暗褐色シルト質土（10Y R3/4）
　地山粘土やや多く含む、人為堆積

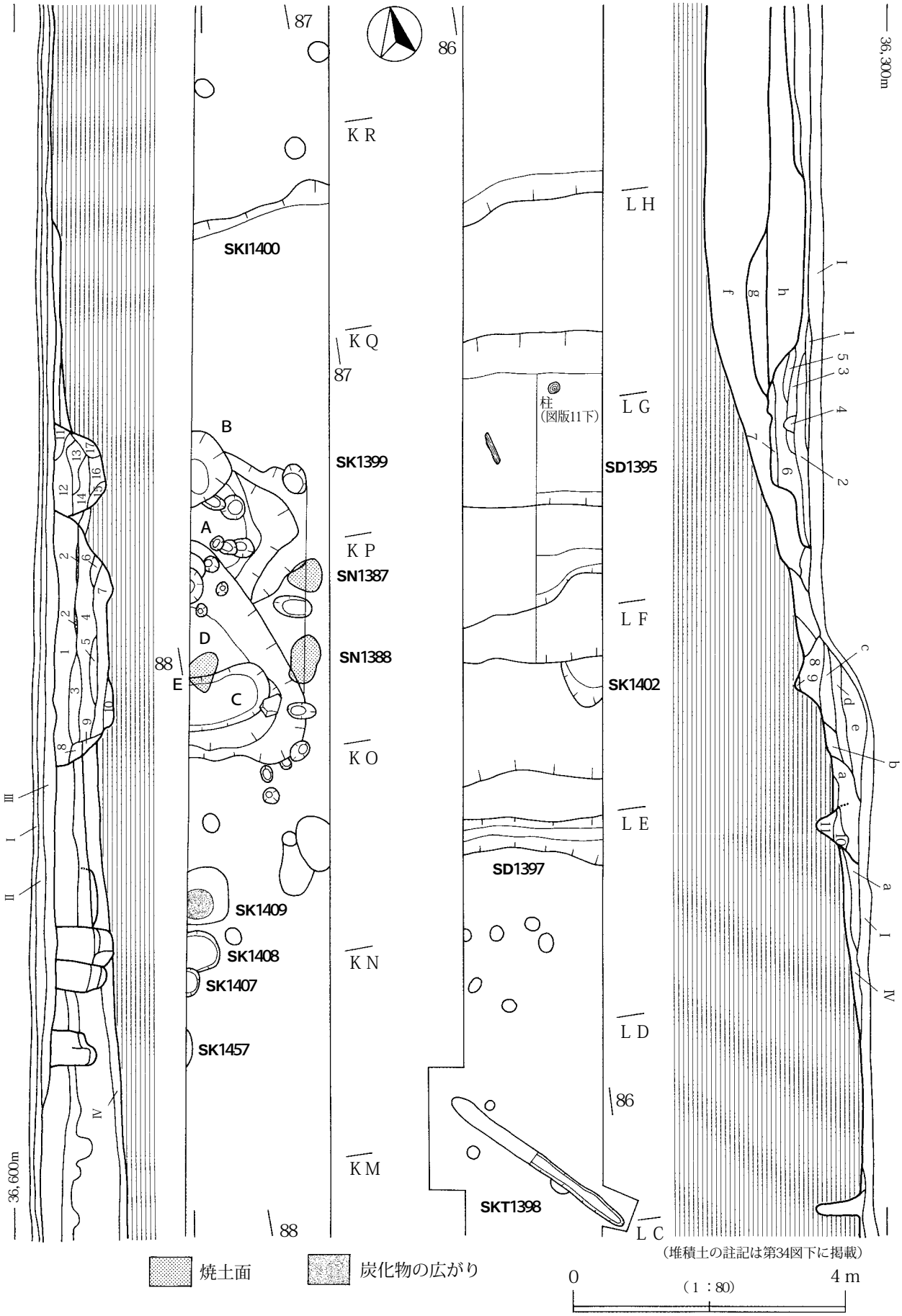
※第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲａｂ層は、Ｕトレンチで示した（第７図）基本層序に対応する。



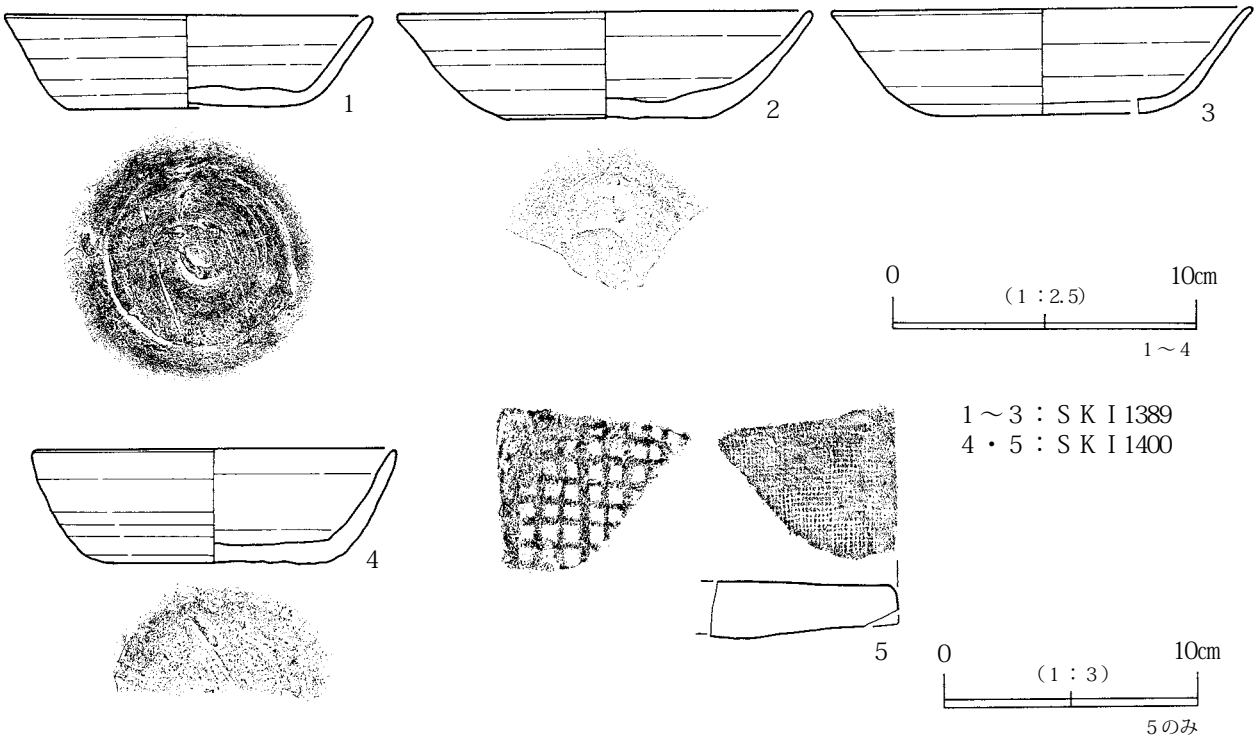
第28図　Ｍ２トレンチ遺構配置図・土層図



第29図　Kトレンチ全体図、遺構配置図（1）



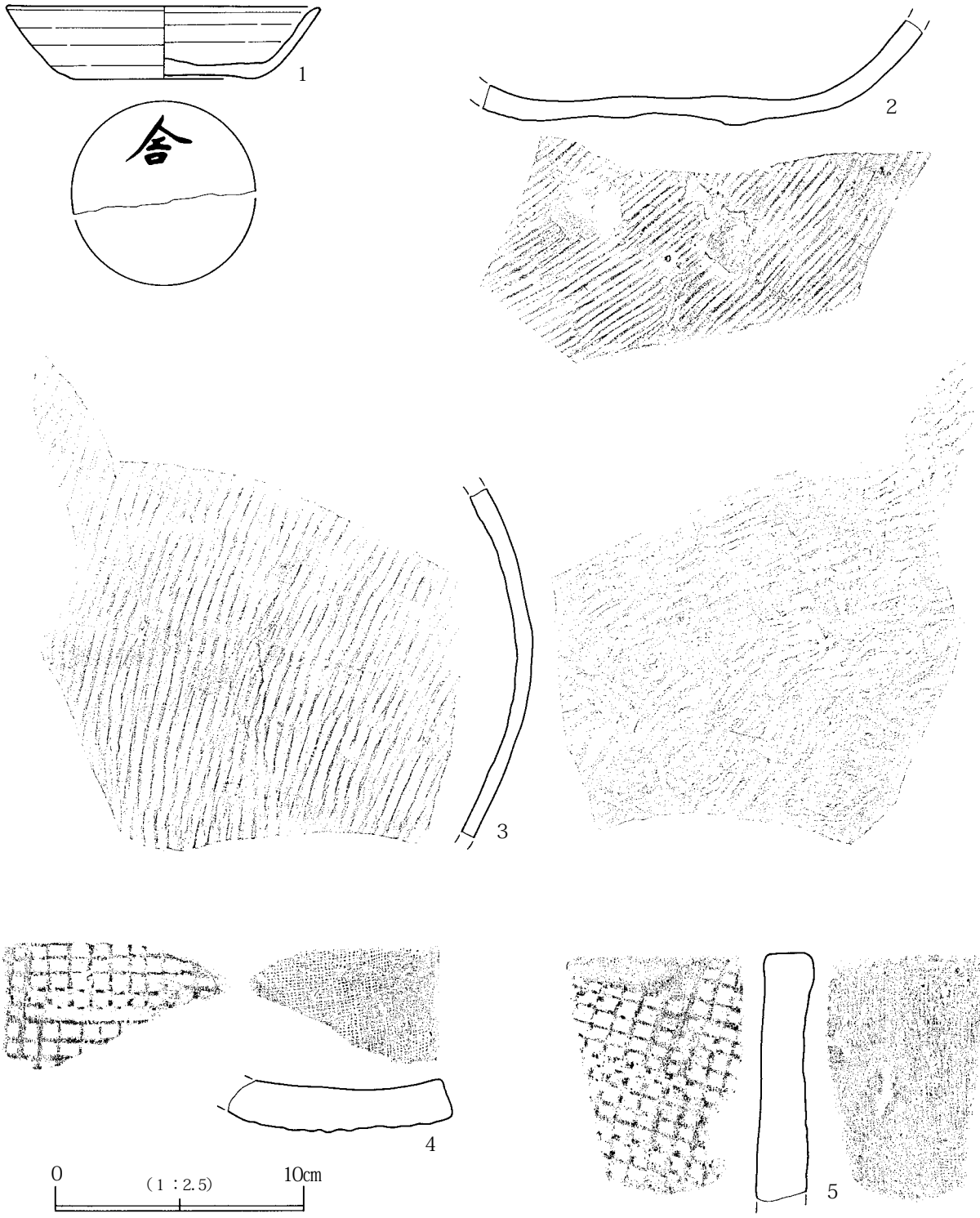
第30図　Ｋトレンチ遺構配置図（２）



番号	種別	器形	出土位置・層位	特　　徴	口径 cm	底径 cm	器高 cm	底径指数	高径指数	外傾度
1	須恵器	坏	ＳＫＩ1389	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り	12.1	7.8	3.2	0.64	26.4	27
2	須恵器	坏	ＳＫＩ1389	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り	13.7	7.0	3.5	0.51	25.5	36
3	須恵器	坏	ＳＫＩ1389	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り	13.8	6.4	3.5	0.46	25.4	32
4	須恵器	坏	ＳＫＩ1400	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り、煤状炭化物付着	12.0	7.6	3.8	0.63	31.7	20
5	瓦	平瓦	ＳＫＩ1400	凸面：正格子タタキ、凹面：布目						

左：第４段整地面で確認したＳＫＩ1389竪穴状遺構（左手前、北西→）
　　右上の一段高い面が第３段整地面となる
右：遺物出土状況（第31図１）

第31図　ＳＫＩ1389・ＳＫＩ1400竪穴状遺構出土遺物



番号	種別	器形	出土位置・層位	特　　徴	口径 cm	底径 cm	器高 cm	底径指数	高径指数	外傾度
1	須恵器	坏	ＳＫ1399Ｄ	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り、底部「舎」墨書	12.7	7.6	2.9	0.60	22.8	32
2	須恵器	甕	ＳＫ1399Ｄ	甕底部外面：平行タタキ			(4.4)			
3	須恵器	甕	ＳＫ1399Ｄ	外：平行タタキ、内：平行（縄目）アテ具			(14.0)			
4	瓦	平瓦	ＳＫ1399Ｄ	凸面：正格子タタキ、凹面：布目、黄白色を呈し、焼成ややあまい						
5	瓦	平瓦	ＳＫ1399Ｄ	凸面：正格子タタキ、凹面：布目、黄白色を呈し、焼成ややあまい						

第32図　ＳＫ1399Ａ～Ｄ土坑出土遺物

Ｋトレンチ中央部、第Ⅲ層で確認された。ＳＫ1399の北側に位置し、これに切られる。北側壁の立ち上がりを確認でき、残存する南北の長さは約４ｍとなる。壁高は10～15㎝にすぎない。床面は平坦となるが、柱穴その他の掘り込みは一切ない。

遺物（第31図）は、須恵器坏（４）、土師器坏・甕、格子目瓦片（５）が出土した。

ＳＫ1399Ａ～Ｄ土坑、ＳＮ1399Ｅ・1387・1388焼土遺構（第30図左、図版９・10）

Ｋトレンチ中央部、第Ⅲ層で検出された。遺構確認段階では、南北方向の長さが５ｍ程の竪穴と２基の焼土遺構の重複と見ていたが、精査の結果、竪穴としたものは、小柱穴を除くとＡ～Ｅからなる大小の土坑・焼土の複合遺構であることが判明した。新旧関係は明確で、旧い方からＣ→Ｄ→Ｅ、Ａ→Ｂ→Ｄ→Ｅとなり、Ｃ・Ｅを除く３遺構は、第Ⅲ層下位を掘り込み面とする。確認された規模・形状は次の通り。Ａは、南北の長さが2.3m、深さ50ｃｍであり、壁面・底面ともに凹凸が著しい。Ｂは南北の長さ1.1m、幅が60㎝、深さは80㎝となる。Ｃは、Ｄ底面近くで検出した土坑で、長さ1.2m以上、幅80㎝の楕円形を呈する。深さは僅か15㎝程（10層）であるが、底面は平坦に形成される。Ｄは南北の長さが3.1m、深さ50～80㎝であり、Ａ程ではないが、壁面・底面ともに凹凸が見られる。堆積層中位の２層には十和田ａ火山灰が観察される。Ｅは径が50～60㎝程の不整形を呈する焼土遺構（５層）であり、Ｄの７層堆積面上に分布する。

本竪穴の遺物（第32図）は、主にＤの１層内から須恵器坏（１）・甕（２・３）、土師器坏・甕、瓦（４・５）が出土した。１は底部に「舎」の墨書が判読される。

ＳＮ1387・1388は、第Ⅲ層上面で確認した焼土遺構である。ＳＮ1387は径50㎝程の不整円形、ＳＮ1388は、長さ75㎝、幅40㎝の楕円形を呈する。両者は約70㎝の間隔をおいて南北に配される。焼土面周辺出土の遺物には、須恵器坏、土師器坏・甕がある。また両焼土内より炭化米が各10粒程出土した。

以上の観察所見から本遺構群は、当初Ｃ土坑（深さ90㎝位か）が存在していた箇所にＡ→Ｂ→Ｄの土坑（土取り穴か）が掘り込まれ、Ｄを人為的に埋めた面上にＥ焼土遺構が作られる。その後、十和田ａ火山灰の降下を迎え、埋没の最終段階に土器類が遺棄される。さらにその後、第Ⅲ層が形成されるが、下位の土坑堆積層の影響により、やや窪地となった面にＳＮ1387・1388焼土遺構が構築されたと考えられる。

ＳＫ1407・1408・1409・1457土坑（第30図左、図版10）

ＳＫ1399の南側、Ｋトレンチ西壁に接して検出された。ＳＫ1409を除く３土坑は、ＳＫ1399と同じ第Ⅲ層下位を掘り込み面とする。

ＳＫ1407は、ＳＫ1408を切り込んで構築される。径40㎝程の円形を呈すると見られる。深さは75㎝。土師器小片が出土した。

ＳＫ1408は一辺が約60ｃｍの隅丸方形を示すと思われる。深さは85㎝に達する。ＳＫ1409は、地山漸移層面上で炭化物の分布を確認したもので、規模は一辺が80㎝程の隅丸方形となる。深さは10㎝にすぎない。ＳＫ1457は、一辺あるいは径が55㎝を呈し、深さは70㎝となる。

出土した遺物は、ＳＫ1407で土師器小片、ＳＫ1408では塼（厚さ６㎝）、土師器坏・甕の小片がそれぞれ少量のみである。

以上の各遺構は、その一部のみの確認であるが、堆積土の状況から、ＳＫ1409を除く３基は、掘立柱建物を構成する柱掘形の可能性がある。またＳＫ1408を除く３基はその底部が地山面に達していな

い。

ＳＤ1404溝跡（第29図、図版10）

本整地面南端部、第５段整地面北端直下に位置する溝状の遺構である。当初、第Ⅲａ層下面において、幅1.2ｍで東西に延びる硬化面（Ａ）を検出した。更に下層を掘り下げた結果、Ａと同一方向を示す３列の溝（Ｂ～Ｄ）が確認された。溝Ｂ（３層）は溝Ｃ・Ｄに切られ、確認される幅は40㎝、深さは15㎝程となる。溝Ｃ（２層）は溝Ｄに切られ、その幅60㎝、深さは25㎝である。溝Ｄ（１層）は溝Ｂ・Ｃを掘り込んで構築される。その幅は、約1.6ｍで深さ20㎝となる。遺物は、溝Ｄ内より須恵器坏、土師器甕が出土した。

以上の点から、硬化面Ａは、埋没途上の溝Ｄの窪地を利用した道路跡ではないかと推定される。

ＳＤ1458溝跡（第28図）

Ｍ２トレンチ、整地面南端・第Ⅲｂ層上部で検出した溝状の遺構である。幅約1.7ｍで東西に延びる浅い溝となるが、上面が堅くしまる。層序としては、上層（ｈ層）中に十和田ａ火山灰を含むことから、本遺構の廃棄下限時期は10世紀前半代となる。

本遺構は、ＳＤ1404ＡやＳＤ1405と同様に、道路跡と推測される。配置としては東隣Ｋトレンチの ＳＤ1404Ａと接続していた可能性があるが、層序の詳細な検証が必要である。

なおＭ２トレンチには第Ⅲ層あるいは整地面ｈ層を掘り込み面とする小柱穴が数本確認された。径20㎝前後であり、埋土に火山灰が充填している。

（４）沖積地面検出の遺構と遺物

Ｋトレンチ北部・北端部（ＬＦライン以北）にあたり、標高が約35ｍとなる。本面では外郭材木塀跡と、溝跡２条を検出した。各遺構とも旧水田耕作面下で確認した。

ＳＡ1100材木塀跡（第33図）

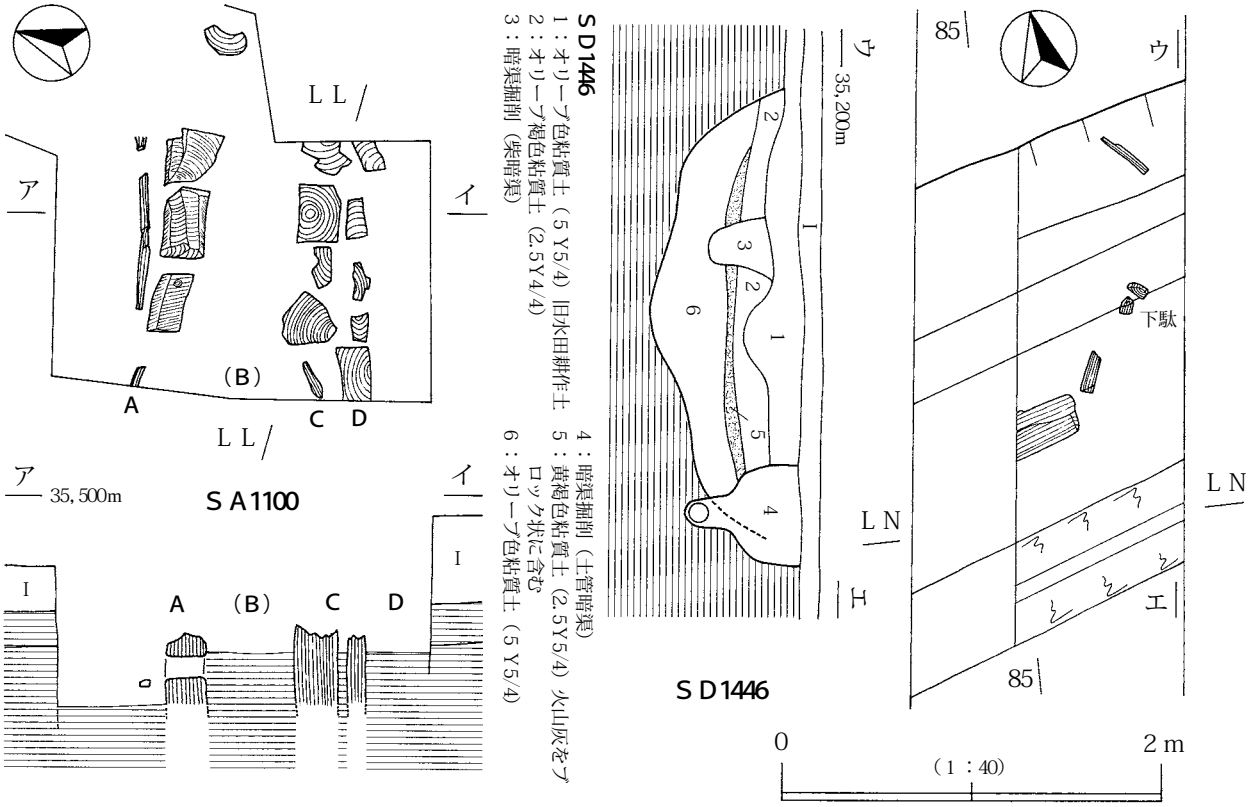
外郭西門と北門を結ぶライン上の材木塀跡である。概ね東西方向に延びるが、西側が南（外郭西門方向）を向き、Ｗ－15°－Ｓとなる。材木塀列は３条確認された、過去の調査成果から、北側が“外郭線Ａ期”（創建段階）で、最も南が“外郭線Ｄ期”となる。３列のうち、１列目と２列目の間が空閑帯となっていることから、Ｂ期は抜かれており、確認できた３列はＡ・Ｃ・Ｄ期の材木と考えることができる。各期の材木は、遺存状態の良好な個体で計測して、Ａ期が30㎝×25㎝程、Ｃ期が30㎝×20㎝、Ｄ期には20～25㎝×15㎝となる。材上端部の検出のみに留めたため、下部の様相は明らかにできなかった。今回の調査地点において、時期の特定可能な遺物の出土はなかったものの、年輪年代測定を援用すると、Ａ期が801年、Ｃ期が907年、Ｄ期917＋α年となる。(註２)

ＳＤ1446溝跡（第33・34図）

ＳＡ1100材木塀跡の北側約６ｍに位置する溝跡である。その軸線方向は、ＳＡ1100と同一となる。上面幅は2.3ｍ程であるが、溝南端を現代の暗渠（土管）溝（４層）により削平され不明確である。確認面からの深さは65㎝であり、埋土中位（５層）には十和田ａ火山灰が帯状に入る。

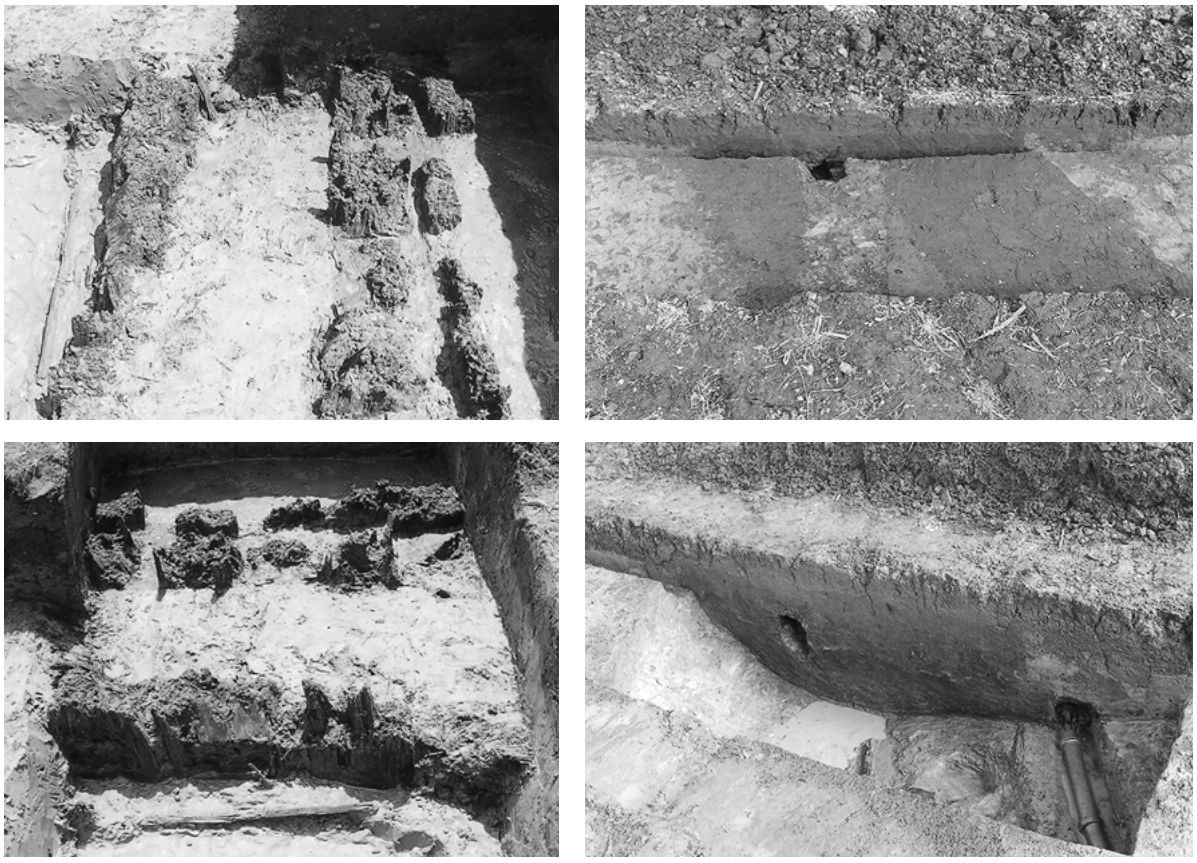
遺物（第34図）は底面直上（６層）より、数多くの木製品・木片と１片の平瓦（２）が出土した。１は一木作りの連歯下駄であり、歯部の側面が台形状を示す。

ＳＤ1395溝跡（第30図右、図版11）

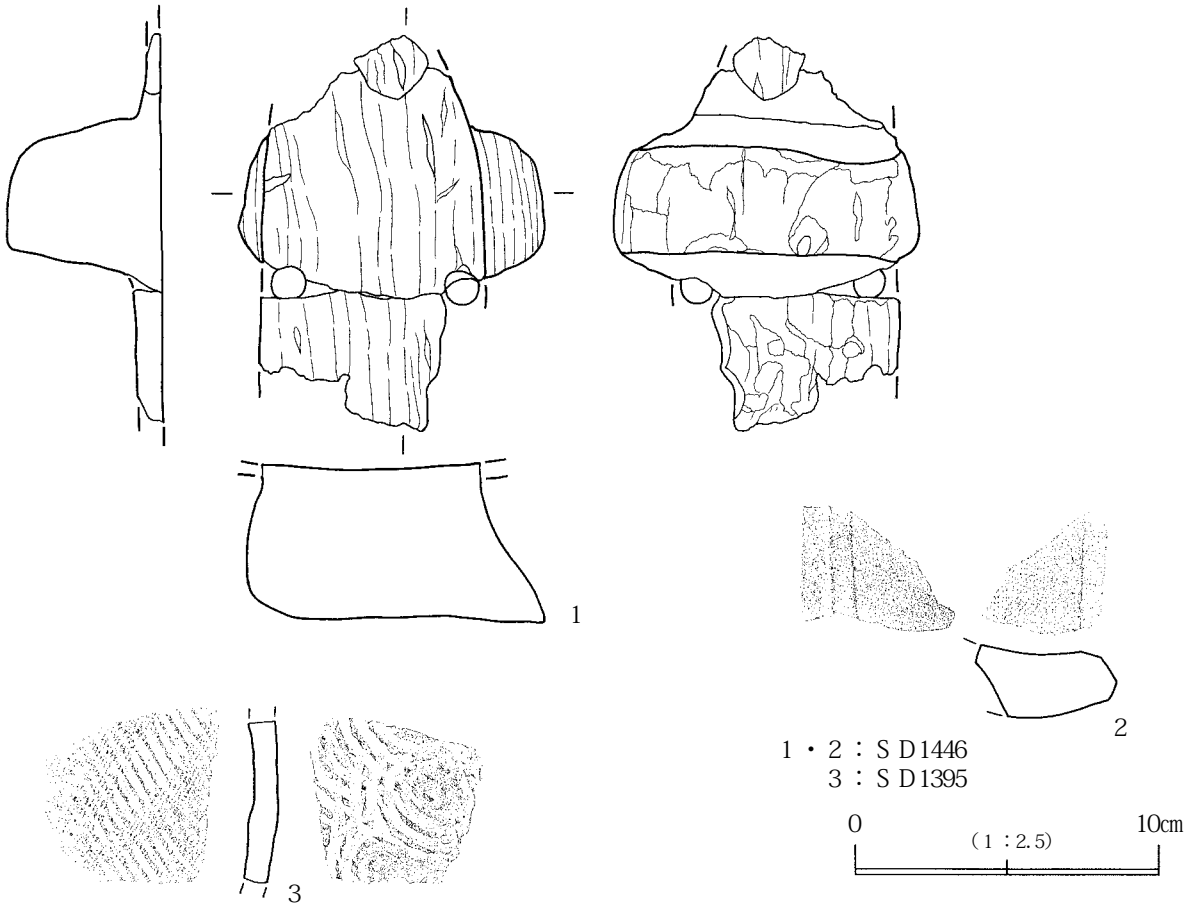


左上：ＳＡ1100外郭材木塀跡検出状況（西→）
左下：同上（北→）
　　写真手前が創建段階のＡ期材木

右上：ＳＤ1446溝跡検出状況（西→）
右下：同上（南西→）
　　現在の暗渠（土管、４層）が古代の溝と同一軸線方向であることに注目



第33図　ＳＡ1100材木塀跡・ＳＤ1446溝跡



番号	種別	器形	出土位置・層位	特　　徴	口径 cm	底径 cm	器高 cm	底径指数	高径指数	外傾度
1	木製品	下駄	SD1446RW2	一木作り、長さ（13.0）、幅9.9、高さ5.0						
2	瓦	平瓦	SD1446	凸面：ケズリ、凹面：布目						
3	須恵器	甕	SD1395	外：平行タタキ、内：青海波アテ具			(5.4)			

SK1399
1：暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粒子少量含む
2：にぶい黄橙色火山灰ブロック（10YR6/4）
3：黒褐色シルト質土（10YR3/2）地山粒子少量含む
4：にぶい黄褐色シルト質土（10YR5/3）地山粒子斑状にやや多く含む
5：暗褐色焼土（7.5YR3/4）SN1399E焼土面
6：にぶい黄褐色シルト質土（10YR4/3）地山粒子やや多く含む
7：暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粒子やや多く含む
8：暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粒子少量含む
9：暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粒子少量含む
10：黒褐色シルト質土（10YR2/2）地山粒子含まず
11：褐色シルト質土（10YR4/4）地山粒子斑状にやや多く含む
12：暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粒子少量含む
13：褐色シルト質土（10YR4/4）地山粒子やや多く含む
14：にぶい黄褐色シルト質土（10YR4/3）
15：褐色粘質土（10YR4/4）締まり弱、地山の二次堆積層
16：黒褐色シルト質土（10YR2/3）地山粒子少量含む
17：褐色粘質土（10YR4/6）締まり弱、地山の二次堆積層

SN1387・1388焼土遺構
焼土面色調：赤褐色（5YR4/8）

SD1395
F：黒色泥炭土（10YR1.7/1）河川・泥炭層、漆黒色を呈する
G：明青灰粘土（5B7/1）地山粘土の盛土層、純層に近い
H：黄橙色粘土（10YR7/8）地山粘土の盛土層、純層に近い
1：にぶい黄橙色シルト質土（10YR6/4）火山灰二次堆積層
2：黒褐色シルト質土（10YR3/1）
3：黒褐色シルト質土（10YR2/3）
4：黒褐色シルト質土（10YR2/2）
5：暗褐色シルト質土（10YR3/3）
6：にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
7：灰黄褐色粘質土（10YR4/2）

SD1397・SK1402周辺
A：黒褐色シルト質土（10YR3/1）
B：黒褐色シルト質土（10YR3/2）
C：黒褐色シルト質土（10YR2/3）
D：暗褐色シルト質土（10YR3/3）
E：暗褐色シルト質土（10YR3/4）
8：黒褐色シルト質土（10YR3/1）
9：にぶい黄褐色シルト質粘土（10YR4/3）
10：暗褐色シルト質土（10YR3/3）
11：黒褐色シルト質土（10YR3/2）
※A～E層は第Ⅲ層由来の盛土層か

第34図　SD1446・1395溝跡出土遺物

ＳＡ1100材木塀跡の南側約16mに位置する東西方向の溝跡である。遺構確認段階では、幅が５m程の溝あるいは堀と見ていたが、土層断面の観察により、河川あるいは湿地を粘質土で埋めた後に幅2.４m規模の溝を構築していることが判明した。それは次のように復元される。漆黒色を呈する泥炭質土（ｆ層）が河川・湿地由来の堆積層と考えられる。確認した層厚は１mに達する。ここに明青灰粘土（ｇ層）と黄橙色粘土（ｈ層）を最大で80ｃm厚に盛り上げ整地する。ｇ・ｈ層とも混入物の極端に少ない粘質土（地山粘土）の純層である。そしてこの整地面を掘り込み面として溝が構築される。ＳＤ1395は、深さが60㎝となり、堆積層は７層に分層される。４層は３層が堆積後に掘り込まれた小柱穴埋土である。最上層（１層）には、十和田ａ火山灰を含む帯状堆積層が観察される。

また溝内の北側には柱（栗材か、径20㎝×長さ約80㎝）が一本打ち込まれていたが、これが本溝に伴う柱か、あるいは全く別の施設物の柱となるのかは不明である。

遺物は、須恵器坏・甕（第34図３）、土師器坏が少量出土した。

３　中世の検出遺構と遺物

中世期に構築された施設は、層序・出土遺物から判断して、次の７遺構が該当する。空堀１条、竪穴状遺構２基、土坑３基、道路状遺構１条であり、いずれも古代の第２段整地層面に形成される。

ＳＤ877空堀跡（第21・35図、図版12）

Ｐトレンチ西端部で検出した空堀跡である。軸線をＮ－Ｓにとり、その上幅は1.8～2.15mである。確認された長さは、トレンチ幅分の6.8mであり、南と北それぞれ調査区外に延びる。一部掘り下げた箇所での深さは80ｃm程となり、断面形状は逆台形を示す。

堆積土内の出土遺物（第36図）は、須恵器系陶器壺・甕と土師器・須恵器破片、瓦がある。１はＳＫ1426出土破片と接合し、３はＳＫ1418ＢとＳＤ1325確認面（昨年度出土）を含む３遺構出土破片が接合したものである。

本遺構は、長森丘陵部西側を大きく囲むＳＤ877空堀跡の東辺北側に位置する。ＳＤ877は、第81次調査（平成元年度）時の検出を端緒として、次いで第117次調査（平成12年度）、第119次調査（平成13年度）の蓄積を経て、幅２m程の空堀が東西・南北とも80m程の歪な方形を呈して巡ることが判明した。今回の検出を受け、同空堀での不明瞭な箇所は、北東・北西隅部の位置を残すのみとなった。

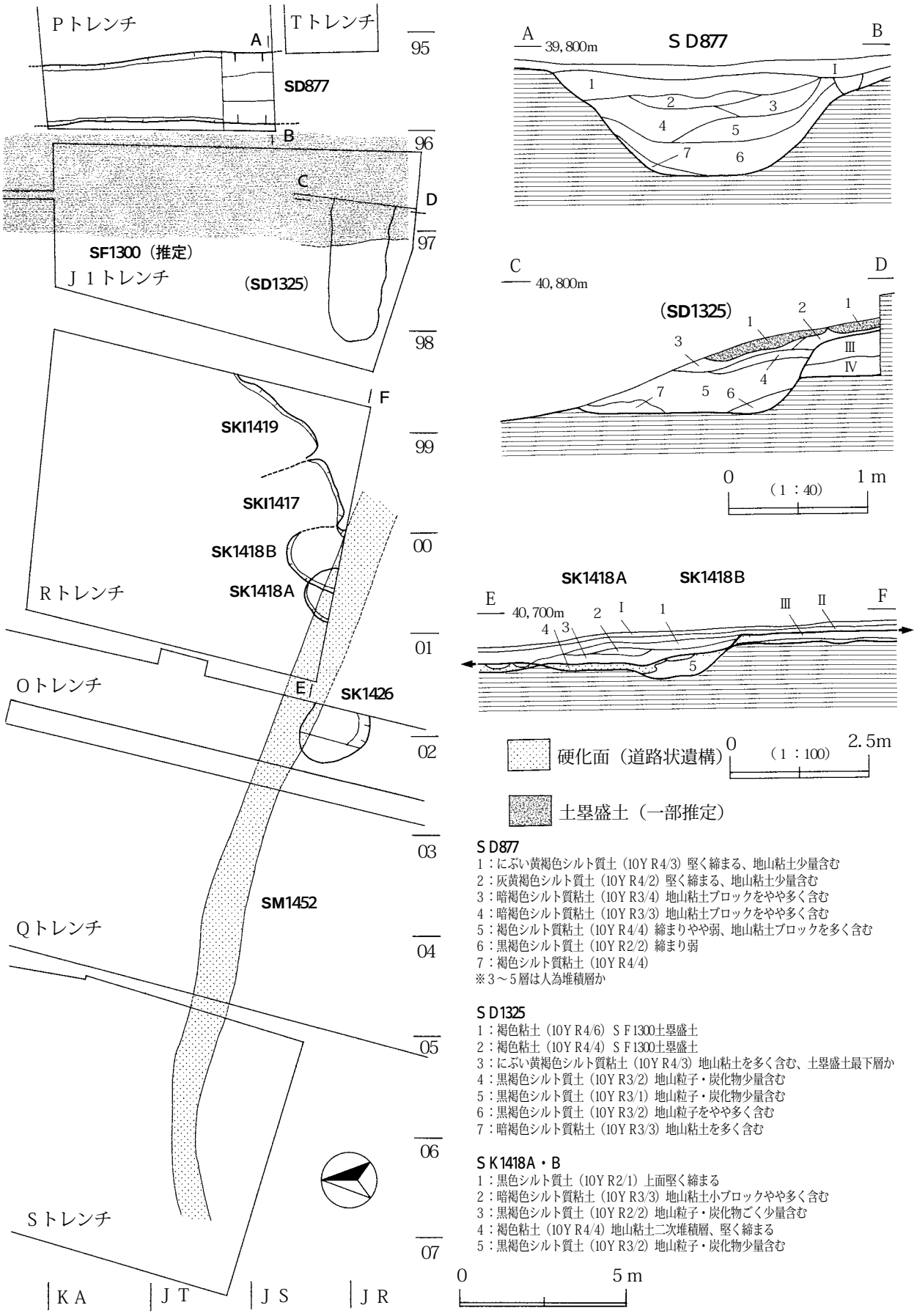
なおＳＤ877の南西側（Ｊ１トレンチ）に位置するＳＤ1325溝状遺構の最上層には、空堀西側に存在したであろうＳＦ1300土塁盛土（粘土層、１層）が観察された。粘土層の平面分布から、この箇所における土塁の基底幅は３mかこれ以上と推測される（第35図トーン添付箇所参照）。

ＳＫＩ1417・1419竪穴状遺構（第35・36図）

Ｒトレンチ南東部、第Ⅱ層面で確認した。精査の結果、北東から南西方向に延びる二つの竪穴壁立ち上がりを見いだしたものの、その他の様相は明らかにできなかった。

ＳＫＩ1417は、東側でＳＫＩ1419と、西側でＳＫ1418Ｂと重複するが、新旧関係は不明である。竪穴は、長さが２m程の南側壁と、南東隅部を検出した。壁高は約30㎝となる。遺物は推定竪穴内の床面直上より須恵器系陶器壺（５）と砥石、鉄滓が出土した。

ＳＫＩ1419は、ＳＫＩ1417南東隅部の北東側に隣接するが、重複の有無、新旧は不明である。本竪穴は南西隅部とここから北東に延びる3.2m程の壁立ち上がりを確認したに留まる。壁高は15～25㎝

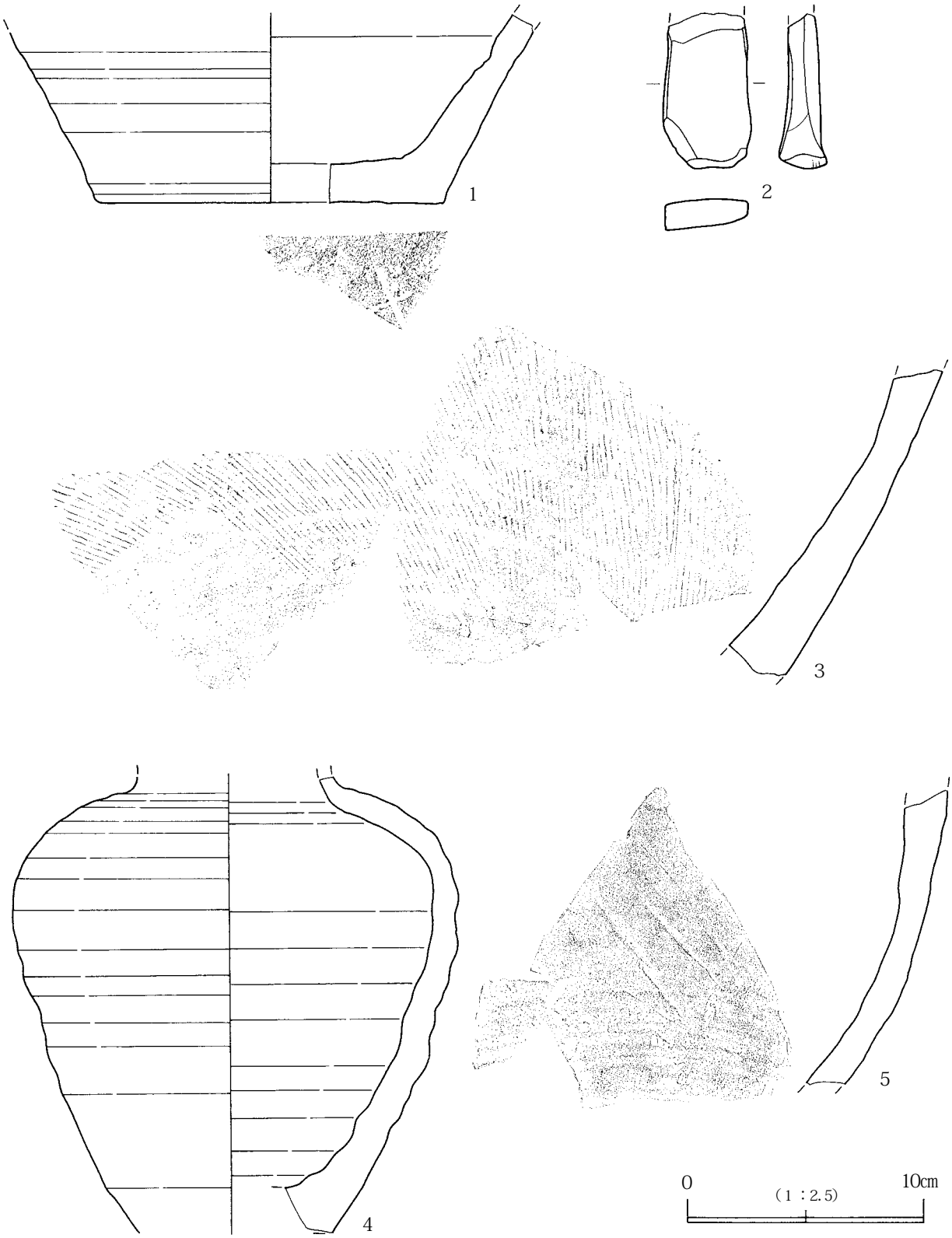


SD877
1：にぶい黄褐色シルト質土（10YR4/3）堅く締まる、地山粘土少量含む
2：灰黄褐色シルト質土（10YR4/2）堅く締まる、地山粘土少量含む
3：暗褐色シルト質粘土（10YR3/4）地山粘土ブロックをやや多く含む
4：暗褐色シルト質粘土（10YR3/3）地山粘土ブロックをやや多く含む
5：褐色シルト質粘土（10YR4/4）締まりやや弱、地山粘土ブロックを多く含む
6：黒褐色シルト質土（10YR2/2）締まり弱
7：褐色シルト質粘土（10YR4/4）
※3～5層は人為堆積層か

SD1325
1：褐色粘土（10YR4/6）SF1300土塁盛土
2：褐色粘土（10YR4/4）SF1300土塁盛土
3：にぶい黄褐色シルト質粘土（10YR4/3）地山粘土を多く含む、土塁盛土最下層か
4：黒褐色シルト質土（10YR3/2）地山粒子・炭化物少量含む
5：黒褐色シルト質土（10YR3/1）地山粒子・炭化物少量含む
6：黒褐色シルト質土（10YR3/2）地山粒子をやや多く含む
7：暗褐色シルト質粘土（10YR3/3）地山粘土を多く含む

SK1418A・B
1：黒色シルト質土（10YR2/1）上面堅く締まる
2：暗褐色シルト質粘土（10YR3/3）地山粘土小ブロックやや多く含む
3：黒褐色シルト質土（10YR2/2）地山粒子・炭化物ごく少量含む
4：褐色粘土（10YR4/4）地山粘土二次堆積層、堅く締まる
5：黒褐色シルト質土（10YR3/2）地山粒子・炭化物少量含む

第35図　中世の検出遺構配置図



番号	種別	器形	出土位置・層位	特　　徴	口径 cm	底径 cm	器高 cm	底径指数	高径指数	外傾度
1	陶器	壺	ＳＤ877＋ＳＫ1426	内外：ロクロ調整、底：砂底→×印刻文、器面あばた状に剥落		14.8	(8.1)			
2	砥石		ＳＫ1418Ｂ	長さ（6.6）×幅3.7×厚さ2.0、重量48.8g						
3	陶器	大甕	ＳＫ1418Ｂ＋ＳＤ877＋ＳＤ1325	外：ロクロ成形→櫛目状の平行タタキ、内：ロクロ→素文アテ具			(12.9)			
4	陶器	壺	ＳＫ1418Ｂ	内外：ロクロ成形、ロクロの凹凸が顕著			(19.4)			
5	陶器	甕	ＳＫＩ1417	内外：ロクロ成形			(12.4)			

第36図　中世の遺構内出土遺物

である。遺物は須恵器坏・甕、鉄滓など少量出土したが、本竪穴の堆積土質がＳＫＩ1417と酷似する点と両者の配置から当該期に含めた。

ＳＫ1418Ａ・Ｂ土坑（第35・36図）

Ｒトレンチ南端部、第Ⅱ層面下で確認したが、遺構南端は調査区外に延びる。両土坑は重複するものの、新旧関係は明確ではない。これは両者の上位にＳＭ1452道路状遺構が構築されたことに伴う堆積土の沈下等によると思われる。

ＳＫ1418Ａは東西1.6m、南北は0.8m以上の円あるいは楕円形を呈する。ＳＭ1452から土坑底面までは10㎝程の深さとなる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ1418Ｂは、1418Ａの東側に位置し、更にその東ではＳＫＩ1417と重複する位置関係にある。現状での規模は東西が約２m、南北は1.6mの円を基調とする形状と考えられる。底部直上より須恵器系陶器壺・甕（３・４）が出土した。

ＳＫ1426土坑（第35・36図）

Ｏトレンチ中央部、第Ⅱ層面で確認した。ＳＤ1410、ＳＫ1425を切り込んで構築されるが、遺構東側は調査区外に及ぶ。規模は、南北の長さが2.1m、東西1.8m程となり、ＳＫ1418Ｂと法量・形状が類似する。深さは約45㎝となる。

遺物は底面直上より須恵器系陶器壺（１）、堆積土中より須恵器甕、土師器坏、砥石（２）、鉄滓が出土した。

ＳＭ1452道路状遺構（第35図）

Ｒトレンチ南端部からＳトレンチ西側まで東西に延びる硬化面を検出した。Ｒトレンチ南西端部を精査した結果、中世の堆積層である第Ⅱ層下面に硬化面が位置することが明確となり、当該時期と判断した（第35図Ｅ－Ｆ間土層、→部）。ただ中世の遺構であるＳＫ1418Ａ・1418Ｂ・1426土坑の上位に硬化面が通ることから、これら遺構群よりは後出となる。その幅は1.1m前後であり、下部への掘り込みはない。長さは約21mに達する。

４　縄文時代の検出遺構

縄文時代と判断される遺構は、溝状遺構７基であり、いわゆる陥し穴と考えられる。遺構構築面は、地山漸移層（第Ⅳ層）となる。遺構内から遺物は出土しなかった。

ＳＫＴ1398溝状遺構（第30図右、図版11）

Ｋトレンチ北部（第６段整地面北端部）に位置する。規模は長さ3.1m、幅25㎝、深さ70㎝であり、軸線方向はＮ－45°－Ｗとなる。

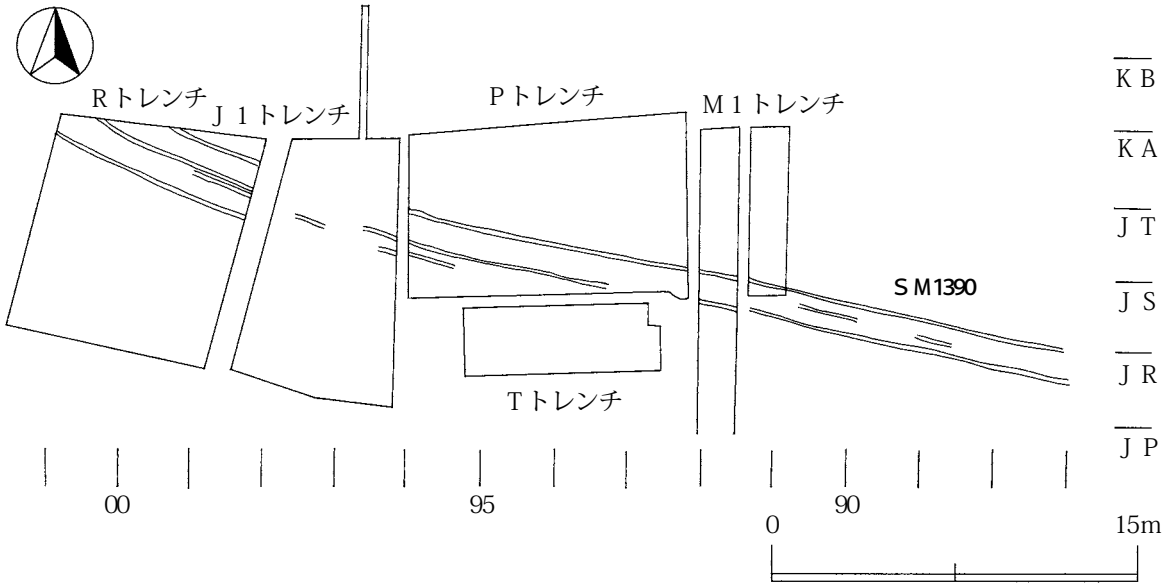
ＳＫＴ1450溝状遺構（第29図）

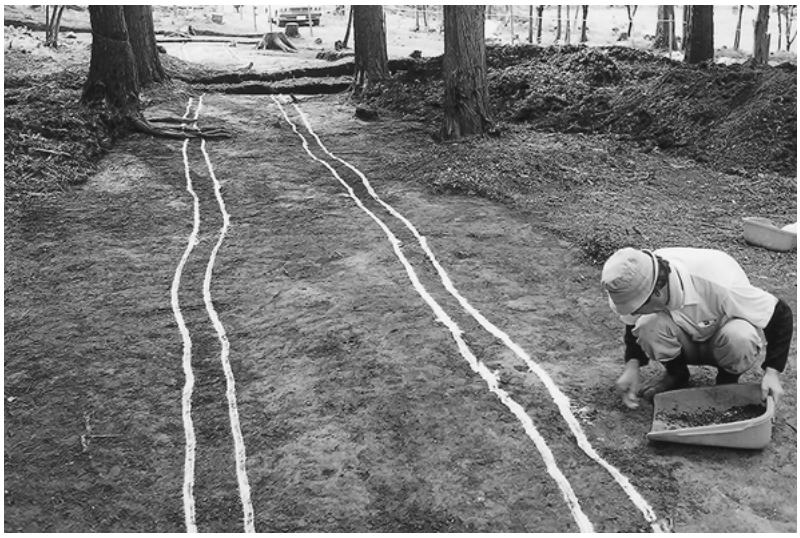
Ｋトレンチ南部（第４段整地面）に位置する。遺構の西側を確認したに留まり、現況での長さ1.5m、幅40㎝、軸線方向はＮ－36°－Ｅとなる。

ＳＫＴ1403溝状遺構（第28図）

Ｍ２トレンチ南部（第４段整地面）に位置する。規模は長さ3.4m、幅25㎝、深さ75㎝であり、軸線方向はＷ－Ｅとなる。

ＳＫＴ1411溝状遺構（第21図）





上：SM1390轍跡（北西→）
　　Pトレンチ第Ⅱ層
　　面での轍の確認状況
下：同上（東→）
　　東端の轍跡は表土
　　直下で確認される

第37図　近代の検出遺構配置図

Ｍ１トレンチ東側拡張区（第２段整地面）に位置する。遺構の西側を確認したに留まり、現況での長さ1.7m、幅40㎝、軸線方向はＮ－55°－Ｅとなる。

ＳＫＴ1421溝状遺構（第21図）

Ｊ１トレンチ北東部(第２段整地面)に位置する。規模は長さ2.85m、幅25㎝、深さ約80㎝であり、軸線方向はＮ－10°－Ｗとなる。

ＳＫＴ1422溝状遺構（第11図）

Ｒトレンチ南東部(第２段整地面)に位置する。プランを確認したに留まり、長さ3.05m、幅25㎝、軸線方向はＮ－３°－Ｗとなる。

ＳＫＴ1447溝状遺構（第８図）

Ｓトレンチ北東部（第２段整地面）に位置する。遺構の南側を確認したに留まり、現況での長さは2.7m、幅40㎝、深さは約１m、軸線方向はＮ－30°－Ｅとなる。

５　近代の遺構

近代と考えられる遺構は、表土層面あるいはその直下で確認した轍跡が挙げられる。

ＳＭ1390轍跡（第37図）

古代の第２段整地層面において、２本一組の溝状遺構を確認した。１本の溝幅は15㎝前後で、両者が約1.25mの等間隔を保ち、西北西－東南東方向に約43m延びる。溝は部分的に３～４条となる箇所もあり、少なくとも２系統の組があったことになる。溝は各トレンチで古代の遺構を切り込んで通過しており、溝間が非常に堅く締まっている。このことから当初は中世以降の道路跡かと考えた。しかし幅が狭いことと、溝の東端が長森丘陵部北側で大きく土取りされている箇所に向かうことから、次の仮説に行き着いた。

奥羽三大地主の一つに数えられる池田家は、明治43年に払田・真山の麓に分家する(註３)が、その邸宅造成時に多量の土（壁土）を長森から採取したとされる。現在残る土取跡がその時期の痕跡とすれば、２本の溝は土を運んだ馬車の轍跡ではないか、となる。

６　遺構外出土遺物（第38～41図）

遺構外出土の遺物は、古代・中世・縄文時代の各時期がある。

（１）古代

確認された器種は、須恵器坏（１～４）・台付坏・蓋（５・６）・壺（７）・甕（８・９）、土師器坏（10・11）・台付皿（12）・甕・鍋。土製品では、塼（13）・坩堝（14）・羽口（15）・皿（16）が、石製品では砥石（17）・紡錘車（18）・円盤状石製品（19）・碁石（黒：20）。及び瓦（21～25）がある。また銅滓や鉄滓も出土した。

１はＳＩ1401の北側、２はＭ２トレンチ第６段整地層Ⅲ層出土である。２の底面には「成」墨書が認められる。３～５はＰトレンチＳＮ1391・1392に隣接する北側出土である。７は底面に菊花状のケズリが見られる。11・12はＳトレンチ第Ⅲ層出土であり、12はＳＫ1437の北60㎝の地点で確認されている。13・17はＲトレンチの南西部第Ⅲ層出土である。この区域では明確な遺構の検出はなかったものの、北西側に位置するＳＫＩ1430で多く出土している塼などが見られることから、ＳＫＩ1430と関

連をもつ場とも想定できるかもしれない。

14はＳトレンチ東側出土の坩堝である。その他、数点の坩堝と判断される小破片がＳ・Ｑトレンチから出土している。16は須恵質・厚手の皿である。一見すると台付壺の高台部を再加工しているようである。18はＳトレンチ出土の石製紡錘車であり、半欠品である。20はＲトレンチＳＫＩ1416北側の第Ⅳ層面出土の碁石（黒）である。ただこの位置は、近世の轍跡と重複する近辺にあたり、溝状の轍を除去した後の面での確認ではあるものの、古代以降の混入の可能性も排除できない。

21は払田柵跡特有の渦巻文平瓦である。22・23は正格子目の平瓦、25・25は凸面に丁寧なケズリ・ナデの施される丸瓦である。平瓦が黄褐色系の色調で焼成がやや甘いのに対し、丸瓦は灰青色の還元色を示し焼成良好・緻密となる。

銅滓は、Ｓトレンチ東側・第Ⅲ層出土であり、長さ4.7㎝×幅1.5㎝×厚さ0.8㎝の棒状を示す。重量は12.9ｇである（第41図下写真）。

鉄滓は各トレンチから出土しているが、Ｓ・Ｑトレンチを除くと他トレンチでは重量500ｇ未満となる。Ｊ１・Ｋ・Ｒは40ｇ台、Ｎが約110ｇ、Ｏ・Ｐ・Ｕが250ｇ前後、Ｍが約450ｇである。

（２）中世

当該期の遺物は、須恵器系の壺（26）・擂鉢（27・28）と瓷器系の灰釉端反皿（29）がある。27はＫトレンチ第６段整地層第Ⅱ層出土、28はＲトレンチ出土であるが、昨年度のＪ１トレンチ出土破片と接合した個体である。29は、Ｋトレンチ北部、ＳＤ1395上部の表土層直下出土となる。

その他、細片のため図示しなかったが、Ｒトレンチ第Ⅰ層より白磁碗、Ｍ２・Ｐトレンチ第Ⅰ層から青磁碗が各１点出土した。

（３）縄文時代

縄文時代の遺物は、前期後葉段階の土器片（30）が数点と有孔石製品（31）が１点ある。いずれもＱトレンチ内出土である。その他、表面採集資料では石鏃や磨製石斧片も得られている。

第３節　小結

第121次調査において検出した遺構は、縄文時代・古代・中世・近代の各時期に及ぶ。

中世の遺構は、過年度の成果を踏まえ、主に13世紀代（珠洲Ⅱ期相当）の構築と推測される。ただ本年度１点出土した瓷器系（瀬戸美濃）陶器は16世紀代と見られる。

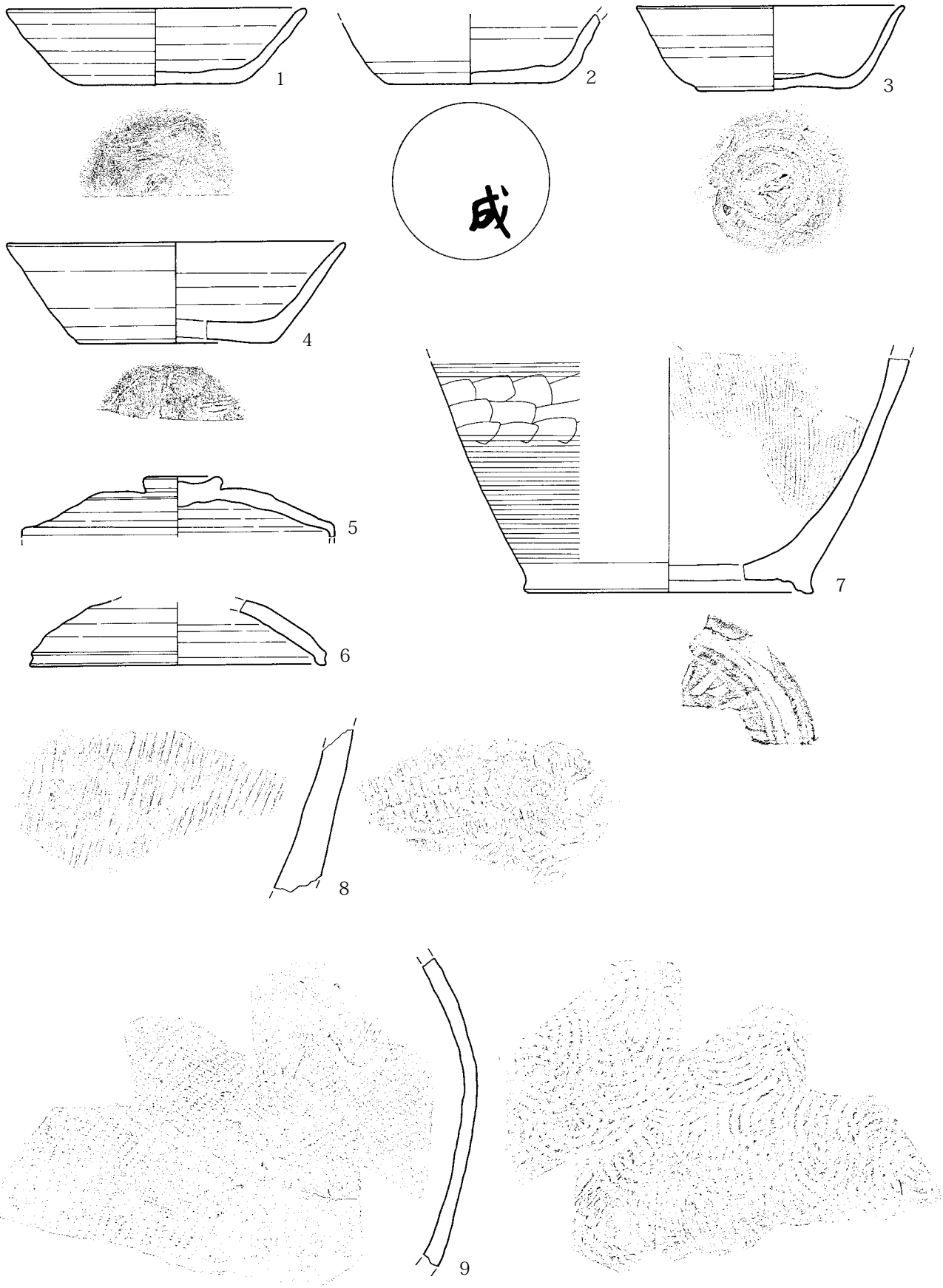
縄文時代では、遺構内出土遺物がなく、陥し穴の構築時期は不明である。遺構外の遺物には前期後葉段階の土器片が出土している。

近代では、前節の仮説が正しいとすれば、２本一組の溝は、明治末期の馬車轍跡となろう。

以下、本節では古代の検出遺構と遺物について昨年度までの蓄積を交えてまとめる。

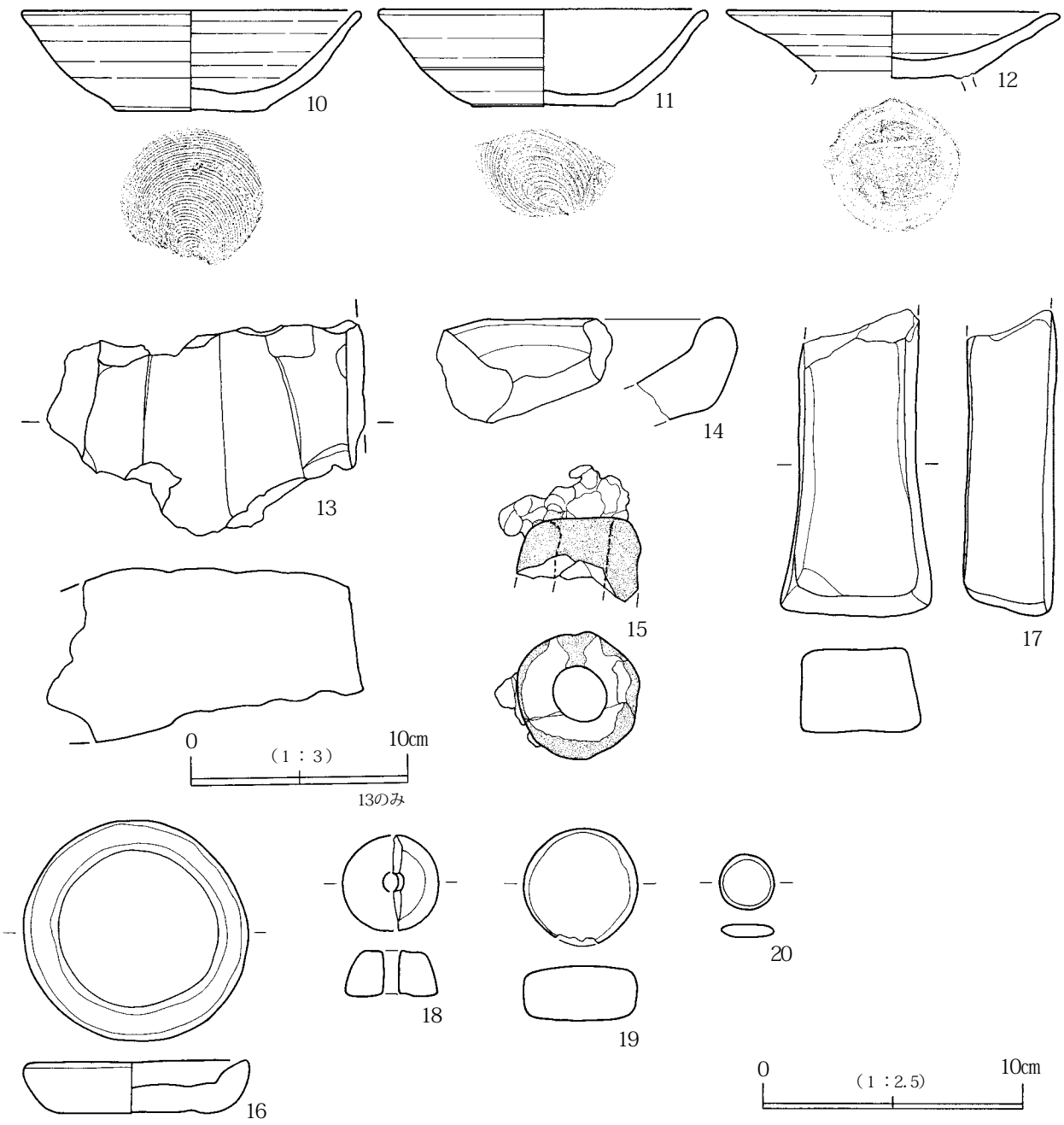
１　第１段整地面の遺構と性格

標高42～43.5ｍラインにあたる第１段整地面には、本年度まで計７本のトレンチが入れられたことになる。西側よりＢ・Ｈ１・Ｕ・Ｉ１・Ｑ・Ｏ・Ｊ１トレンチである。Ｂが第117次、Ｈ１・Ｉ１・Ｊ１が第119次となる。本面の状況は３カ年の調査により、次のように整理される。



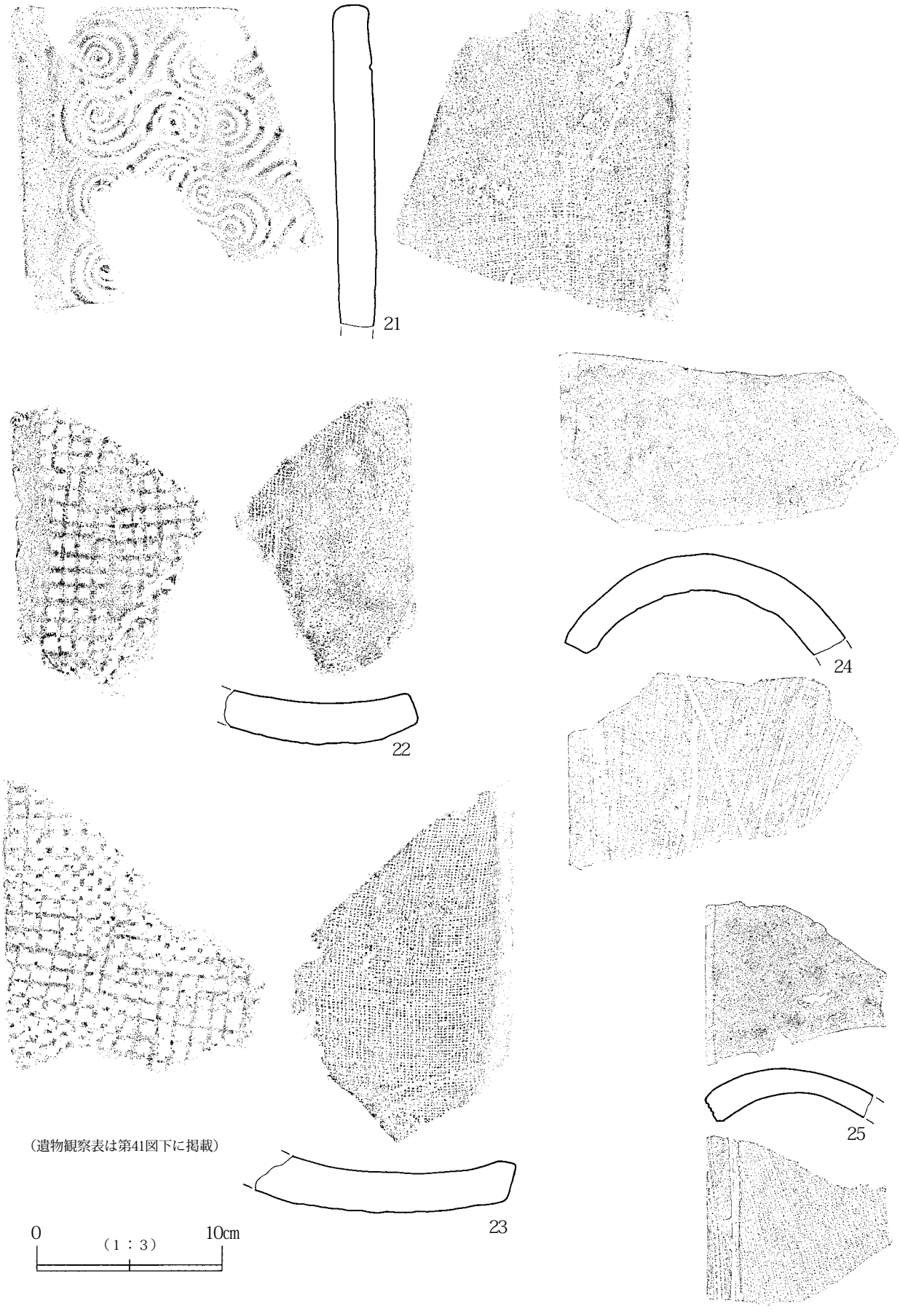
（遺物観察表は第41図下に掲載）

第38図　遺構外出土遺物（１）

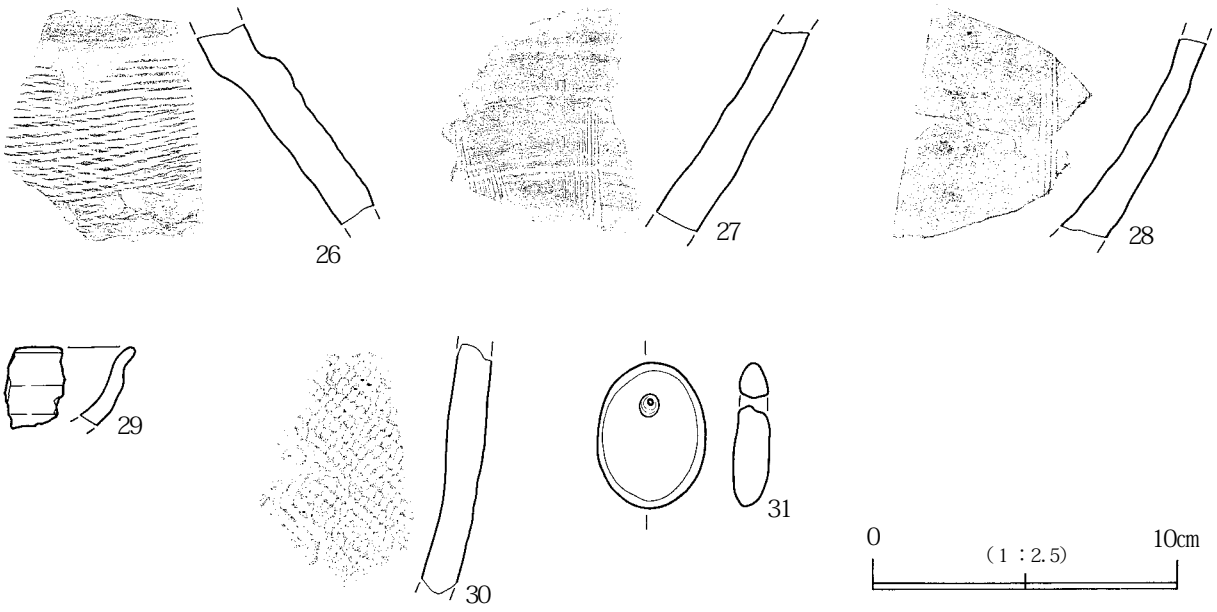


番号	種別	器形	出土位置・層位	特　　徴	口径 cm	底径 cm	器高 cm	底径指数	高径指数	外傾度
10	土師器	坏	M１トレンチⅢ層	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	13.0	5.8	3.9	0.45	30.0	36
11	土師器	坏	Sトレンチ	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	12.7	5.5	3.7	0.43	29.1	36
12	土師器	台付皿	Sトレンチ	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り→付高台、内面煤付着	12.8	(6.2)	(2.6)			
13	土製品	塼	RトレンチⅢ層	長さ（10.0）×幅（14.6）×厚さ8.1						
14	坩堝		Sトレンチ	厚さ1.9㎝、緑青付着						
15	羽口		Oトレンチ	推定内径２㎝						
16	土製品	皿	Rトレンチ	須恵質	8.4	6.0	2.0			
17	砥石		Rトレンチ	長さ（11.8）×幅5.8×厚さ3.2、重量309.6ｇ						
18	石製品	紡錘車	Sトレンチ	推定径3.7×厚さ1.8						
19	石製品	円盤状	Oトレンチ	径4.4×厚さ2.1、重量35ｇ						
20	石製品	碁石	Rトレンチ	黒石、径2.1、厚さ0.5、重量3.2ｇ						

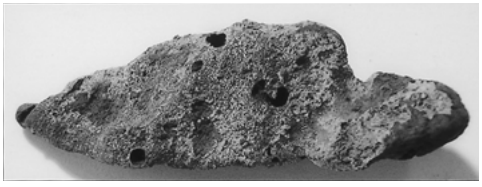
第39図　遺構外出土遺物（２）

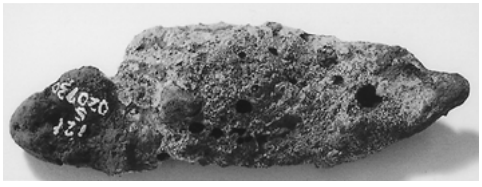


第40図　遺構外出土遺物（３）



番号	種別	器形	出土位置・層位	特　　徴	口径 cm	底径 cm	器高 cm	底径指数	高径指数	外傾度
38－1	須恵器	坏	M1トレンチⅢ層	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り	13.3	7.0	3.4	0.53	25.6	35
2	須恵器	坏	M2トレンチⅢ層	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り→「成」墨書、火だすき痕あり		7.4	(3.1)			
3	須恵器	坏	Pトレンチ Ⅲ層	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り	11.8	6.8	3.7	0.58	31.4	25
4	須恵器	坏	Pトレンチ Ⅲ層	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り	15.0	8.7	4.5	0.58	30.0	32
5	須恵器	蓋	Pトレンチ Ⅲ層	内外：ロクロ調整、天井部ケズリ			(2.7)			
6	須恵器	蓋	Ｉ２トレンチ	内外：ロクロ調整、天井部ケズリ	13.0		(2.8)			
7	須恵器	壺	Kトレンチ Ⅲ層	内外：ロクロ調整、底部菊花状ケズリ→付高台		12.6	(10.5)			
8	須恵器	甕	Rトレンチ Ⅲ層	外：平行タタキ、内：原体不明アテ具			(7.1)			
9	須恵器	甕	Rトレンチ Ⅲ層	外：平行タタキ、内：青海波アテ具			(13.7)			
40－21	瓦	平瓦	表面採集	凸面：渦巻文タタキ、凹面：布目						
22	瓦	平瓦	Oトレンチ	凸面：正格子タタキ、凹面：布目						
23	瓦	平瓦	M1トレンチⅢ層	凸面：正格子タタキ、凹面：布目						
24	瓦	丸瓦	Pトレンチ Ⅲ層	凸面：ケズリ、凹面：布目						
25	瓦	丸瓦	M2トレンチⅢ層	凸面：ケズリ、凹面：布目						
41－26	陶器	甕	Ｊ１トレンチ	外：平行タタキ、内：素文アテ具？			(6.5)			
27	陶器	擂鉢	Kトレンチ Ⅱ層	ロクロ成形、卸目８本一組			(6.6)			
28	陶器	擂鉢	Ｊ１・Rトレンチ	ロクロ成形、卸目２本一組			(6.4)			
29	陶器	灰釉端反皿	Kトレンチ１層				(2.6)			
30	縄文土器		Qトレンチ南	ＬＲ縄文→半截竹管による鋸歯状沈線						
31	石製品	垂飾品	Qトレンチ南	上部に穿孔、長さ4.8×幅3.6×厚さ1.1、重量22.7ｇ						





銅滓（Ｓトレンチ東側・第Ⅲ層出土、
長さ4.7㎝×幅1.5㎝×厚さ0.8㎝、
重量は12.9ｇ）

第41図　遺構外出土遺物（４）

①土取り穴の計画的構築

標高43.5mライン上には竪穴状の落ち込みが点在するが、これは精査の結果、土取り穴の複合体であった可能性が高くなった。Ｈ１トレンチのＳＫＩ1321、Ｕトレンチのｓ Ｋ1439Ａ～Ｄ、Ｉ１トレンチのＳＫＩ1330の３箇所が該当し、３者は約12.5mの間隔を保っている。このような構造物を等高線に沿うように並列させた結果、現在見られる段状の整地面を生じさせたことになるので、本来的には意図的な整地とは呼べないのかもしれない。

②鍛冶炉・炭窯と竪穴住居の構築

土取り穴の隣接地・斜面下位側には鍛冶炉・炭窯が構築される。Ｈ１トレンチでは土取り穴の北側にＳＳ1320鍛冶炉が作られる。Ｉ１トレンチでは、ＳＫＩ1330に隣接してＳＷ1340炭窯とＳＳ1353鍛冶炉が構築される。

また土取り穴構築ラインよりやや下位側、標高42m地点には竪穴住居が作られる。Ｑ・Ｏトレンチ内のＳＩ1431である。床面直上より複数の鉄滓が出土しており、鍛冶に関連をもつ住居と推測することができる。

③本面遺構の構築時期

第１段整地面の遺構の構築時期は、遺構内の火山灰のあり方や出土遺物から判断して、９世紀代に納まると考える。ＳＫＩ1321は堆積土中位に、ＳＩ1431はその上位にそれぞれ十和田ａ火山灰が帯状に堆積する。またＳＩ1431出土遺物には、非ロクロで丸底を呈する内黒土師器坏（第６図12）や、須恵器にも底径の比較的大きな回転ヘラ切り坏（第５図１：底径指数0.64など）が含まれることから、本住居は９世紀中葉段階まで遡る。一方、第２段整地層以下の構築時期は、主として９世紀第３四半期から10世紀前葉あるいは、それ以降と推測される。

以上の点から、長森丘陵西側の北向き緩斜面部では、最初にＳＩ1431竪穴住居が構築される。ここを拠点として本ライン上での土取り作業が開始され、次いで鍛冶炉が機能する段階を迎えると推定できる。土取りされた土の搬出先・用途は今後の追跡課題である。

２　第２段整地面の遺構と性格

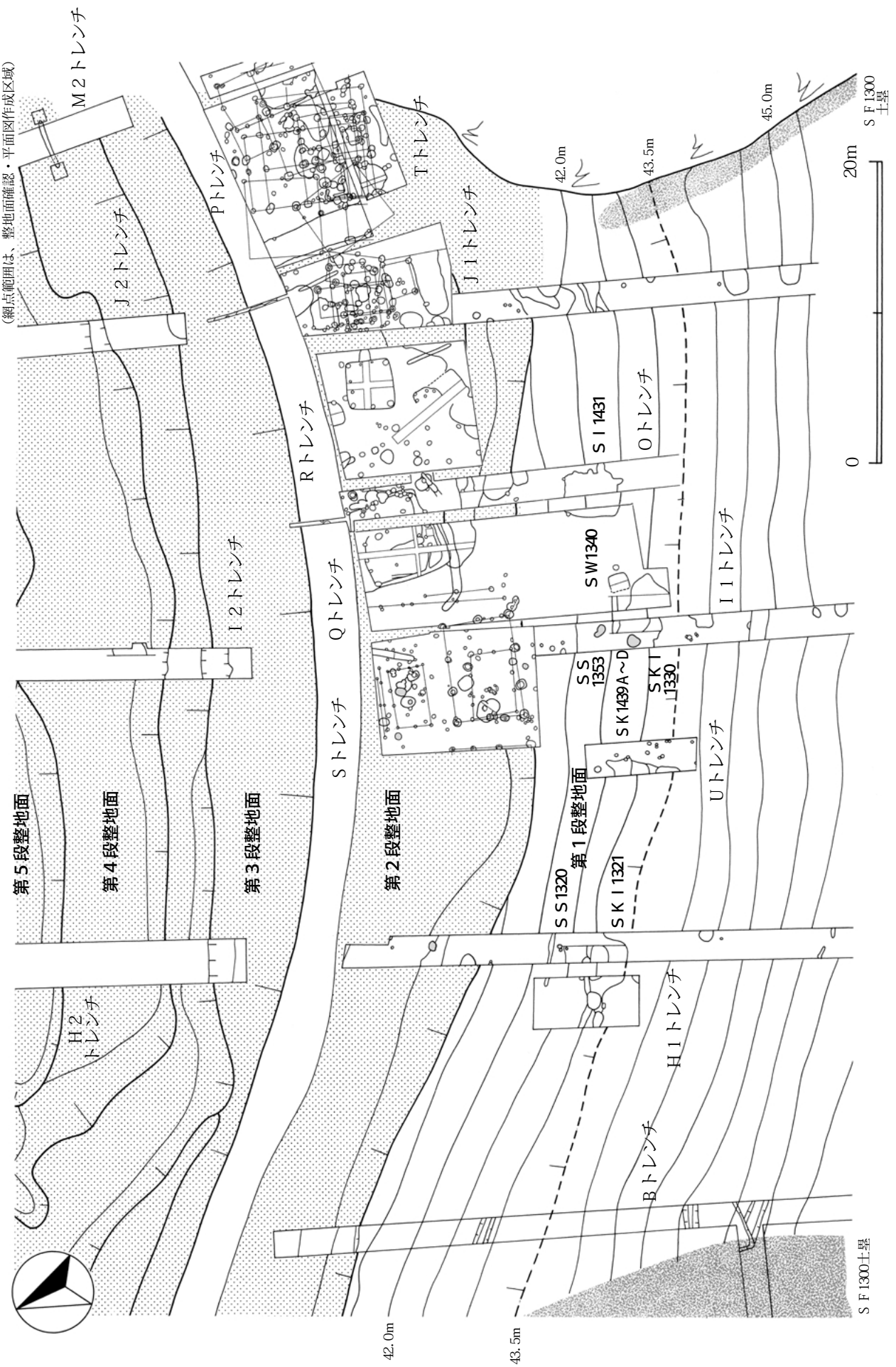
（１）鍛冶工房跡

調査区西端となるＳトレンチには、鍛冶炉と掘立柱建物跡で構成される鍛冶工房が配置される。３箇所の鍛冶工房跡を今回報告したが、Ｓトレンチ及びその周囲にはこの他に複数の鍛冶工房跡が存在する。ただ遺構配置から見てＱトレンチ以東には作られない。また本面より下位の整地面にも構築されないようである。

これら工房跡・建物は時期差はあるものの、重複関係をもつことから、構築場所について一定の強い規制があったことが推測される。

第１鍛冶工房跡には、足入れ穴（土坑）が伴い、金床石も揃う。足入れ穴の配置を考慮すれば、本工房は少なくとも西側には側壁板の立たない建物であったと見なければならない。立方体様の金床石は、全６面に使用痕跡が顕著に残り、それが長期に渡ることを物語る。石は長森・基盤層の石ではなく、河川上流域より運び込まれた安山岩と判断される。

本来床面上に置かれていたはずの金床石は、最終的に足入れ穴に遺棄される。石の下からは、半欠



第42図　第１・２段整地面と検出遺構配置

状態の須恵器坏（第10図２）が出土した。これは９世紀第３四半期段階と考えられ、鍛冶工房の構築時期を探る数少ない資料となる。

（２）ＳＫＩ1430Ａ～Ｄ竪穴状遺構

第２段整地面中央部、Ｏ・Ｑトレンチで確認したＳＫＩ1430Ａ～Ｄは、銅（製品）生産に係わりをもつ工房跡と推測する。断定すべき材料には欠けるが、推測の状況証拠として次の点を掲げる。

①鉄滓・鍛造剥片の少なさ

本竪穴の西側に隣接するＳトレンチ内の鍛冶工房域では、鉄滓・鍛造剥片が出土している。例えば第２鍛冶工房跡・ＳＳ1394鍛冶炉周辺では一部取り上げただけで約４kgの鉄滓が得られている。一方、その東側約４ｍに位置するＳＫＩ1430Ａ～Ｄは堆積土を土層観察ベルトを除いて全量掘りあげた結果、約1.4kgの鉄滓が出土した。そのうちの約９割が竪穴埋土上位にあり、床面直上出土はわずか140ｇ（４点）にすぎない。また部分抽出した焼土・炭化物を含む土壌の中からは鍛造剥片は発見されなかった。

②坩堝・銅滓の出土

本竪穴出土ではないが、隣接するＳ・Ｉトレンチ内より坩堝片10数点（第119次分を含む）、銅滓１点が確認された。坩堝には緑青の付着が見られることから、銅鋳造に係わる容器となる。第119次出土の坩堝は、Ｓトレンチの南側・ＳＫＩ1330（第１段整地面Ｉ１トレンチ）や北側となる第４段整地面・Ｉ２トレンチにある。ＳＫＩ1330出土例は１層内であり、遺構が埋没する最終段階で流入されたものと考えられる。

また本竪穴内の出土遺物には、羽口片や炉壁の可能性のある小片がごく少量ながら出土している。

③塼の出土とその位置

ＳＫＩ1430Ｄ段階の床面直上には、少なくとも42個体の塼が分布していた。いずれも二次的な火熱を受けている。その集中する位置（炭化物の広がりＨ周辺）は、床面の中央部にあたることと、東側壁寄りのカマド火床面と推測される焼土面（Ｅ～Ｇ）周辺には塼の分布は認められない。以上の点から塼は、カマドを構成する部材とは考えられない。

それでは塼を銅生産に係わる溶解炉の炉体とすることができるのか。炉とした場合、塼以外の炉残片（炉壁）が少なすぎる。逆に溶解炉ではないとすればどのような施設であったのかが、課題として残る。(註４)

本竪穴の構築時期は、底部に回転糸切り痕を留める土師器坏が主体となり、須恵器坏も回転ヘラ切りの個体は少ない。明らかに鍛冶工房跡が構築される時期より新しく、９世紀後葉・末から10世紀に入る段階かもしれない。

（３）東部の遺構群と鍛冶・鋳造工房の関係

Ｊ１トレンチ以東の東部遺構群には、直接的に鍛冶・鋳造の生産施設はない。それはＪ１・Ｐトレンチ内複数の焼土面周辺から鍛造剥片が認められなかったことを根拠とする。ここでは竪穴住居と掘立柱建物が集中的に重複するが、建物が後出となる。遺物を見ると、ＳＩ1401竪穴住居跡の土師器坏（第25図１）は古手の様相を示す。１は小振りで身の深い椀状を呈する。底面には回転ヘラ切り痕を留め、体部下半にはケズリが加えられる。この種の土器は、秋田城跡における赤褐色土器坏Ｂタイプとされるもので、９世紀第１四半期に編年される。(註５)遺物は竪穴堆積土中出土であり、構築時期を示す

指標とはならないが、床面直上出土の須恵器坏（第25図２）は、前述の第１段整地面・ＳＩ1431出土須恵器坏と同時期あるいはやや後段階と見る。

以上の状況から、本区域では最初にＳＩ1401竪穴住居が９世紀第３四半期代に構築される。ここを拠点として当初は西側区域に鍛冶工房を作り、生産活動を開始する。次いで９世紀末頃に中央区域に鋳造の工房を作る。この段階で鍛冶工房と鋳造工房が同時に操業していた可能性がある。鍛冶については、第１段整地面における住居構築後の一連の動きとも結びつくのかもしれない。東部区域の住居は次第に建物に置き換わる。その建物は火の使用を伴う場合もあるが、鍛冶工房とはならない。建物の規模・柱掘形にはばらつきがあり、一概に規定することはできないが、桁行２間以上の建物の一部は、工人集団を管理する何らかの施設であったと想定しておく。

今まで述べてきたように、第２段整地面には、それぞれ関連はもつものの、性質の異なる３種の施設が並列する(註６)。排他的とも思える配置及び重複には、その場でなければならない規制が働いていた可能性が強い。

３　沖積地面の遺構

Ｋトレンチ北部では、外郭のＳＡ1100材木塀跡と、その北と南に位置するＳＤ1446溝跡、ＳＤ1395溝跡の３遺構を検出した。当該地区の外郭材木塀跡は、1982年の第51次調査において、ボーリング探査及び小トレンチ発掘による所在・位置確認が実施されており(註７)、今回はその追認をした形となる。材木塀はＢ期段階の材が綺麗に抜き取られている。過去の調査において、抜き取られたＢ期材は外郭線（Ｃ期）の南側約4.5～7.5mに位置する木道として使用されるが、本次調査ではその痕跡は確認できなかった(註８)。

また材木塀跡の北約６ｍに位置するＳＤ1446溝跡は、外郭北門及びその東に延びる材木塀列の北側で確認されたＳＤ1145溝跡と同一遺構と考えられる（1995年の第103次調査）。ＳＤ1145は、材木塀の北約５～10mに位置し、上面幅3.5～4.3m、深さ0.6～1.0mと報告され、埋土中位には十和田ａ火山灰の堆積層がある。このことから今回確認した溝跡は、過去にＳＤ1145と登録していた溝跡の西側延伸部と推測される。

註

１　“足入れ穴”とは鍛冶工人が鍛錬作業時の効率化を図るために足を入れる土坑を指す。県内での検出事例は琴丘町小林遺跡にある。2000年に発掘調査され、古代の竪穴住居跡兼鍛冶工房跡から鍛冶炉・金床石と共に検出。時期は10世紀代か。秋田県埋蔵文化財センター『小林遺跡発掘調査資料』2001（平成13年）
　また隣県では岩手県宮古市島田Ⅱ遺跡にもある。
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『宮古市島田Ⅱ遺跡現地説明会資料』2002（平成14年）

２　秋田県教育委員会「年輪年代測定」『払田柵跡Ⅱ－区画施設－』1999（平成11年）

３　鹿股壽美江「池田家」『農村の変容と農民像』1972（昭和47年）古今書院

４　なお銅製品の出土例は、第85次調査（外郭西門域）において刀柄頭が、政庁域から原形を復元し得ないものの各１点が報告される。前者の出土地点はＳＸ909焼土遺構内であり、ここは外郭西門Ⅳ期建物を構築する直前に行われたＳＸ923盛土整地地業の上に位置する。焼土はⅣ期門柱掘形により切られることから、遺

物が遺された時期は、10世紀初頭から前葉の限られた時間内に納まる。また後者は形態が不整形で全体に小気孔が見られることから銅滓の可能性がある。

秋田県教育委員会「第85次調査」『払田柵跡－第84～87次調査概要－』1991（平成３年）

秋田県教育委員会「遺物」『払田柵跡Ⅰ－政庁跡－』1985（昭和60年）

5　秋田市「秋田城跡の発掘調査」『秋田市史　第７巻　古代史料編』2001（平成13年）

6　鍛冶工房跡（建物）と鋳造工房跡（竪穴）の間に位置する南北の柱列ＳＡ1435・1436は、両者を区画する板塀などの施設であった可能性が高い。

7　秋田県教育委員会「第51次調査」『払田柵跡－第46～52次調査概要－』1983（昭和58年）

8　外郭北門から西方向に延びるＳＸ1202木道は、材を３～４列並べ、幅約1.5mの路面としている。外郭北門から東方向に延びるＳＸ1180木道は、材を３列並べ、幅１m程の路面とする。両木道とも部分的ではあるが、東西方向の主たる材木列に直交させる別の短い材を並べている。これは木道の沈下防止のためと考えられる。

秋田県教育委員会「外郭線」『払田柵跡Ⅱ－区画施設－』1999（平成11年）

図版１

調査前の状況（東→）

調査前の状況（西→）

調査前の状況（北→）
沖積地面から第６段
敷地面を臨む

遺構検出状況（１）
第１・２段整地面
西側、空中写真

遺構検出状況（２）
第１・２段整地面
東側、空中写真

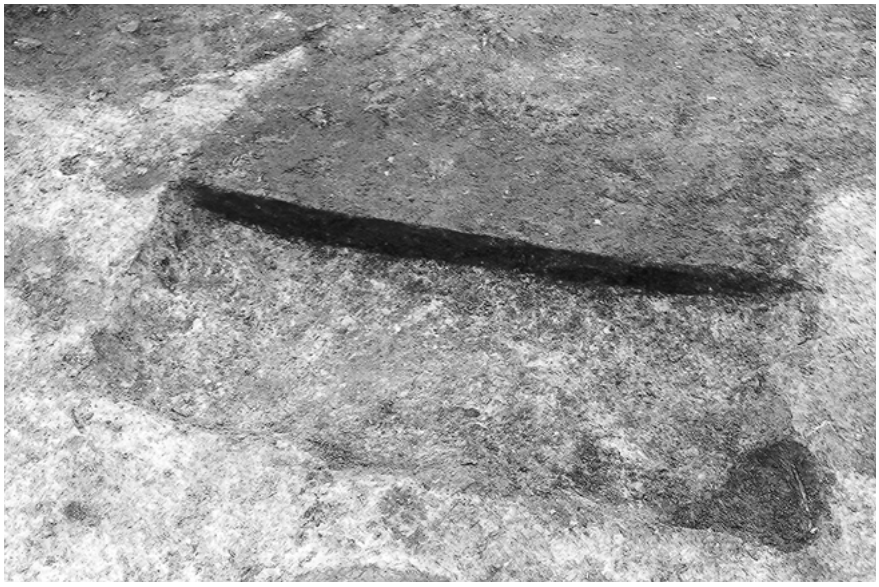
第２段整地面遺構確認状況（東→）
現在の道路が古代の整地面を利用して作られている

図版３

ＳＩ1431竪穴住居跡
確認状況（北東→）
　中央部の遺物は、
　竪穴が廃棄された
　後に入れられた

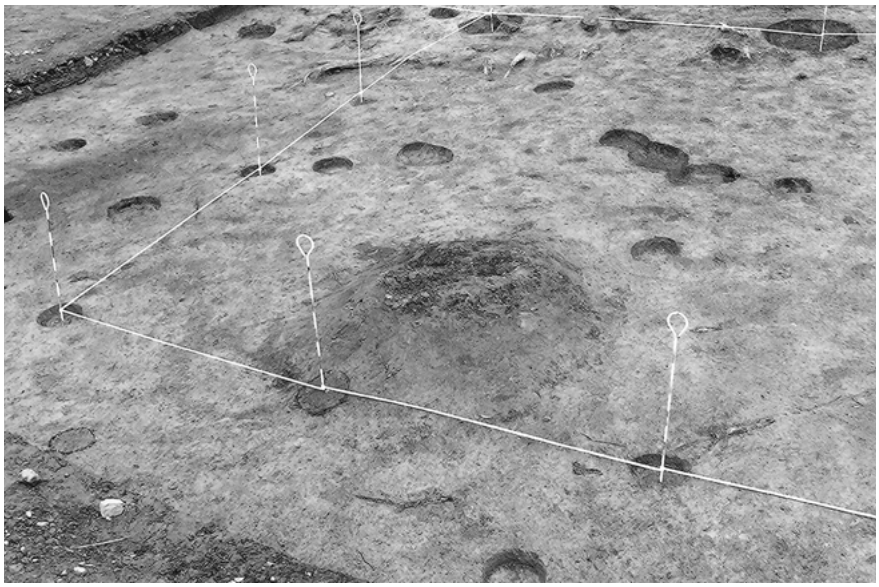
同上　略完掘（北→）

同上　カマドＢ検出の
状況（南西→）
　カマド袖石と天井石
　が現位置を保っていた



ＳＷ1340炭窯跡
（東→）

第２段整地面・西部の
遺構群全景（北→）
第１～３鍛冶工房跡
が整然と配置



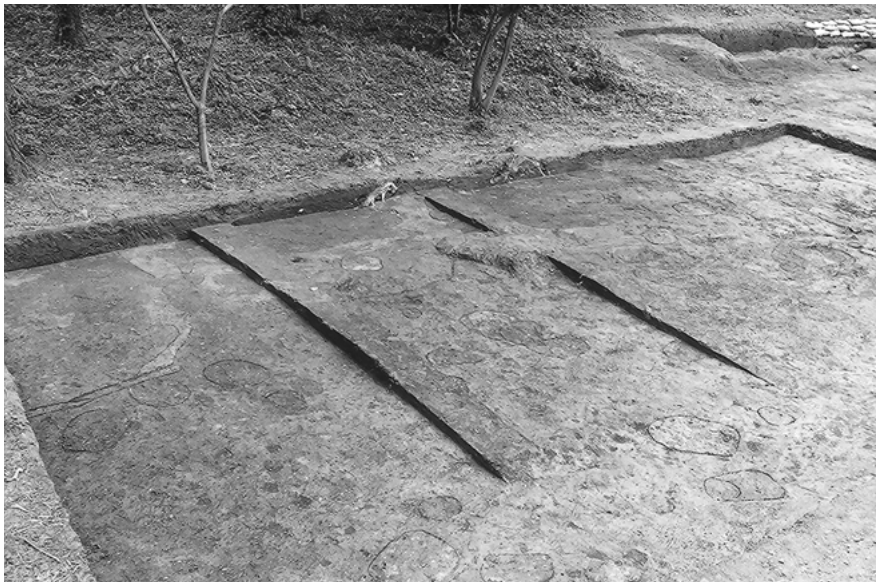
同上　第３鍛冶工房跡
（北西→）
ＳＢ1441建物跡と
ＳＳ1394鍛冶炉

図版５

ＳＫＩ1430Ａ～Ｄ
竪穴状遺構確認
状況（北東→）

同上　完掘状況
（北東→）

同上　塹出土状況（北→）
炭化物の広がり（Ｈ）
周辺の状況



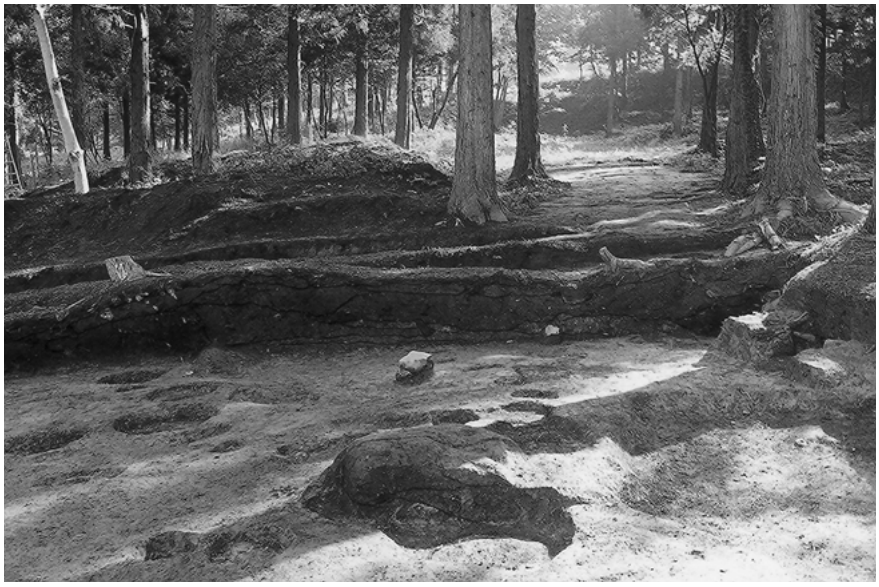
第２段整地面・東部の遺構確認状況（北東→）
竪穴・土坑・建物柱掘形等のプランが見えだした頃に撮影

同上（南→）
建物柱掘形の柱痕跡を確認するために段掘り下げを実施

同上（北→）
数多くの建物柱掘形が検出されたが撮影段階ではその組み合わせを明らかにできなかった

図版７

ＳＩ1401竪穴住居跡
確認状況（北→）



同上　土層堆積状況
（西→）

同上　鉄鎌・鉄滓
出土状況（北東→）
床面上より出土
第25図10に掲載

ＳＩ1423竪穴住居跡
略完掘状況（北→）

同上（北→）
南側壁、焼土面Ｄを臨む

ＳＫ1444土坑確認
状況（北→）
中央にはＳＢ1423
Ｐ１建物柱掘形に
より切られる

図版９

Ｍ２トレンチにおける
整地面の状況（北西→）
　左手前が第６段整地
　面にあたる

同上北端部壁面の
状況（北西→）

Ｋトレンチ
ＳＫ1399土抗、
ＳＮ1387・1388
焼土遺構検出状況
（南東→）

ＳＫ1399土抗完掘
状況（北→）

ＳＫ1407～1409土抗
確認状況（東→）

ＳＤ1404溝跡
完掘状況（西→）

図版11

Ｋトレンチ
第６段整地面北端部の
状況（南東→）
右奥の溝がＳＤ1397
左手前がＳＫＴ1398

ＳＤ1395溝跡土層（西→）
写真左の白っぽく見
える部分が粘土によ
る盛土整地層、盛土
の後に溝を掘り込む

同上　溝の南側壁際に
柱が打ち込まれる（南→）

ＳＤ877空掘跡確認状況（南東→）
建物柱掘形を切り込んで南北に延びる

同上　土層堆積状況（北→）

ＳＤ1325溝跡土層堆積状況（西→）
最上層がＳＦ1300土塁盛土の基底部となる

第４章　調査成果の普及と関連活動

１　遺跡見学会の開催

『払田柵跡（第121次調査）遺跡見学会』　平成14年11月２日（土）13時～15時

初雪の舞うあいにくの天候ながら、県内外より84名の見学者が来跡された。

２　顧問会議の開催

第55回　平成14年10月31日（木）

第56回　平成15年３月３日（月）

３　諸団体主催行事への協力活動

発掘調査の現場や、政庁跡、外柵南門・大路周辺地域などにおいて、下記諸団体などの遺跡視察・研修・見学会に対し、払田柵跡の説明や調査実習・体験を実施・支援した。

秋田県埋蔵文化財センター南調査課新任職員研修（４月９日・23日）、能代市史編纂室・能代市教育委員会社会教育課（５月５日）、秋田市立泉小学校６年１組・２組・３組（５月７日）、かながわ考古学同好会（５月31日）、盛岡市教育委員会（６月１日）、NHK秋田放送局「てれびこまち」取材スタッフ（６月５日）、大曲小学校同期傘寿会（６月17日）、㈱ナカノアイシステム（６月19日）、秋田市立明徳小学校60期同級会（６月19日）、パリノ・サーヴェイ㈱（６月20日）、仙南村教育委員会（６月20日）、秋田県民カレッジふるさと地域学コース受講者（７月11日）、秋田大学教育文化学部教職課程実習（７月29日）、市町村埋蔵文化財担当職員研修A課程（７月31日）、秋田大学企業・行政研修（８月５日）、男鹿市脇本城跡懇話会（８月28日）、東京大学文学部（８月30日）、大規模遺跡調査連絡会ＯＢ会（９月１日）、パリノ・サーヴェイ㈱（９月10日）、神戸山手大学人文学部（９月10日）、雄物川町教育委員会（９月10日）、秋田東高校校外学習（９月25日）、秋田県立博物館（10月８日）、奈良県立橿原考古学研究所（10月25日）、本荘市教育委員会（11月21日）

４　調査報告書のデジタル化事業

秋田県教育委員会で刊行した「秋田県文化財調査報告書」のデジタル化（ＣＤに記録保存）事業を、秋田県緊急雇用創出特別基金を活用して実施した。

名称：秋田県文化財調査報告書データベース化事業

期間：平成14年８月12日～平成15年３月14日

５　文化財調査への協力（赤外線テレビカメラの操作・指導）

男鹿市脇本西念寺・増川八幡神社　　平成14年４月25日

中仙町小沼神社所蔵奉納絵馬「皐月」　平成14年７月22日

６　中国研修生の受け入れ

平成14年10月17日～18日

研修生　趙 雪野（甘粛省文物考古研究所）　王　勇（甘粛省博物館歴史考古部）

研修内容　払田柵跡発掘調査実地研修

７　新人職員研修の受け入れ

平成14年４月２日～15日

研修生　秋田県埋蔵文化財センター南調査課職員・非常勤職員（新人職員）

研修内容　土師器・須恵器の拓本・実測

８　職員研修の受け入れ

平成14年10月９日～11月１日

研修生　秋田県埋蔵文化財センター南調査課職員・非常勤職員

研修内容　発掘調査実地研修（第121次調査区内）

９　市町村埋蔵文化財担当職員研修の受け入れ

平成14年７月31日

研修内容　第121次調査区における土層・堆積状況確認実習

10　平成14年度払田柵跡調査連絡会

平成15年３月７日（於：秋田県埋蔵文化財センター）

11　払田柵跡環境整備審議会（仙北町主催）への出席

平成15年２月28日（於：仙北町役場）

12　第４回東北古代土器研究会（青森大会）への出席

平成14年７月13日～14日（於：青森県埋蔵文化財調査センター本館多目的室）

13　第31回大規模遺跡調査連絡協議会への出席

平成14年11月７日～８日（於：三重県いつきのみや歴史体験館）

14　第29回古代城柵官衙遺跡検討会への出席

平成15年２月８日～９日（於：宮城県古川市グランド平成）

15　平成14年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会への参加

平成15年２月15日～16日（於：大曲市中央公民館）

16　報告・講演・勉強会

高橋　学「払田柵をいかに案内すべきか」　柵の案内人「ほたるの会」平成14年度第１回学習会
　平成14年６月26日　場所：仙北町ふれあい文化センター
高橋　学「払田柵、明らかになるその姿」秋田県民カレッジふるさと地域学コース
　平成14年７月11日　場所：秋田県埋蔵文化財センター
高橋　学「小沼神社所蔵奉納絵馬「皐月」を赤外線カメラにより墨書文字を読む」
　　中仙町平成14年度体験学習「ドンパン・サークル」（対象：中仙町内４小学校６年生）
　平成14年８月３日　場所：中仙町立豊岡公民館多目的ホール
高橋　学「十和田火山とシラス洪水がもたらしたもの」十和田湖が語る古代北奥の謎シンポジウム
　平成14年８月10日　場所：小坂町交流センター・セパーム
高橋　学「払田柵跡とは何か」　よみがえる平安の柵　蝦夷ほたるを飛ばす会
　平成14年10月18日　場所：秋田県埋蔵文化財センター（対象：仙北北小・南小５・６年生）
高橋　学「払田柵跡（第121次調査区）で検出された鍛冶関連の遺構群」北日本の鉄研究会
　平成14年10月26日　場所：秋田県埋蔵文化財センター中央調査課（秋田市）
高橋　学「払田柵跡・本年度の成果について」仙北町史談会定例会
　平成14年12月17日　場所：秋田県埋蔵文化財センター
高橋　学「払田柵跡－平成14年度調査概要」第29回古代城柵官衙遺跡検討会
　平成15年２月８日　場所：宮城県古川市グランド平成
高橋　学「仙北町・千畑町払田柵跡（第121調査）」平成14年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会
　平成15年２月16日　場所：大曲市中央公民館

17　資料の貸し出し

岩手県水沢市埋蔵文化財調査センター『胆沢城－蝦夷交流の舞台』
　　胆沢城造営1200年記念特別企画展　　平成14年８月10日～９月29日
　貸し出し資料：墨書土器（須恵器高台付坏・底部に「夷」カ）第107次調査区出土

18　史跡払田柵跡の現状変更

当事務所では、史跡の管理団体である仙北町と協議・協力の上で遺構と歴史的景観の保護に努めている。しかしながら、やむなく史跡内の現状を変更する場合には、申請者及び関係機関と遺跡保護のための協議を重ね、遺跡への影響がない範囲で最小限の現状変更に伴う調査を仙北町と行っている。

平成14年度の現状変更申請は下記の３件（建物改築・住宅改築・道路舗装）であった。いずれも地下の遺構等に影響を及ぼす掘削ではなく、工事に伴う立会調査を行い、記録を残した。

番号	申請者	／申請地	／現状変更の理由	／対　応
１	戸澤　成章	／千畑町本堂城回字百目木106	／建物改築	／工事立会（４月３～５日）
２	越後谷哲也	／仙北町払田字真山７	／住宅改築	／工事立会（６月17日）
３	千畑町	／千畑町本堂城回字百目木	／道路舗装	／工事立会（３月13日）

報 告 書 抄 録

ふりがな	ほったのさくあと　だい　　じちょうさがいよう
書名	払田柵跡　第121次調査概要
副書名	払田柵跡調査事務所年報2002
巻次	
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第364集
編著者名	高橋　学
編集機関	秋田県教育庁払田柵跡調査事務所
所在地	〒014－0802　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地
発行年月日	2003年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ほったのさくあと 払田柵跡	あきたけんせんぼくぐん 秋田県仙北郡 せんぼくまちほった 仙北町払田 せんはたまちほんどうしろまわり 千畑町本堂城回 調査地点は 仙北町払田字 長森	53429 53432		39度 27分 57秒	140度 33分 11秒	第121次 20020603 ～ 20021129	910㎡	学術調査

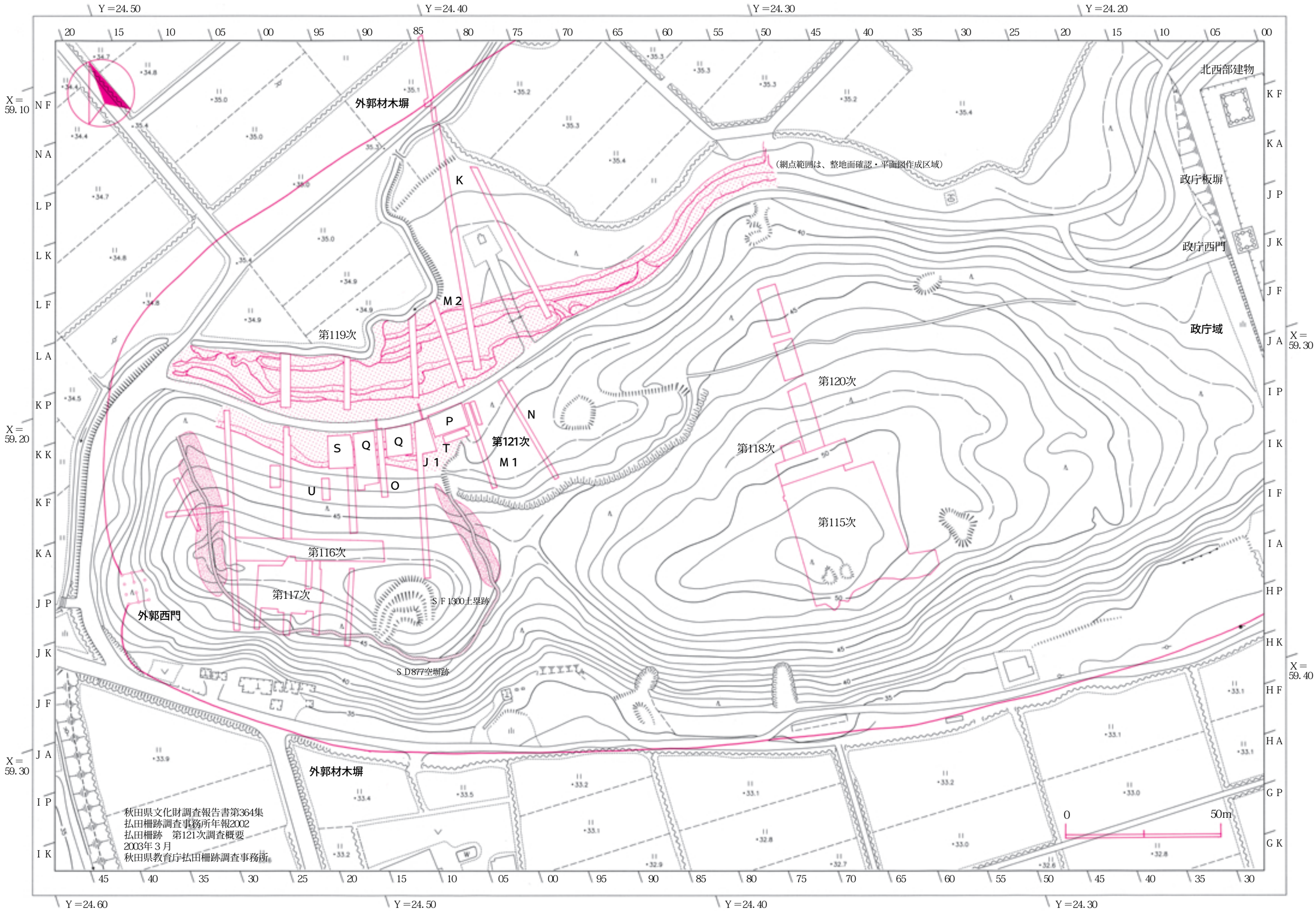
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
払田柵跡 第121次	城柵	平安時代	掘立柱建物跡、竪穴住居跡、竪穴状遺構、鍛冶炉、炭窯跡、焼土遺構、土坑、溝跡、柱穴列、材木塀跡	須恵器、土師器、瓦、木製品、土製品、鉄製品、銅滓、石製品	
	墓域	中世 （鎌倉時代）	空堀、竪穴状遺構、土坑、道路状遺構	須恵器系陶器壺・擂鉢、白磁、青磁、瓷器系陶器	
		縄文時代	陥し穴	縄文土器・石器	
		近代	馬車轍跡		

秋田県文化財調査報告書 第364集
払田柵跡調査事務所年報2002

払田柵跡

第121次調査概要

［印刷・発行］
2003年３月
［編 集］
秋田県教育庁払田柵跡調査事務所
〒014-0802 仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地
電話(0187)69-2442 FAX(0187)69-3330
［発 行］
秋 田 県 教 育 委 員 会
〒010-8580 秋田市山王三丁目１番１号
電話(018)860-3193
［印 刷］
秋田協同印刷株式会社



付図　長森丘陵西部の地形と第121次調査区配置